

第二章 花開く江戸の園芸文化

満開の桜をながめつつ、親しい仲間と飲食を共にする花見の原型が庶民に浸透したのは江戸時代のことでした。梅見や花見、秋の紅葉狩りなどは、現代にも通じる楽しみですが、江戸時代の人々は冬の枯野や雪景も身近な楽しみとしていました。

第一節では人々が四季を楽しむ姿を採録しました。自然に生まれた名所はもとより、人の手によってできた名所に出かける楽しみを描く史料や、暮らしの中で植物を植え育てるという、生活の中にある園芸を、町名主斎藤月岑の日記から朝顔を例に取り、抄録しました。

第二節では、武士の園芸についての史料を集めました。公家や将軍に影響されての椿ブームが起こり、椿を介して文人たちが交流を深めたり、椿図譜の刊行などもその中で始まります。我が国で初めて記された総合園芸書も武士の手によるものでした。汐入庭園である浴恩園の作庭をした松平定信も庭園の桜の姿を図譜に残しました。大和郡山藩主であった柳沢信鴻も、隠居を認められた後は趣味人として生き、「宴遊日記」に詳しく生活ぶりを記しています。ここでは六義園の整備が整ったと思われる天明元年から遡っての二年間の日記のうちから、園芸に関係する記事を抄録しました。

第三節では、十九世紀前半から、旗本、御家人、富裕町人や文人を中心に奇品が流行した奇品園芸に関する史料を収めました。変わった色や形、あるいは斑入り植物を栽培し品評する趣味は、やがて身分の垣根を越えて民衆にも拡がりを見せ、投機の対象ともなりました。旗本でありながら奇品植物に傾倒した水野忠暁は、奇品の

育て方を記した書物の中で、いずれ起こる奇品の世界の腐敗を予想し戒めています。変化を愛で珍重する世界から、それが過ぎて「異様にして愛玩するに足らず」と言われるまでに至った奇品園芸の世界を紹介します。

第一節 四季折々の楽しみ

35 江戸はさがながら花都―江戸町衆花を愛する事―

「慶長見聞集」巻之九
三浦茂正（浄心）著
慶長〜元和年間（一五九六〜一六二四）

江戸町衆花をあいする事

見しは今、江戸の町人、とめるもまづしきも心やさしくありけり、わづかなる庭のほとりにも花木を植置詠給へり、誰とてもかゝる見やひこそ、ねがはしき事ならめ、一花ひらくれば四方の春長閑にて紅花の春のあした、こうきんしうのよそほひかや、りうこうそんが詩に「洛陽三月春錦のごとし」と作れり、げにも花故に里もひなひねば、江戸はさながら花都、匂ひふん／＼としておふさきるさに、花のすり衣色香に染ぬ人もなし、伝へ聞、だいご雲林院の花は、九重匂ひくんず、其比は君も君たる故政たゞしく、仏法王法さかんにして、花も香をまし、色も妙なり、此花を見る人は、うれひを忘れ、悦にあへり、去程に忘憂花、合歡桜と皇より号し給へり、今又目出

度御時代なれば、花も心有てや匂ふらん、若俄に山風野風吹来て、妙なる花をやちらさんと、硯薄紙をくわいちうし、花の下の狂仁雲に似、霞のことし、心々に詩をうそぶき、歌をずし給へり、(後略)

36 東都花名所一覽

「東都花候一覽」
慶応二年(一八六六)

(袋表書)
「東都花候一覽」(朱文丸印)
「本石町二丁目長沢調布」

東都花候一覽

梅 ○寺島新梅やしき○飯倉天満宮○今戸八幡宮境内

東□屋蒲田村 右は正月十五日頃よりさく

杉田ハ四五日はやし○亀戸梅屋敷臥龍、正月廿三日頃方

○比岸桜ハ□□日暮里○小石川伝通院

右は二月十五日頃より

○ひとへ桜、上野・谷中七面・駒込吉祥寺・浅草花やしき

小金井、二月廿日ころより

○又上野・山王□□墨田川の堤○木母寺辺○飛鳥山

王子金輪寺門前、二月廿九日頃より

○八重桜ハ上野谷中日くらし王子瀧の川根津権現

渋谷金王桜、右二月廿日頃より

桃 ○大師□□□の屋墨田川の堤上野坊中谷中天王寺

右三月二日頃より

牡丹 ○深川永代寺^{少今}○寺島百花園・西か原牡丹屋しき

染井植木や、右何れも三月廿三日頃よりさく

藤 ○亀戸天満宮○佃島住よし、四月廿二日ころ

菖蒲 ○堀切花も見事也、四月廿六日頃

蓮 ○不忍池○赤坂ため池○同御門外○木母寺、六月十六日頃方

秋七草○寺じま村花やしき○浅草寺奥山、七月十四五日頃より

萩 ○七艸の中や、おそし○花やしき○三めぐり社内○秋は二も

あり

亀戸の萩寺今ハ花少し、七月廿八日頃方さかりなり

菊 ○巢鴨○染井○寺島花やしき○浅草花やしき○谷中団子坂

其外所々九月廿四五日頃より

紅葉 ○上野清水車坂○谷中天王寺○瀧の川○根津権現○品川東海

寺

右は十月廿八九日頃○海晏寺ハ二三日おそし

月雪 ○愛出る所なしといへども月ハ大むね水 よる○雪ハ山ニよ

る、されと隅田川及深川木場辺又ハ上の清水舞台よりのけ

しき事ニよろし

○十日のあめ、五日の風に花もみち咲て、うつろふ時もたかハす

丙とら春

三友軒蔵印
(三友軒)

37 四季折々の花名所

遊観類

『武江産物志』
岩崎常正(灌園) 著
文政七年(一八二四)

〔梅〕 本所梅屋敷〔亀戸寺島立春より三十四五日目ニ開ク〕 臥龍梅
〔亀戸同時〕 杉田の梅〔神奈川立春より廿五日頃開〕 蒲田梅〔大
森立春より三十日位〕 亀戸天神境内 難波梅〔浅草自性院〕 簞
の梅〔はしバ法源寺〕 鶯宿梅〔高田南蔵院〕 御殿址の梅〔高田
南蔵院〕 茅野の梅〔増上寺山内〕 栄の梅〔牛込宗参寺〕
〔桜〕 上野山王社前〔ひとへのひがん桜 立春より六十五日ころより
ひらく〕 同清水観音堂後 同山門の前 同大仏堂前 同慈眼堂
同寒松院 同護国院〔ひがんしだれ〕 同〔谷本門清水門内寺院ひ
がんしだれ〕 同車坂〔ひとへ〕 糸桜〔増上寺〕 伝通院大黒社内
谷中善照寺〔ひがんしだれ〕 根岸西龍院〔ひがんしだれ〕 根津権
現 養福寺〔日暮里〕 谷中七面境内〔ひがんしたれ〕 乗円寺〔鳴
子村ひがんしだれ〕 長谷寺〔麻布〕 光林寺〔麻布〕 麻布広尾〔木
下屋敷〕 右衛門桜〔大久保柏木村〕 雲井桜〔伝通院寮舎〕 駒込
神明前〔ひとえひがん〕 文箱桜〔市ヶ谷火ノぼん丁〕 芳野桜〔上
野〕 犬桜〔上野〕 秋色桜〔清水御供所〕 感応寺〔谷中〕 瑞林
寺〔谷中〕 飛鳥山〔八重立春より七十日頃〕 隅田川〔同上〕 王
子権現 根津権現 御殿山〔品川〕 小金井〔玉川上水辺立春より
六十日余〕 広福寺〔玉川〕 千手院〔千だがや〕 深山元八幡 大

井の桜〔品川来復寺常蓮寺ニあり、立春より七十七八日頃〕 塩竈
〔高田明神〕 金王桜〔春山教光院〕 兼平桜〔小日向〕 延命桜〔品
川来福寺〕 泰山府君〔三田〕 千本桜〔浅草〕 浅黄桜〔感応寺長
命寺〕 歌仙桜〔深川八幡〕 百枝桜〔谷中妙林寺〕 九品桜〔田ば
た六あみだ〕 母衣桜〔西ヶ原〕 八重垣〔神田明神〕 十月桜〔王
子権現〕
〔桃〕 桃園〔四ッ谷中野中里立春より七十日頃〕 大師河原〔立春より
六十日余〕 隅田川堤 築比地〔葛飾郡〕
〔梨〕 隅田村 下総八幡〔市川向〕 生麦村〔川崎〕
〔柳〕 印の柳〔隅田川〕 颯瀟柳〔麻布善福寺〕 夫婦柳〔両国の南〕
見帰りの柳〔吉原〕
〔榊棠花〕 金性寺〔押上、俗ニ山吹寺といふ〕 蒲田新梅屋敷〔中ノ和
中散〕
〔桜草〕 紫雲英 戸田原 野新田 尾久の糸〔れんげさう すみれあ
り〕 染井植木屋〔立春より七十五日位〕
〔牡丹〕 西ヶ原牡丹屋〔立夏三日頃〕 深川八幡〔別当園中〕 上北沢
村〔左内園中〕 亀戸社内〔千年大牡丹あり、天明の洪水ニ枯る〕
〔躑躅〕 石巖 染井植木屋〔立夏より三日頃〕 大窪辺 日暮里 上野穴
稻荷 音羽護国寺 千手院〔千だがや〕
〔紫藤〕 亀戸天神〔立夏より十五日比〕 佃嶋住吉社前 円光寺〔根
岸藤寺〕 伝妙寺〔小日向〕 鈴森八幡〔今ハなし〕 上野山王 戻
り藤〔浅草熊谷稻荷〕
〔燕子花〕 根津社内 三囲社内 蒲田新梅屋敷〔中ノ和中散〕 木下
川葉師〔立夏廿日頃〕 牛嶋〔駒込千駄木〕 坂植木屋〔菊類多し〕

石竹^{せきちく} 本所植木屋

牽牛花^{あきがほ}〔下谷本所〕 花形の変りハ〔孔雀 乱獅子 梅咲 桔梗

咲 ちゞミ 茶台 采咲 八重孔雀 薄黄 牡丹咲 龍胆咲 吹切

咲 糸咲 風折 劍咲 いざりす 眉間尺 巻絹 薩摩紺 絞り

類〕 葉形のvariハ〔孔雀 龍の眉 龍田川 葵葉 黄葉 松島

柳葉 唐糸 鳳凰葉 柳葉 宇津川 いさはる 南天葉 七福神

芙蓉は 金剛獅子 銀龍 兎葉 円葉 紅葉は 通玄仙 破レ柳

薯葉 山鳥 石花 木立〕

卯の花 野口小金井目黒九品仏の辺

蓮 不忍池〔六月中〕 赤坂溜池 池の妙恩寺〔下谷〕 向島白鳥

の池 増上寺赤羽橋内

胡枝子花^{はぎ}〔八月節〕 柳眼寺〔柳島萩寺ト云〕 清水寺〔浅草〕

正燈寺〔浅草〕 観音奥山〔浅草〕 三囲稲荷

菊 染井植木屋 巢鴨植木屋〔駒込千駄木〕 坂植木屋 御駕籠町

麻布目黒青山辺 本所〔寺島小菊もあり〕

紅葉^{もみじ} 海安寺〔品川〕 東海寺〔品川〕 正燈寺〔浅草〕 日暮里青

雲寺 上野山中 根津権現山 瀧の川弁天 夕日山紅葉〔目黒明王

院〕 直間の紅葉〔真間弘法寺〕 高尾の紅葉〔山谷土手の西方寺〕

高田穴八幡 隅田川〔秋葉〕 百哥仙〔駒込千駄木〕 坂植木屋

38 松の名所・桜の名所・名木

一 名木類聚并拾遺 ○ 来歴ことく

○ 相生松^{あいせい} 上野吉祥 閣の傍

○ 頭巾松^{づきん} 御城内に あるよし

○ 船松^{ふな} 浅草三社の前

○ 斑女^{はんぢよ}か衣懸松^{きぬかけ} 向か岡松平 雲州館の内

増鏡^{かぐみ}の松 根岸宝鏡山円光寺に有、根より三尺ほど過て四方

へ枝葉さかへてたくひなき松也、此寺に名たゝる藤あり

○ 五石松^{ごこく} 駒込ノ先、 中里円勝寺

増千年^{ちとせ}の松 つくと八幡の前、そのかミ白旗のくたりし松也

補 大友^{おふとも}の松 牛込天神町のひかし、組やしき高野氏の地の内に

あり、豊後の太守大友氏ハ朝鮮の役に武備おこたり多きを以、秀

吉公より武州に退く、第宅ハ今済松寺の所也、此所ハ別荘の地、

庭前の松といひつたへたり、五・六周の林なりしか回録に失ひ、

今ハ若木也

○ 千年の松^{ひか} 高田毘沙 門堂の前

○ 光り松^{ひかり} 高田穴八幡

○ 遊女^{ゆうぢよ}の松^{ちんさ} 千駄かや 寂光寺

○ 道玄^{どうげん}物見松^{ものみの} 渋谷より世田 ヶ谷へ行道

○ 一本松^{ほん} あさぶ

『続江戸砂子』巻之五
菊岡沾涼撰
享保二十年（一七三五）

○ 龜子松^{かめこ} 上野寒松院の前

○ 首尾^{しゆひ}の松 浅草御蔵の内

○ 霞^{かすみ}の松 橋場法源寺

○ 道灌^{くわん}船繫松^{ふなづなぎ} 日暮里の山岸

○ 船繫松^{ふなづなぎ} 小石川御薬園

○ 鈴掛松^{すいかけ} 大くぼ内藤大和 守殿下やしき

○ 鎮座^{ちんざ}の松 八幡門前

○ 鞍懸松^{くらかけ} 渋谷八幡

○ 銭懸松^{せにかけ} 代々木

あさふ所不詳

○円座松 増上寺山下谷
○袈裟懸松 芝西応寺
○綱駒繫松 三田松平隠
○鷹居松 句ひ松、こし
○荒磯の松 かけ松共云 目黒
○増梶原松 すゝの森の磯
○五本松 品川さめ
○来迎の松 小名木川通
○神水の松 請地村秋葉
▲松栢為二百木長二而守二門閭一 史記亀策伝二見 ○松ハ久しく寿をた
もつ木也なるかゆへにまつと訓す、もとま通音也、合壁事類松ニ
二針・三針・五針アリト云 ○松脂地に入ル事千年 茯苓とす、万
年にして琥珀とす程子の説 ○松に雌雄あり、茯苓ハ雄松より生
す、松茸ハ雌松より生すと云 ○肥松又油松と云、常の松のよく
肥たる也、此松をやうじにすれば齒かたうこかす、齒の葉なり
といへり ○富士松、富士山に多し、又信州にもあり、葉ハ五葉
に似てみぢかし、冬に至、葉落る、紫赤の花さく松の種類也 ○
そなれ松、生傾きたる也、又ひねたる松をも云藻塩草二見須磨の
浦にそなれ松といふあり、予一とせ須磨におもむく時、此松を問
ふ、里人の曰、一木にあらず、此浦の松すへてそなれ松也、行平
都へ帰り給ふ時、此浦の松、名残をおしミ枝葉ミな東へなびくと
也、誠に里人のいふことく、毎松がえ東へ垂たり、それより高砂・
鴨尾辺の松を見るに、ミなそなれ松也、考ふるに西土ハ常に西風
はけしき所なるに、此辺ハ砂地の和なるゆへ吹傾也

三 桜樹の部 来歴前集にあり
○吉野桜 上野にあり
○糸桜 上野慈眼堂
○百枝桜 谷中妙林寺
○母衣桜 西か原六あみた
○増塩竈 高田天神
○金王桜 渋谷八幡
○右衛門桜 柏木村
○糸桜 増上寺廿四
○増延命桜 日御仏殿
○増泰山府君桜 品川来福寺
○盛衰記 三田松平 主殿殿御館にあり、八重桜の速き花也
云、桜町中納言成範卿、花のさかりの短きをなげき、桜の
ため泰山府君の祀りを行ハれしより此名ありと也
○補 浅黄桜 谷中感応寺にあり、八重にして蒂青し
▲桜ハ本邦第一賞翫の花也、中華にはなきよし、延宝年中に長崎へ
来りし何清甫と云から人いひけると也、文選沈休文か詩ニ、山
桜発欲然註二果木ノ名花、朱色如火ノ欲然也司馬温公の詩ニ、
紅一桜一零一落一杏一花開と有、中華にて桜といふハ朱花にて日本の
桜とハ異なりと云り、中華にハ書を刻むに梓を以彫すと也 ○朝
鮮にハあるよし、一とせ朝鮮より漂来ル船の笥柙に日本の桜をし
たり、其木の花を問ふ、答て云、二・三月淡紅白花ひらく、愛す
へしと云シと也 ○桜ハ種類多し ○彼岸桜ハ常の桜より花小さ
し、花の開く時、葉いまだ生ず、常の桜より十余日早 ○姥桜
ひかん桜につゝゐて花開く、是も其比葉生ず、葉なきによつて名

とす ○雲珠桜 別にあらず、常のさくら也、うずハ飾鞍の具也
鞍馬の山といふにそへてよめる也藻塩草ニ見 ○墨染桜 是も常
の桜也、京深草にあり、墨染の寺といふ日蓮宗の寺也、仁明天
皇崩し給ふ時、僧正遍昭の詠る所によりての名也

古今 深草の野辺の桜し心あらはことしはかりハ墨染にさけ
岑雄ハ遍昭の俗名也、素性法師ハ岑雄の子也、又深草の帝ハ仁
明帝也

○八重桜 奈良より起る、伊賀国花垣の庄ハ八重桜の領地也ト云

○糸桜 ひかん桜より花しはらくおそし、唐人ハ是を垂絲海棠とい
ふ、もろこしよりわたりたる木也 ○緋桜 八重にして蒂赤し

○塩竈 おそさくら也、はまだ見事なりといふ心也といへり

○犬桜 花ハ桜に似て劣れり、おなしころ花さく、是ハ別種也

○熊谷桜 ひかん桜に先立ツ、八重也、花ハさくらに似て是も別種
也

○吉野桜 禁より咲そめて奥の院の峯につく、その盛り一月の間
也

四 雑樹の部

○劈掛桜 上野洞稻荷

○衣装桜

王子村

○印の桜 溜池のうへ

○袈裟懸桜

目白不動

○姉尾駒繫桜 渋谷

○神木桜

高田三嶋の神木

○太平桜 亀戸梅やしき

○道灌手植桜

国府台総寧寺門前

○補神木桜 牛込御門の内、

筑土の神木、前集に赤城とあやまる

○印の柳 すミタ川

○颯灑柳

麻布善福寺

○夫婦柳

両国の南
なには橋

○三本榎

浅草寺

○楊子杵

麻布善福寺

○千歳杉

品川東海寺

○高野槇

かうがい橋
長谷寺

○椿山の椿

牛込、一本
にあらず

○杖銀杏

麻布善福寺

○神木銀杏

浅草かや町八幡

○影向の槐

浅草一ノ権現

○鑑摺の笹

すだ村

○三股椿

牛込宗参寺にあり、

根より四・五尺過て三方へひら

く、高さ五・六丈の大椿也

○沙羅双樹

同宗参寺にあり

○八入楓

三田、松平主殿頭殿御館にあり、前に云桜と此二樹、

羅山子東明集に詳也、○八入と云ハ、物を一度染るを一入といふ、

二たひ染るを二入と云り、紅楓の色八度の染色に比す故八入と称

ス

○補相生樟

小村井吾妻森の神木也、此木の枝葉を煎服すれば諸

病を治すといひつたへて、庵主に枯枝を乞求る人あり、はなはた

匂ひふかくその香樟脳也、▲樟と楠ハ一類二物なり、樟ハ香つ

よく木心黒赤也、樟脳を煎とあり、すなハ此神木の樟也、一品

はいぬくすといふ、香よハく色も赤黒ならず、○楠の石になり

たるあり、木理・節そのまゝにありて石よりおもく石より堅し、

これを敲に金声あり

○亀戸の藤

天神のみたらし

○佃の藤

住吉の社

○山玉の藤

上野

○根岸の藤

円光寺

○増伝妙寺の藤

小日向清水谷、むかしハ名におふ藤也、今ハ老木

となりて英もみちかく、さして見所あらされとも、名木のむかし

残りて温る人多し

○増戻り藤

浅草熊谷稻荷社の傍に有、享保始のころ、境内弁天山の

水石を置の時、此藤を池の辺へはこひ植るにほとなく枯たり、時に熊谷社の堂司見性坊夢ミらく、我か藤をいかにしてか他へ植るのいはれなし、すみやかに元の地へかへすへしといふ事、兩度におよふ、よつてその枯たるを以前の所へかへし植るに、幾ほとなく活て枝葉さかへ青葉を見せたり、此藤今に存す

○高尾か紅葉 土手の西方寺 真間弘法寺

○海晏寺紅葉 一本に 品川 一本に 下谷

○夕日山紅葉 一本に 目王院 一本に 浅草慶印寺の前

○片葉の芦 あらす 明王院 片葉の芦 同馬道ひし屋長や

○緋の衣ほたん也 上野御本坊 業平竹 中の郷なり平天神

○増影向竹 上野中堂の前にあり

往昔比叡山におみて、八幡・春日影向ならせ給ひし所へ生じたる竹なりといへり、一説に天竺祇園精舎の竹を宸旦の天台山へ

うつされしを伝教大師持来り、比叡山中堂の前に植おかれしを東叡山にうつすともいへり、又説、伝教大師の持来り給ふ所の三

国伝来の竹ハ、比叡山竹林院にありといへり、此影向竹といふハ

葉のさき丸く跡先なきやうにて常の竹葉とハ異也

○増青葉の紅葉 虎の御門、内藤備州侯屋敷にあり

此楓紅葉せず、よつて青葉のもみちと称す、寛永のころ 御成の

みきりうへさせ給ふと也、是当館の大なる矩模とす

39 江戸十八松・十一松

江戸十八松并十一松

江戸十八松

梶原松

鷹居松 腰掛松とも 白松とも

三鈷の松 今枯てなし

一本松冠ノ松とも云

遊女ノ松

鈴掛松

円坐松

袖すり松

光松

千とせの松

亀子松

船繫松

五石松

お行の松

霞松

妙見松

首尾ノ松

「江戸十八松并十一松」

大田南畝著

寛政四年（一七九二）

大井来福寺

目黒滝泉寺石坂下

二本榎高野寺

あさぶ

千駄谷高耀山寂光寺

千駄谷八幡門前

龍巖寺

大久保大草やしき

穴八幡

高田水いなり毘沙門堂前

上野寒松院前

日くらしの里青雲寺

中里光明山円勝寺

根岸

橋場法源寺

本所柳島十間川妙見山法性寺

浅艸御蔵ノ後口

五本松 江戸砂子ニ云、昔ハ五本
有しか枯れたりといふ

外

上意の松

船松

鎮座松

物見松

朝日松

けさかけ松

火よけ松

龍燈の松

鐘鐺の松

円坐松

鏡松

大木にて下枝茂り栄ふ、鏡松と云札を建、哥有、幾千とせ
さかえんてらの鏡松くもらぬ御代の影をうつして

40 梅の名所

○梅

梅屋鋪立春より卅日メ 本所亀戸天満宮より三丁程ひかしのかた清香
庵喜右衛門か庭中に臥龍梅と唱ふる名木あり、実に龍の臥たるが

『江戸名所花暦』巻一
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文化十年（一八三三）

如く、枝はたれて地中にいりてまた地をはなれ、いつれを幹ともさ
ためかたし。にほひは蘭麝をあさむき、花は薄紅なり、園中梅樹
多しといへとも、殊に勝れたり。四月の頃にいたれば、実梅と号て
人々又なかむ

吹くれハかをなつかしミ梅の花

ちらさぬほと春風も哉

心あらハとハまし物を梅か香に

誰か里よりか匂ひきつらん 俊頼朝臣

亀戸天満宮境内同 亀戸村にあり。境内梅樹多きなかに、飛梅の稚

木あり、築紫よりはにうつす。菅公左遷の時、うめを詠し給ふ歌

古知布加波爾保比於拳世与宇米乃波奈阿留志那之登底波婁那

和須戾楚

是によつて、梅とんて謫所の庭に生すといふ

御嶽社同 同所にあり、この境内にもうめあり、此神は菅神の

師、法性坊阿闍梨の靈神なり、卯の日に参詣あり、とりわけ

正月の初卯日は、はつ卯と号て人々群集す

百花園同 寺島村のうちなり、白髭明神のわき、俗呼て新梅屋敷

といふ、白梅おほし、諸木菓草のたくひ数多有、季候の所々に

いたす。園中に年中花たゆることなし

駒込鱧縄手 本郷通り追分の手前、組やしき外かこひの内にあり、

或説に、こはうなき縄手にあるへからす、むかし苗木をそたて

しところなれハ、苗木縄手なるへきかといふ、また往来曲行

してあれは、鱧縄手といふか

茅野天神境内同 芝増上寺地中、松林院に安置する処の天満宮の

境内、梅あまたあり

宇米茶屋 麻布三子阪にあり、一重の白梅なり、正月下旬寒暖に

盛りなり、外よりは遅し、古木なり、遊行他阿一海上人、このうめに題して歌あり

この花の色は白かね名に高く

千歳をこめてミのるところめ

麻布龍土組屋鋪立春より六、七十日メ梅樹、家ごとの入口にあるもあり、またハ後園にあるもあり

蒲田村同和名抄荏原郡大森の右のかた郊野に数多く文政のはしめのころ、梅木堂和中散よりなるをいふこの後園、ならひに往還の両側

へ梅樹五百本を植、見勢より北のかた技折戸をしつらひ、蒲田といへる二大字の額をかけたなり、野梅をのこらすこにあつめ、ひとめに見渡なり、その外、園中種々の花あり、なほ花の部分のところくに出す

杵田村同廿七、八日、東海道中程谷宿より金沢道の方へ一里ほど行ハ、民家のはた一面なり、実は種少く、専ら江戸にて是を賞翫す、花の頃は東都の遊客旅立ちぬ

41 春の麗しきを賞讃するのみにあらず実を獲る

『広益国産考』八之巻

大蔵永常著

安政六年（一八五九）

図版12

国産考八之巻

大蔵永常著

○梅を植て農家の益とする事

諸国に梅を植置詠とするハ実をとるにあらず、花の艶しきを賞翫するのミなり、又実を賞し梅干とするハ、珍花を撰ハず、実大粒にして肉厚く種ちひさきを植る事也、いつの頃よりか大坂近辺に治左エ門と云梅ハ花薄紅の八重にして艶しく紅梅の八幡といへるもの、開口に同じくいと見事也、大坂に便宜よき所ハ註文して取寄植給ふべし、池田木の部といへるハ植木を作りて諸国にひさぐを業とする一村也、扱此梅ハ梅干として出さざれば益にハなるべからず、浪花にてハ是を何千石といへる程干して小き樽に詰江戸へ送る事夥し、近頃遠州相良にて大坂の通に小樽詰にして送るに一広益を得るよし○扱此梅干に製し様あり、梅の熟し過たるハ園れて費となれバ少し赤味さして賢き時とりて、酒の古樽に梅壺斗に塩三升のわりに漬、おもしろしつかり置、六月土用中におもしろしをとり水をよくミ干べし、干様ハほし場に砂ほこりの来らざる平面の小石なき所にうすき藁簾を敷、夫に入一ならびに重ならぬやうして干べし、此干簾厚きハ梅に色付ず、薄簾ハ地氣を通す故敷色ほんのり赤ミさして艶よし、能天気ならバ二日程にて宜しけれども、日勢ぬるき時ハ三四日も干べし、扱其干揚たるをすくふ樽に詰四方に細縄をかけ諸方へ送るべし○又小田原名物の紫蘇巻梅ハ右の如く青漬にしたるを紫蘇にて巻也、扱紫蘇の仕立やうハ丸葉の両面を蒔育へし、縮緬ハ悪し、七月盆後頃能成長したるしそをこきあげ葉をむしりて重ね塩押にして十日斗置、葉の和らかなる頃、右青塩漬の梅の水をしたミ捨、

紫蘇の葉一枚づゝを巻て先ぐりに壺か桶に詰べし、然して一ヶ月程置バ青漬の梅十分紫蘇汁に漬たる如く見事に染る也、小田原漬ハ決して紫蘇汁につくる事なし、是名物也○爰に江戸本庄亀戸に梅屋敷とて有、此所の梅ハ地をはひて龍の形ちあれば臥龍梅とて一種の名木也、寛政文化の頃、東都に俳諧を楽む一老人あり、隅田川の辺りに地面を求め草菴をむすび其四方に梅の木の一二尺廻りにもあまれを三百六十本調へ植置けるに新梅屋敷と称し、春ハ男女群集せり、其老人予に語りて曰、吾風流に梅を植しにあらず、壹本の木に梅の生る事、銀四匁ならしにハあるべし、吾が一日の暮し方銀四匁にてハ足りざるに依て一年の日数に植たりとなん、梅も能作れバ、壹本にて銭貳貫文位取上るもの也、依之梅を植右記す如く、梅干として都会に出しひさぐへし、又我住る屋敷内に無用の樹を植んより、五六本づゝにても植置なバ五六人暮しの塩代ハ取もの也（後略）

（図版部分文字）

「梅実を

四斗樽に漬て

諸国へ

運送の図」

42 上野の花見、桜辺に歌い、松下に宴す

「国史館日録」四
林鷺峯 著
寛文六年（一六六六）三月
関連図版01・14

十六日（中略）頃間城下士庶往来絡繹見東叡山花或歌于桜辺或宴于松下張幔幕鋪筵氈老少相雜良賤相混又有僧有女各引類伴群朝午晚之間如堵如市

【漢文訓読】

頃間城下の士庶の往来に絡繹として、東叡山の花を見る。或いは桜辺に歌い、或いは松下に宴す。幔幕を張り筵氈を鋪き老少相雜じり、良賤相混ず、又僧有り女有り。各類を引き群を伴れ、朝午晩の間堵の如く市の如し

43 上野の花見 桜花路を挟み千松色を交じふ

「国史館日録」十
林鷺峯 著
寛文八年（一六六八）三月
関連図版01・04

十三日（中略）此山江城第一之佳境桜花挟路千松交色満城士女成群桜下松間張帷幕陳酒肴歌舞遊宴不知幾処也大火災之後繁華遊賞如此乃知城下広大而人戸之多也

【漢文訓読】

此山江城第一の佳境なり、桜花路を挟み千松色を交じふ、満城の士女群を成す、桜下松間、帷幕を張り、酒肴を陳げ、歌舞遊宴、幾処なるを知らざるなり、大火災の後にして、繁華遊賞かくの如ければ、すなわち知る、城下の広大にして人戸の多きことを

44 上野の花見、法度を守り、鳴物・喧嘩なし

「紫の一本」下

戸田茂睡著

正徳四年（一七一四）

花ハ

東叡山 黒門より二王門迄の并木の桜の下にハ花見衆なし、東照宮の御宮の脇うしろ松山の内、清水の後まきはしらかして見る人多し、幕多時ハ三百余あり、すくなき時ハ二百あまり在、此ほかにつれだちたる女房の上着の小袖、男の羽織を弁当かゝげたる細引にとをして、桜の木に結つけてつりのまくにし、毛氈花むしろしきて酒のむ也、鳴物ハ御法度にて鳴さず、小哥上るりおどり仕舞いとかむる事なし、本町通町をはじめ、うとくなるもさみなきも、町かたにてハ、女房娘正月の小袖といふハしたてず、花見小袖とて、なるほと手をこめ結構ニだてなる物ずきにこのミたるを着て出る也、花より猶見事也、花の頃ハ空曇りて大かた昼過より雨ふる、しかれとも笠をさゝずよき小袖をすきとぬらして帰るを、遊山にも又手がらにもする也、花のさかりハ、どんどろめきの石橋からハ中々先へゆかれす、子細ハ江戸下町の者共筋違橋和泉殿橋を渡りて広小路へかりてくる、湯島小石川小日向筋の者ハ池のハたの町へかりてくるに黒門前からハ下谷からの見物人、谷中筋よりの人四方からのあつまりなれバひとつまりてうごきはたらきもならず、車坂からもあがり、屏風坂からものほれハ、上野の人こみあひおびたゝしきこと也、され共御法度を守り喧嘩なし、花ハ輪藏堂方仁王門への通り道

筋、西のかたニ句ひすくれたる桜在、遣使かよむ（後略）

45 花見の盛況、上野から飛鳥山へうつる

「銀杏栄常盤八景」

青牛老人著

宝暦十二年（一七六二）

銀杏栄常盤八景〇宝暦十二年板。二、

享保の比までは、花見は上野にきわまり、外に名所またあらしと人々おもひしに、元文のはじめ、飛鳥山にけをされ、いまの上野へ行人ハ、紙子ばをりのふる入道、かねもたぬはやらぬ医しやか、世をしのぶふかあミ笠のふじやの伊左衛門から釣りをとるやうなわろのミ。まん山いとさびしく、桜もうき世かこちがほなり。王子の流はおとなし川をいふに、石たゝみのしがらミ、せきくるなミとう／＼と、音のあるはいつわりか。飛鳥山とはいへと、万人の群集まばゆけに、鳥も飛ぬか山桜の下、よしず茶屋かこひ、うなぎ／＼といふは、あたらし桜をなまくさき、なせにけふりとなしたまふ。此春しだしの、かハラけなげ、ふもとへふう／＼風にまかせるは、光りん千鳥の書そこなひ、へたのなげたは、いたづらにおちで、くたけて物思ひ。〇下略。

46 飛鳥山の花見

『江戸名所花暦』巻一
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文化十年（一八一三）
関連図版02・15

飛鳥山同 浅香山とも 王子権現より南の方、芝山なり。八重一ト重の桜数千株を植させられ、花盛の頃ハ、木の間に飯の茶店をしつらひて群集す、遙に東北をなかむれハ、足立郡の広地眼下に見えて、荒川のなかれ白布を引ごとく、佳景いふはかりなし、

47 隅田川堤桜の景観

『江戸繁昌記』二
寺門静軒著
天保三〇七年（一八三〇）
関連図版03・16

墨水桜花

（前略）

曠原都と為るの後、堤を築きて桜を植ゑ、漸く繁華と為る。今は則ち上野を罩め、飛鳥（山名）に架し、御殿山の如きは遙に諸を下流に置く。花時の雑踏、亦復た江都の第一たり。若し夫れ白小已に孕み、新梅莊の梅迹を掃ふ。春風暢和し、薫暖人を困す。数里の長堤、桜花弥望し、淡々濃々、雲暗く、雪凝る。偶々西南を顧みれば、則ち或は訝る、風伯の好事、富岳千片の雪を吹き落し来るかと。東橋

より木母寺に至るの間、遊人織るが如し。只見る筆蹟師匠の群弟子を率るを。童男童女、一連数百、徐福仙菓を東海に求め、人間復た鬼子母神を見る。一人撃柝し、爰に以つて行を啓く。行粧一色、皆剪花を戴く。誠齋句有り。「一人人は挿む一枝の花」と。豈に七百年前預め此の間の風光を写せるか。兒女欣喜し、戯嬉して飢を忘る。紛々落花と斉しく飛び、躑々胡蝶と共に一様なり。又見る、宮女の伴を結ぶを。翠袖霞を披し、宮鬟雲を簇す。靚粧麗服、冶を競ひ妍を闘はし、各自に窃かに我が中老尾上（某侯の女官、院本鏡山に見ゆ）に比す。花を観るの間、肚裏暗に三升様（優人団十郎、三升と号す）の男子に撞着せんことを祈る。又大石義雄に擬する藩士輩有り。歩く、踉蹌、酔を声妓の肩に扶けられ、楚声にして歌ひて曰はく、

桜兮、桜兮と詠歌せられ、乱るゝ乱髪、乱れて麻の如し

と。古色の儒人腰に瓢酒を佩び、冠者の背、行厨任重く、童子六七、行々先生の悪詩を詠ず。今様の僧流、身に雨衣を穿ち（晴天雨衣、台家の通名）、袈裟は楮にして、變童の手に齎らす。上人の頭上、飛花徒らに黏す。野合娘は金夫の遊に従ひ、田舎爺嬢は馬喰坊の人に導かる。一日の遨遊、蓋し百年の性命を延ぶ。子母銭商も亦珠盤珠の外の遊を為さざることを得ず。（後略）

48 隅田川花見紀行

『清華閣模編』乙集第三十七冊

著者不詳

天保十一年（一八四〇）カ

関連図版03・16

梓弓弥生十日余り七日、王子わたりの花を尋ねむと、山本亘喬と共に立出ぬ、此日ハ朝またぎ空の気色あしく、雲うちおゝひて、花曇ともいふへきさまなれと、雨降出るハかの俳諧の祖翁か雪見にころぶ処までといひし、多葉子もとつきて雨のとゝのひなんとして出ぬ、高田水稻荷・宝泉寺と云る寺に入てミレハ、かたはらの山の上に毘沙門堂のあり、爰に火打して烟艸くゆらし休ミぬ、桜一本ふた木今を盛りと咲みつり、此毘沙門天ハ秀郷の陣中守護の御仏といふ、又此あたりに秀郷の旅立桜といふあるよし、山本の語る、この朽たる桜なとさもいふなるへし、されととかく旧りなん木共見えす、山を下りて境内を出、高田の馬場・山吹の里ハいつの程にか過て、面影の橋をわたるとて

打渡す里の柴橋むかしたる影をうつして名とやなりけむ

（頭書1）
長坂といふにいたる、此あたりいにしへ鎌倉街道にて、宿坂の関といひしよし、此坂の中段に俳諧師湖丁、其外の人の手向発句あり、石碑の表にハ太田南畝の狂歌あり、かたはらの岡に観世音の御堂の前に桜四もと五もと咲ぬ、若木なからしつかなれハ、中々におかし、かくて爰を出、田の畔を伝ひ行て山へ登る、この処富士の岳の眺望の地なれと、空くもりて見えず、田つら畑つら打越して、外山の御かこひの松、諏訪の森なと手に取る計にて、風景いわんかたなし、

（頭書2）
左のかたに木立茂りたるあハひより池のミえけれハ、畑打おのこに、向ひの社ハ何と申、誰人の下邸なるやと問へハ、番町なる酒井何がし殿のやしきと答ふ、又此池ハいかなる池にやと問ふに、何のいわれもなく、たゝ此わたりの用水のよし申ぬ、程なく感応寺にいたる、祖師の御堂ハ、おほやけ方修せられしまゝいと高くミゆ、祖師帰依の輩より桜千もと計植たれハ、折しもその花盛りなり

（頭書3）
思ハすも法の道芝ふミ分て妙なる花のさかりをそ見る

（頭書4）
雑子ヶ谷法明寺を過、枕の木立の下に、老たる女の茶あきなふ小家あり、かたへに腰うち掛けて、手してつかねたる飯なととり出て、ものし侍る、かの文にミえる僧都が好める芋頭に、最明寺入道の月見むとて、くまゝ求めしものぬりて、火にあぶりたるを乞てとうべぬ、かゝるいぶせきさまをみる人、いかに思ひ侍ん、なれと山本のぬしハ我難波津のはなちかきも、えいてきぬ頃よりの友なれハ、けふの細布むねあはぬ人と、うミやまのめつらしき味、ひものもてすゝむる方ハ中々にたのし、老たる女にもゝ代りとりせて出ぬ、しバし行ハ、うしろより我ともからを呼ふものあり、何やらんとミかへれハ、やすみし所に、かの飯つゝミし布をとり落しぬるを、かの老人の持て追かけ来るにそ有ける、げにも直なる老人、予と語りつゝ、落せしものうけとりて過ぬ、蓮来寺といふ寺のうしろに義経茶立の井といふありと山本のかたれハ、いざ尋はやとて行、此あたりハ古へ鎌倉道にて竹の下道といふ、今ハ賤の家の囲ひの中なるまゝ、その家に入て井を見せんことをこふ、年のよはひ七十計の女と、はたちを三ツ四ツも越へしとミゆる、此わたりハにげなき女何やらんものぬひしあたり、此家の柱、枕の皮のまゝにて、手斧の

跡ミゆ、げにもふるき家ゐそとほむれハ、老たる女のはし近ふ出て、昔のまゝなるよしほこり兒にこたふ、其井を尋見るに、苔なめらかにして、小さく生茂りたる中に、井のかたちあり、水もミへす、三十とし余り迤ハ里人の水汲しといふ

武士の昔を夢汲てしれその名もたへぬ山の井の水

頼朝腰掛松、井のかたはらにありしか、今ハかれしといふ、猶かの木の茂りたる中を通れハ、麦畑打つゝきたるこなたに、菜の花の咲つゝき、すり流したる薄墨色の雨雲ハ、北にはれてあかねさす、日影南にさし出てけれハ、雨具の重さをわすれていとあたゝかしとそ、あふぎ見る向ひの森のうちに雉子の鳴けれハ

恋ふるともなとかハ妻にあふことのかた山はやし雉子なくなり

(頭書5)
飛鳥山にいたる、松の村立たる中に、桜ハとく咲たり、此ほとのもうけとて里人の植しにや、若木の桜そこゝにあり、花の木かげのむしろに腰かけて、そこらうちなかめ

吹風もいとはぬ程の花さかりあすかの山のあすハしらねと

此山ハとしこと花の頃ハ、老も若きもつとふ中に、ことしハわきて稲荷の開帳とていと賑ハし、わきもこい赤もの裾引あげ、又蟹の子ならて、まくり手にしておとりありく若人もあり、かなたの床にハ三筋の糸にたハむれ、うそふきうたふ声いと塩からし、もののふハ馬にむちをそへて花をもよそにはしるあり、何ことにや、又長き刀横たへて、ゆきゝの人の妨となるをもしらてあゆミ来る、古人の句に、何ことそ花ミる人の長刀といひしも思ひ出られぬ、かゝる賑ハひこそ実にかしこき御代の春としらるれ、休らひし花の下を立いて、東のかたを望めハ、帯引たる計に川のミゆるハ、石川ならねと

霞わたりて、流れのなかハたへたるもおかし

春もはやみとりうつろふ川水を是や花田の帯と見るらむ

つくは山ハ雲にかくれてミえす、世の人ハ花見んとてつたふ中にたかへすを見て

賤か身ハ花をもよそにあらわ田をかへすゝもいとまなの世や

山の左りのかたをくたらんとするに、山本ぬしハ一の谷鶴越ともいふへき急なる坂をはしりくたらるゝに、我ハをくれ神のつきしにや、さきかけせんことも思ハて、こなたに諸人の行かふ坂を静に下りけるも、こよろきのいそちにもやゝ近き程なれあれと、独り心におもひけり、板橋をわたるこの流れの上に、雪の降つもりたるかたあやしむ計に桜の咲けるをミて、かゝる賑ハふ中に、いともしつけき花もあるものかなと、岸根の小ぎゝ分行てミれハ、水上とをくながれくる水せきとめんとて、石もてつミたる中落くる滝いと清けなり、向ひの山ハ権現の社、金輪寺のたかどのなんと岸にのぞミて見ゆ

よとみなぎ滝のしら糸くりかへし心を染る花の下陰

水上ハ樹々茂りあひて小ぐらく、水のミ白く流るゝさま、筆もて画かけるにひとし、程なく稲荷の山にいたる、鳥居の額ハ花山院内大臣愛徳公の筆也、石の段を登り神の広前にぬかつき、そこゝと打廻り見るに、四方の俳諧を好める人々の発句をあつめ額にかけり、こや神の心に叶ひて、人やしらす、納ものとかいひてさゝやかなる庭作りあるハ、青さしにて形ちもの作りたるなどあり、そが中に三臨の小かちのつるぎ打さま作れる人形、かたちひみなにもまさりてひときはハへありけり、はや午の下りにもなりぬれハ、昼のし

たゝめせんとて行に、名におふ海老屋・扇屋などいふ家あハ、もろ人の処せきまておし合て、腰かくへきやうもあらず、かたはらなるちさき家に入て、酒いさゝかくミかハし、しはらくやすミて心に思ふことゝもかたりて出ぬ、田つらにそふて十町余りもきぬるに、衆生済度のために、むつの仏を作れる、その一ツの寺の前に出にけり、春秋ひぐわんの比ハ、此仏に詣る人多しとなん、往來の人の労を休らふために茶などあきなふ家あり、よそじ余りの女、かたはらに五十近き僧の腰うちかけて、興ありげに女にたハむれぬるさま、僧にハにげなきわざかなと、あざ笑ひ行ゆきて川のはたに出る、この河ハ戸田川の向^すひ、すミた川の水上なり、こゝも橋なくして船渡り也、舟ハ向ひの岸にあり、声をかぎりによべと答へハなミの音計にて、口なしの色につゝみのなの花ハさかりなり

隅田川その水上の舟よバひいざことゝハん鳥たにもなし

良ありて渡守舟をこなたによせけれハ、やがてのり移りて、程なくむかひの岸につきぬ、堤を左りへ武・三町ゆけハ、野新田といふ渺々たる野原にいつる、此処小艸さまゝもえ出、咏めやる末ハ、雲につゝける計いはんかたなき地なりけり、こゝにさくら艸とて桜の花ひらに似たる草多し、根こめして扇のながめにせばやと、そこらあたり尋ぬる、ふくしやうのものもえ見へす、腰の刀にそへたる小刀とり出て、萱の根を分てもとむれと、根さしふかくて多くハ根ちぎれ、なれとからうしていさゝかとりえぬ

あかさりしけふの遊びのおもかげをうつして宿の明くれに見む
はや申の下りにもなりぬれハ、家居にかへらんとて川の西をミやれハ、日ハ西の空にさしかゝり、舟ハ真帆かけて風にまかせてはしる、

飛鳥山の十二景とて、旧るし世もろゝの歌人の咏哥ありしか、豊嶋川の帰帆とハ是ならん歟

こぎ出しかたハいつくぞ豊嶋川かへさハ風にまかす友船

もとのわたりを越して、又飛鳥川^山に至る、はや日もほのくれわたりけれハ、ひるの程とハたがひてむれぬし人々も家路に帰るや、松風の声のミさつゝとしてものさびし

にきわひし人目ハちりし飛鳥山かハる瀨瀬の名をや負けん

くるゝとも一夜やねなん飛鳥山花を心のしる人にして

今ハ急くに他なしとて山をくたる、馴れし道なれハ足にまかせて行に、いかに道たかひけん、予のしらざる処に出ぬ、猶行先覚東なく日もくれ、羽とりあやしき賤の家に有けれハ、いかて庚申塚ハいつらんと問ふに、内よりだミたる声して、此垣にそふて右へゆきねといらふ、をしへしまゝにゆく、程もなくその処にいたる、十七日の月も雲のひまよりさし出たり、一ときのあたへ千々のこりねとか口すさみ歩行に、便りよく春の一日もなかき旅路の心地して、おのれゝゝが家にかへりぬ

右の一卷ハ湯浅貞国・山本亘喬とゝもに、飛鳥山・すみた川^の辺り

なんと遊びしミちの記行^記なりけるを、横田茂雅へ見せられしに、

猶こと葉の美をそへられしまゝ是をも写し添つ

なミゝならぬ御ことの葉にもくつかけたるハ、げに心なき蟹の仕業と人のミるめもむつかしけれと、初めより思ふむね申せ、さなくハみせじ、たゝにかへしなは、和歌の浦の底意なき友とちの中とハ申まじきとて、せちに聞えけれハ、いなひがたくいさゝか申たる也、あまのたく縄操かへし、こハひが心え也なとそ心をきなく聞へしら

せ給へ、又ハ其品に於てわきまへさためあらそふも、学ひの道のひとすちと、くらき心にたとへし事記したるを思へハ、うつの山うつゝころならず、つたなき蔦のもミち葉、時ならぬ顔に染出てさむる時なくなん

茂雅

あすか山花のゆかりの艸つミし野辺をもけふハ居ながらに見る手折しハ終にやかれむことの葉の花よちとせのやとの家つと

按に感応寺と王子いなりの開帳ありしことを参考すれハ、天保十一年庚子の作なるへし

〔頭書1〕

〔長坂〕

〔頭書2〕

〔感応寺桜花〕

〔頭書3〕

〔老人トアリテハ男子ト聞フヘシ〕

〔頭書4〕

〔竹ノ下通〕

〔頭書5〕

〔新栽桜〕

49 真崎より見渡す隅田川、桜花雲の如し

〔花見の日記〕

大田南畝著

寛政四年（一七九二）

関連図版03・16

（閏二月）
十八日（中略）

真崎より墨田川を見わたせば、一帯の雲の如し。すみだ川のわたりをこえて、土手より大松のもとまで、十二本一重也。

松のもとより木母寺門前まで、右は柳、左ははな二十四本一重なり。十一本は八重なり。内一本右にあり。

すべて土手より松のもとまではまばらにうへ、松より寺までは並木にうへたり。一重の花十分の盛なり。花形大きく、帆たて桜に似たり。八重は後に植へし若木也。（後略）

50 隅田川堤、江戸第一の花名所

『江戸名所花暦』巻一

岡山鳥編・長谷川雪旦画

文化十年（一八一三）

関連図版03・16

隅田川堤 同七十日メ頃

隅田村 隅田の文字のかきさる古書に墨田川は江戸

第一の花の名所にして此花ハ享保の頃、依 台命植し処の物にして今も枝を折ことを禁るハ諸人の者の所なり、堤曲行に
して木母寺大門へ向ふ所左右より桜の枝おひかさなりて、雲の
うちにいるかと思ふはかりなり、この地は桜にかきらす四時と
もにいとよき地なれハ都より下りたまふやんことなきおほんか
たも、一トたひハ御遊覧ある也

51 品川御殿山、桜の壮観

「十万庵遊歴雜記」初編之中

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

関連図版04

（前略）春の頃は平原の地一面に桜咲揃ひし風情は、当所の一壮観と云べし、但此地海辺故外々よりは花少く早し、大方は立春七十日目頃を最中とす、尤年の寒暖にもよらんかし、中古より桜は吹折或は立枯と成りて過半少せり、されど眼下に舟の行違ふ蒼海は、一望の中に有、又遙に房総の山々を遠望し、海辺にして市中に近く、西北の方は白かね目黒等の耕地を見晴し、木立の間々に桜の満花せしは、滝の白糸と詠しも理りかや、又は菜の花の美しき絶景にして佳興有り、慶長年間より文化十一年甲戌年に至りて、貳百参年に及ぶとなん。

52 花見にも自由に出がたき遊女へも花の景色見せまほし

「吉原春秋」二度の景物

梧桐久儒著

文化七年（一八一〇）

関連図版17

中の町に花を植る事

久傳記^レ之

或老人の云、每年中の町に桜を植る事、其始りいつの頃より成りしや、慥なる旧記もしらねども、
（傍注）又云、享保の頃八月に閏月有し時、中の町へ生花をかざりしこと有し也

石井丹治守英といえる絵師ありけり、江の島弁才天を信じ奉り、毎月参詣いたしける、然るに寛延元年参詣の時、岩屋に通夜し拝し奉る所、岩窟中の銅像の弁才天、星霜を経て潮に波に打かくるまゝ、尊体破損し奉りけるを深くなげき、何とぞ志願を發し尊体を修覆し奉りたきと祈誓して、別当岩本院に申達して、しばらく修補の間江戸まで御預り申へきよし、念願とゞきて、守護し奉りて砂利場の宿に帰り、扨常に吉原にしたしき人々も多ければ、其事をかたりたのみけるに、或日みなく相談申べしと、中の町にて参会して、此事を申出しけるに皆々申されけるは、今日寄合の序相談する所、来年己巳年江の島御開帳もほどこかし、遠路なりといへども御修覆成就し奉りて、かの島に送り奉るべき事いづれも承知に候、こゝに乾什宗匠が江の島詣といふ江戸節の文句を綴れり、其全体は、

ちらさじと江の島守やかさすらん亀の上なる山ざくらかな

堯恵法師

江の島やさして汐路にあとたるゝ神のちかひのふかきなるへし

鴨長明

といへる本歌にもとづけり、然れば中の町に三月花を植侍りて、他へ花見にも自由に出がたき、遊女禿の面々へも花の景色見せまほしといへるより、花を植初て殊に賑ひける、于^レ時寛延二年己巳の春の事成りし、堺町にても此たびの中の町の風景おもしろきとて、舞台を中の町の景色に道具立いたし助六廓の家桜中村座にて、

助六 市川海老蔵

白酒売 沢村長十郎

総角 瀬川菊次郎

かんへら門兵衛 沢村喜十郎

髭の意休 市川宗三郎

浄るり 江戸太夫河東

三味線 山彦源四郎

新吉原仲の町にて初て桜を植る、則其けしきを道具建に造レ之、助六狂言の始メ、

是れよりして桜を植る事、年ことに絶ることなく、廓の春色世々に盛なり、今文化七年に至るまで六十二年と聞え侍ると申、

53 吉原を彩る仲之町の桜・花菖蒲

「守貞謄稿」巻二十二

喜田川守貞著

天保八年（一八三七）以降

関連図版17

仲之町ノ桜 毎歳三月朔日ヨリ仲之町往来ノ正中ニ桜樹ヲ植ヘ列ネ、左右に埒ヲ結フ、晦日ヲ過レハ拔去り、明年又新ニ植ル也、此挙寛延二年ニ始り、今ニ至ル
安政五年五月仲ノ町ニ花菖蒲ヲ植ルコト桜ノ如ク、仲ノ町通り中央ニ里木石等ヲ以テ小川ノ形ヲ造り、舟板ノ橋ナドヲカケ、庭ノ如ク造リテ植ル

54 小金井桜、江戸周辺に比類なし

「四神地名録」多磨郡四之巻

古河古松軒著

寛政七年（一七九五）

関連図版05・06

（前略）

梶野新田・関野新田を御上水流る、其左右大樹の桜数百本、土人は千本さぐらと称す、此節満花して其ながめいふべからず、江戸近ならは貴賤群集してはんしやうすべし、世ニいふ都の花は歌によみ、田舎の花は陰に朽と誰レ称せる人もなくて、いたつらにちりうせ給べし、されとも己が生跡にて時を忘れず今を盛りと咲乱レし風情いとゞやさしく一入のなかめなりき

武さしのゝ原と称せしも

今かくのことし

芽出度御代の

しるしなるべし

草も木も世に

ならひけん

今はたゝ

花咲つゝく

むさしのゝ原

55 噂より広まった小金井の桜

「享和雜記」

柳川亭著

享和年間（一八〇一〜〇四）

関連図版05・06

一、小金井の桜見事なる事は炭附下掃除に来る者どもの咄にのみ聞及し処、近き頃は江戸より花見に行事となりぬ、府中宿の北に当り、間に月の名所也と申伝る武蔵野を隔て、江戸より行程七里には近し、多摩川上水の流レに傍て両側に桜樹数十町植置たり、皆山桜なれば盛り早し、其戻り井の頭弁天大宮八幡へ廻るに少のより道なれば近頃花の頃出る人多し、

56 江戸勤番武士の見た江戸の花見

「江戸じまん」

晩来堂紀遊幅（原田基）著

安政年間（一八五四〜六〇）頃

一 花の比は今日ハ飛鳥山、明日ハ上野、翌日ハ向島・日暮里は日々に浮れ出て、或ハ三味を引、舞をまい、興酣ニ狂ひ居れど、行厨は至極質素ニて、多くハ掻まぜ鮓、又ハ粗物の煮〆等なり、花を肴の第一と愛る心ならむ、花ニ遊ぶハかく有たし、飲食ニ奢りてハ所々の花も見尽しかだし、又ハ物前の払ひニさしつかへ、あたら桜に咎をかつける不風流人も出来ぬべし、花物言ハ、若山人ハ行厨ニ遊ひて、我ニ遊ふならじと笑ふべし、予の如き勤番者ハ三十二銭の流し樽ニ酒を入、折入の鮓を携へ、終日の楽ミ、天保銭三枚を命の洗濯に費すのミ

57 桃花の満開は梅に勝るべし

「十方庵遊歴雜記」初編之中

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

五拾五 葛飾郡廿五里村の桃園

一、武州葛飾郡武拾五里村といふ処は、草加宿を越縄手路を過、加茂村と云立場より右へ入て、耕地を過て東北の方凡三里に有、是利根川の縁通なり、是迄の路すがら田有畑有村有川有り片鄙の風土又一品有て、風景自然に面白し、殊更此辺には田へ蓮根を作り、又慈姑を多く植ゆ、故に慈姑の烹付たるを、団子の如く串差にして、往来の人にひさぐ、さればついひちと云処は、縦横壺里余の間見わたして目の及ぶ処は野も畑も一面、皆桃林ならずといふ事なし、二月の半頃花盛の砌尤よし、又五月半に至る頃、件の桃樹の葉を微細に悉く取捨、桃の実を能く天日に晒して、早く赤らまし東武へ走り出し、六月午頭天王祭礼の頃、商ふ桃は皆此ついひちより出る也けり、世上に草蒸なるによりて、早く赤らむといふは抛無き事成べし、されば桃の実の色づく頃は、花よりは至て見るに詠め有、若晚景に及ぶ時は、此利根川の川縁の町家に一泊を許諾す、此川筋の風色天然にして、兎角の論なし、予が樂み遊歴する処只此事にあり、但降続く雨天ならば、宿すべからず、元より雨上りには、畦道にりて歩行は危し、予が逍遙せしは元化元甲子年五月、高橋直太夫、崎山新樂、松村弥三郎を同道して、当所に宴遊し晚景に及んで、草加宿に名たゝる大川清左衛門牛莊とは、茶友にして何れも知己といひ、

中古如心宗左暫く此家に食客と成りて有し故にや、如心作及び鑑定せし物数多有れば、みせてよと兼約せしまゝ大川氏に止宿し、翌日帰宅しけり、小日向より凡六里半に遠かるべし、又その後文化六己巳年仲春下旬、宮田市左衛門印東路牛と再び爰に逍遙し、桃花の咲揃ひし風情を眺望せしが、花は皆一重にして花形多きく、桃色といへるものは也、数千株一同に満花して、目の及ぶ処桃花ならずといふ事なし、総て世の人桃花をば愛せざれども、又斯夥しき満開の詠めは武州久良岐郡杉田村の梅見にも勝さるべし、美人の媚を桃李の粧ひと譬へしも故有事になん、其風景いふべからず、彼所此所逍遙し終りて、川縁に敷物し携たるたゞみ昆炉取出し、互ひに茶二三品を啜し樂めり、又一興なり、されど此辺点茶は勿論煎茶ともに翫ぶ人なきは、流石にも片鄙のゆへにぞ。

58 茶具を携え桃を眺める

「十方庵遊歴雜記」二編之中

釈敬順 著

文化十一年（一八一四）

第貳 四ツ谷桃園煎茶の佳興

一、四つ家中野通桃園といふは、宝仙寺より西北の方拾貳三町鍋屋横町の筋向より北へ入て凡四五町にあり、むかし有徳尊君は度々成せ賜ひしかや、則ち公の成せ賜ふ処は、小山のごとく五六尺も高く築たて聊庭樹を植たり、則ち此処に御床机をすゑさせ賜ふとなん、されば此小高き処より眺望すれば、四方懸はなれて只圃のみ見

ゆ、畠のその畝々に咲し桃はみな薄赤く、稀には白桃緋桃もあれど、多くは一重の野桃といへども、咲揃ひし頃は一品にして賞するに足れり、但し立春より六十七八日目頃よりを最中として、都鄙の雅人集ひ中路を逍遙するもの又少からず、左はいへ浚明尊君は繁々成せ賜はざりし故にや、桃樹の御手入もなければ虫生じ或は立枯等にて、近年は桃樹甚だ減少して名のみなれば、文化九申年新たに畑の畝々に桃樹の苗を植ならべ賜ふべきも、莫大の御入用に付鍛練の同役の徒工夫やしけん、数万粒の桃の種を伏しは、彼諺にいふ桃栗三年柿八年の流布語空からず、四五年の後はむかしに倍して、其の桃ぞのとならんかし、されど傍に人家なく茶の水を汲にたよりあし、予兼て煎茶しすゝらばやと茶具を携えしかど、飽までにたのしまざりしは恨なれ、是風景の能地は必ずしも不便利なるものか、初編にいえるごとく桃見の最上は、武州埼玉郡大ばやし村扱は貳十五里村なるべし、雅人見て評すべし、

59 植木屋仁兵衛の牡丹屋敷

「十方庵遊歴雜記」二編之上

釈敬順 著

文化十年（一八一三）

二十八 西箇原村牡丹屋仁兵衛が庭

一、武州豊島郡西箇原村の牡丹屋は、上駒込通り妙義坂より北三町にあり、則ち路傍の西側にして植木屋仁兵衛と号す、此仁兵衛やしきは短圃を過て少しの町並より、北の方爪先あがりには段々登りて坂

上に門あり、住居は山より下へくだり而も広く、庭中の摸形自然山の風景は恰日ぐらし浄光寺等の如し、且当所の牡丹は立夏三日目頃よりをよしとす、種類いろ／＼あれど紅の方は早く、白き方は遅し、むかしより数百品の牡丹を作りぬれば、世の人植木屋仁兵衛とは言わずして、牡丹やしきとのみ呼り、但し一木の双方へ二間も広がりて、花の数多き年は八九百少き年といへども六百におよぶ、牡丹は尾久村何某が寓居を名品とすべし、此一条は後編にくわしく明さん、仁兵衛が庭中は、春は花に富秋はもみぢの詠ふかく、殊に山上にして西南に登臨すれば耕地を望み、又東北をかへり見れば道灌山台の風色になぐさむ、此仁兵衛がやしきに添て北西の方飛鳥山へ凡十町、又東の方は道灌山へ十五町、南の方は駒込土もの店へ二十町余といへり。

60 植木屋伊兵衛の霧島躑躅

『続江戸砂子』巻之五
菊岡沾涼撰
享保二十年（一七三五）

○躑躅 染井 伊藤伊兵衛家産 元祖方五代、江府一番の植木屋也、唐のやまとの本草を貯ふ、千草万花おほきか中につゝし霧嶋幾億株の限りなく、地に錦を布、空ハ毎花に五色の雲を見せたり
▲霧嶋ハ薩摩国霧嶋山の産木なれば此名あり、正保年中、薩州より大坂へ一本来る、取木にわけて、大坂より五本、京都に登る、号て富士山、麟角、面向、無三、唐松と呼、富士山、麟角の二種ハ、禁

廷に植させられたり、残る三種ハ、明暦二申年、武江染井に下す、それより接木指枝として、数品にわかりて諸州に植る、三種の元木、今に存す、面向 高壹丈、はゞり一丈、・無三 高一丈三尺、はゞり二丈二尺、・唐松 高二丈二尺、はゞり一丈一尺、つれも紅花也、今は古木となりて、春毎に花開て猶色ふかし

61 飛鳥山の花盛りに染井の躑躅色を争う

『風流志道軒伝』
平賀源内著
宝暦十三年（一七六三）

（前略）昨日今日と移り行く飛鳥山の花盛りに、染井のつゝじ色を争ひ、毛氈の虹道にたなびき、掛香の匂ひは草に残る、紙乗物のしとやかに、繫馬の無遠慮なる、声色浄るりのかまびすしき、なま酔の腕まくりと未熟なる詩歌発句に、あたら桜を穢さんよりは、只友どち打むれて、静なる所に酒酌かはしたるぞ越なう奥ゆかしと見ゆ、（後略）

62 大久保百人町同心の造る躑躅

「十方庵遊歴雜記」初編之上
釈敬順著
文化十年（一八一三）

第拾 大久保組屋敷の映出紅

一、大久保百人町組屋敷北の通り組同心飯島武右衛門といふ、西の

木戸より北側の二軒目にして、躑躅に名高し、先彼の居宅の庭、大小のつゝじ式参拾株を植ならべ、その色の真紅に、花形又異なるは、実に奇代の壮観たり、是さへ見上る大木のみづらしきに、猶又居宅の北うしろ、只一面に躑躅ならざるはなし、その樹の高さ八九尺、或は壺丈余、低きも五六尺より三尺まで、左右に成木せし事数千本、植込し園の幅東西八間南北凡式丁余、その間みな両側つゝじのみ也、中に篋あり、幅纔に三尺斗り、一円真盛りなる様は只燃るが如く、見物の諸人酔たるに似たり、立夏より四五日目を最中といふべし、花の咲揃ひし頃は、そのあたり相映じて、顔面はおのゝみな紅粉にそみたるが如し、凡武州の内にかゝる数千万の、躑躅の成木ある事を聞かず、野州つゞじの鼻の花ざかりも争かこれに及ばん、江戸第一の壮観といふべし、いかなる人も唯是ははとのみ感賞して、口を閉こゝろ酔へるが如く、茫々然として家に帰るの思慮なし、実に黄昏におよぶといへども、数千万億のつゞじの映じ合て、夕陽を此地にとゞむ、映山紅と書る字義も宜ならずや、只恨むらくは片鄙にして、武城の人も半嚙にのみ伝え聞て見ざる族多し、然るに立夏の頃より、諸侯の大夫の室をはじめ、乗物に駕し、士庶人にいたるまで、日々朝より引もきらず群集して、此組屋敷の園中に、終日酔を尽し、又は詩歌、連俳に、日のかたぶくを恨める徒もありけり、惣じて此組屋敷の家々は、躑躅の樹の大小となく、三百株又は五百七百あらざるはなく、成木に至りては壺丈余、おのゝ絶倫の花のみなり、その上組中の垣根も、構へも、みな琉球つゞじとかやいえる花の、紫赤白の三色相交えて咲揃ひ、東の木戸より西の木戸にいたるまで八町余、西側の垣に咲る花の風情、又垣根を見越し

て燃るが如き、成木の躑躅爛熳たる真盛は、只是はとばかり感賞せしむかしの貞室、若此地に遊行せば何といへるならん、貞室翁に見せざりしは最残多し、又此組屋敷の南通りに、同組五十人西側に家居して、躑躅を作るといへども、今此組の五十人に及ばず、且又家々躑躅の大樹若干ありといへども、飯島武右衛門一軒に尽すべし、実に東武第一の絶品といふべし、都鄙の雅人等見ずんばあるべからず、又躑躅の少なき家には、孟宗竹の筍を作り、又は夏の間軒につるしてなぐさむ、しのぶといふものを作れり、世上に植木々と売あるき、又縁日の辻々に持出すもの、大久保を第一とす、その外は巢鴨、染井、青山、坂本、谷中、本庄、麻布等是に継べし、凡当所の映山紅は、江戸中の花の巻頭として、その余は染井、巢鴨をはじめ、上野の穴稲荷、大塚護国寺の石坂、左右のつゞじ等ありと雖も、大久保に比すれば千分の一にして、中々同日の論にあらず、市ヶ谷柳町より原町通、和田戸山の御構に添て、凡式拾町ありといへり、その路すがら砂利場などいふ所は、東西両山の間にして、東西式丁南北三町ばかり深田あり、溝川あり杜若夥しく、かなたこなたに咲つゞき、またあやしの藁屋式参軒路傍にありて、風景天造にして書きたるが如し

63 水底までも垂れるような亀戸の藤

「ひともと草」

鶯谷史隠編

文化三年（一八〇六）

関連図版19

亀戸の藤

十千亭

暮行春は、惜しめどもつれなくて、よもの霞もたど／＼しきに、花はみなこゝろみじかくちりゆくがうらめしう、なくにしとまるものならばと思へど、いかゞはせん、此ごろなんしばしがほど、木ずゑさびしう思ひつゞけらるるに、亀戸の藤や咲はじむらんゆかしさに、たれも／＼出たつなるべし、こゝは、ふた国のはしより甘まちなまり東にて、所のさま、むね／＼しからず、かやふける家どもおほく、いとひなびたるものから、中々おかしき道のほどなり、されど、かたいの女のこゝかしこより出来りて、袖にすりよりつゝものこふが、いとうるさく、かへりにやとらせん、なつきそといへば、御かへりは裏の御門よりや出給はん、さる事のたまはずととらせ給へ、いとにぎはしきおものまふでや、をのれらの外は多くもあらじな、わづか五人の中へうら浪ひとつとらせ給へ、いざ下さりやしよ、とくちびるかららかにいふが、かしがましけれど、そらおぼれてし過れば、何事にや有けん、うちつぶやきつゝゆきぬる、いとにくし、きぬはよけれど銭はなし、などいひたるなるべし、とかくものするほどに、御やしるもちかづきぬ、このあたりは、くひものでうじてあきなふ家多く有て、ことに、こゝはしゞみてふものゝよき所にし、なり平とて、みな人のもてはやしぬるが、かたちもいやしく、

色さへくろきに、いかにしてかゝる名をやつきけんと思ふもおかし、このわたりのわらはべども、さゝやかなるたらひに水を汲みいれて、惣門の前につどひみて、手あらひ給へ、口そゝぎ給へ、といふ、そが中より一二人出来りて、よめなかひ給へ、つくしもとめ給へや、といふをみれば、髪はさぐまかぶりたるやうにて、袖のあたりは、ことにあかづき、よごれたるもあり、はらからにや有らん、みのむしのさまにおひて来るもあり、いづれも／＼きたなげなれど、にくくしもあらねば、かふ人もありぬべし、さて御社にうち向へば、まへなる池にみつのはしかゝれるが、そりばし二所にかけてたして、このかたはらなる藤の花にぞ、ちりにし桜のうらみも取かへすべく、めもおどろかれぬるよ、松にかゝりて、おもしろうさきみだれたるが、いとえんになまめかしう、いかなるものゝゆかりにや、とねたきまでに思ひやらるゝ花の色なめりかし、ことに、はしの右ひだりより、池のうへにおほひかゝれるが、わたり十たけあまりにもおよびたるを、橋よりみれば、みなぞこゝも花もてうづみたるやうにて、紫ふかくともいはまほし、こゝより楼門をいりて、御やしる拝み奉るに、いとかう／＼しう、たうとくぞおぼゆる、ことにあまり人の多くもいりこざれば、をのづからうがはしき事もなく、心のどけくぬかづき奉るべし、ひがしの方なる妙義の御社は、上づけの国よりうつしまつれるとなん、この外末社の宮居おがみつゝ、さるにても、ふちなみのたちさがたく、池をめぐりて見たせば、橋のらんかにしなひかゝれるさまは、たゞむらさきの雲のやうにて、よのつねのいろともおぼえず、夕ぐれにいとゞ色まさりぬべけれど、入相のかねにおどろきて、をの／＼家路にかへるな

るべし、そもこの御やしろの事たづね侍るに、寛永のころ、信祐といへる人、しらぬひのつくしより来りて、かしこくもおほやけの仰ごとを蒙り、それよりここに御社をたてゝ、あまみつ御神をまつりたてまつる、かのあらこでら〔傍注〕より他の国へうつしまつれるは、こゝよりはじまりけるとなん、かたりつたへたる、

64 藤の花、紫の水流せるがごとし

『江戸名所花暦』巻二
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文政十年（一八二七）
関連図版19

○藤ふちこれよりいたしきりしたにいたるまで春のすゑに出すへきなれと
丁数の厚薄によつてこの巻のはしめにいたす
亀戸かめと天満宮池辺てんまんくうのちへん表門おもてもんを入て正面しやうめん一ノ反橋いちのそりはし、この池に
此池を心字そひ添そひて左右藤棚さゆうふちたなあり、このしたに各茶店おの／＼さてんを構かまふ、ひた
りハ裏門うらもんのうち連歌堂れんかたうまで今なし右は末社まつしや、頓宮神とんくうしんの社の際きま
て、真盛まさかりの頃ころハ池に移りて紫の水むらさきを流ながせるかことし、この頓とん
宮神くうしんといへるは、老人夫婦らうしんふうふの像さうなり、そのうしろに青赤あをあかの鬼
形ぎやう立たちたり、各木像おの／＼もくさうにして、彩色さいしきをほとこす、くたんの大鬼たいき
形ぎやう、老夫らうふを縛しばりたる躰ていなり、社前しやせんにその趣おもむきを記しるしてあり、此
爺ちや、菅相かんしやう丞しやう流りゅうされたまひし時とき、つらくあたりしゆゑしはらるゝ
となり、また此この軀こハ、麴飯かうめしのはつ穂ほを松まつの葉はに載のて菅公かんこうへたて
まつりしに、菅公かんこう感かんせさせたまひ、こゝろさしを松まつの葉はに載のす
るとのたまひしより、末世まつせの俗語そくことなりて、今も聊いまの品いさゝを送おくる

に松まつの葉はなと云いふなり、頓宮神とんくうしんといはるゝのよし、他の書たに見しよ
へす、たゞそのまゝをしるす、

65 堀切の里数万株の花菖蒲

『絵本江戸土産』第七編
松亭金永著・歌川広重〔初代・二代〕画
嘉永三〇慶応三年（一八五〇〜六七）

堀切ほりきりの里さと花菖蒲はなあやめ
綾瀬川あやせの東ひがしにあり、数万株すまんぢやうの花菖蒲はなあやめ、その色更さらに数かずを知らず、眺望ぼうぼう
類たぐひあらされバ、毎年まいねん卯月うづき下院すゑつかたより皐月さつきに至りて、遠とほきを厭いとハす舟
に乗り、簀あんだに駕がして都下みやこの美女めいよ競あそふときハ、いつれか花を見紛みまかふは
かり、水陸すいりくの遊観ゆうくわんなり

66 堀切村百色の花菖蒲

『藤岡屋日記』第四卷
須藤由蔵著
嘉永四年（一八五二）記事

○ 五月

向嶋請地辺御成之節ニハ毎度被為入候堀切村しろなわといへる
百性有之、是ハ大百性ニテ、此度右屋舗内へ百色の花菖蒲を作り候由。

花菖蒲名前

花葵、黒雲、奥霜、七福神、宝船、日ぐらし染、茶台、朝妻、船
入、白浪、須摩浦（音）、初霜、醉美人、玉兔、絵合、振つゞみ、あけば

の、蓬萊官、千羽鶴、鶴の幕、峰の雲、不老門、月の都、鳴海潟、青龍刀、田毎の月、大鳴海、玉簾、折鶴、万果闇、江戸自慢、葵の上、大平楽、青海浪、兎の色、玉宝蓮、宇治の蜩、稻妻、霞の関、泉川、鳳凰、浅城、蜀江の錦、白牡丹、霜夜の月、千代鶴、狂獅子、鳴滝、百翁殿、伊達道具、東雲、龍の爪、入り雲、花鳥、雪見船、大海浪、浜千鳥、谷間の雪、雛鳥、神代の昔、加茂川、びんざゝら、相合傘、雲井、花の錦、天竺牡丹、べ七十種。

67 朝またぎの遊客、蓮の開花を待つ

○蓮

溜池 赤阪御門外一めん、ため池まで、花葉水面をふさきて夥し、

格物叢話に、荷花重台のもの、双頭のものは以瑞とす、又 暁朝日に起、夜低て水に入ものあり、是を睡蓮と云り、爾雅、荷は芙蕖なり、其茎ハ茄、其葉ハ荷、其花は菡萏、其実ハ蓮、其根は藕、其中ハ苡、凡草木の中一物にして、花葉根茎子を用るは、蓮をもつて第一とすといへり、

増上寺地中弁天の池 赤羽根のかたへ出る御門のうち也
不忍池 東叡山麓なり、見たし三、四丁、長サ五、七丁程、源水ハ谷中千駄木の小川よりななれいつる、中しに弁財天あり、江州

『江戸名所花暦』巻二
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文政十年（一八二七）
関連図版18

竹生島をうつす、寛永の頃までは離島にて、参詣の通路なかりしといへり、今ハ通路ありて、しかも嶋の回りはミナ貨食屋なり、名物蓮めし、田楽等を鬻く、花盛りのころハ、朝またきより遊客、開花を見んとて賑ふ、実に東雲の頃ハ、匂ひ殊にかんはしく、又紅白の蓮花、朝日に映する光景、たとへんに物なし、又文政三、四年の頃より此池の岸通り西南の方、陸より幅八間のほりをほりめぐらし、その先に八間斗の堤を輪のこつく築て、このつゝミのうへに茶店立つゝき、貨食舗軒をならへ、梅桜など植込ていと賑しくなれり、不忍池とは、上野を忍ふ岡といへは、それに対しての名なるへし、回国雑記に

霜のゝちあらはれにけり時雨をハ忍ひの岡の松もかひなし

道興准后

風土記云、篠輪津池貢鯉鮒鰻魚鴻雁鶴鷺鴨等周行十里許程、旱日水不涸霖雨不為害祈旱雨人詣于茲所祭瀬織津比咩也とあり、

因にいふ、蓮茗といふを製するに、うてなのたしかなる花を茎のまゝとりて、よき茶を濃く煎し煮たちたるを能ほとにはなの中へつき込、さてつき込たるを双方よりはなひらをよせて、こよりにてむすひ、図のこつくさかしまにかけ置へし、花ひら幾重もかさなりたれば、漏るゝことなし、また別に茶を薄くせんし、さて蓮花のなかの茶をすこし宛さして喫するときは、匂ひたかく心清々しくなりて精神を養ふ



68 不忍池は江戸第一の蓮池なり

『江戸名所図会』巻之五
 斎藤月岑 他 編著・長谷川雪旦 画
 天保五〜七年（一八三四〜三六）
 関連図版18

不忍池
 蓮見

不忍池ハ江戸第一の蓮池なり、夏月に至れハ荷葉累々として水上に蕃衍し、花ハ紅白色をましへ、芬々人を襲ふ、蓮を愛するの輩、凌晨を殊更の清観とす

69 江戸の朝顔の楽しみ方

『絵本江戸風俗往来』
 菊池貴一郎 著・鈴木棠三 編
 明治三十八年（一九〇五）
 関連図版20

朝顔 朝顔はこの節盛んに開くなり。この草は江戸に何れという名所もなく、町方の寸地の無き処にては土鉢に植えて、毎朝朝顔売りの昇き来たれるを求めて、二日、三日の眺めとして後は塵芥と同じく捨てける。また買うて夏朝の目覚ましとするは、日本橋近辺なり。山の手に至りては庭垣の際または土蔵、或いは台所の前などへ種を卸して咲かしむ。寺院の境内などに至りては珍しともせず種をも伏せざるに、去年の種の落ち散りしものより生い茂りて、自然のまま

に花の開くはまた一入の趣きあり。近年朝顔の培養追々開けしより、人力により種々の乱咲き・大輪・小輪より葉蔓に至る迄、人造を尽したり。その朝顔を鉢に仕立て進物になす。また細竹の花入れに種々の花を挿して、毎朝未明に知れる方へ贈り越す。朝の寝覚めの料に面白きものにこそ。

70 斎藤月岑、朝顔を楽しむ

『大日本古記録 斎藤月岑日記』六〜九
 斎藤月岑 著
 安政三〜明治三年（一八五六〜七〇）

安政三年七月十九日条

朝兒八りん咲、

安政三年八月十九日条

雪堤子より、朝兒色紙認被越、

安政五年七月十九日条

天氣よし、後くもる、御納屋へ出る、寺沢氏当番、真土山へ参る、

新昇亭へよる、朝兒見せ物見る、

安政六年六月廿八日条

安田氏より朝兒貰ふ、

万延元年七月十八日条

朝顔八十余さく、

文久元年六月七日条

朝兒始て買ふ、

文久元年六月十五日条

入谷長松寺にて、晴天三日朝兒の会有之、早朝三河や同道二而見

ニ行、久保・橋本・岡村・富山町彦太郎ニ逢、見物いたし、入谷

(市之丞、神田紺屋町三丁目名主)

松下亭そバたべる、雨ニ逢ふ、後晴る、

文久元年六月廿二日条

天気よし、朝兒咲く、廿りん計り、

文久元年八月七日条

冷氣故、朝兒今日より小さく咲、

文久元年八月廿二日条

曇、至少々雨、直ニ止、朝兒冷氣ニ而ちいさく成しが、きのふの

南風故か今日ハ夏中の如く大りに咲く、

文久元年八月廿八日条

朝兒いまだ咲く、

文久二年閏八月十七日条

朝兒いまだ咲く、

文久二年閏八月廿七日条

曇ル、朝兒七りん大く咲をいける、

文久二年九月六日条

今朝咲く朝兒を花いけへいける、

文久三年五月十八日条

朝兒此節方売あるく、

文久三年五月廿七日条

朝兒かきねこしらゆる、朝兒昨日今日ニ而十三買、

文久三年九月五日条

朝兒のかきね取る、

元治元年六月十一日条

夕方、朝兒かきねこしらゆる、

元治元年七月二日条

小雨、朝兒三買、(月寄奉公人)菊太郎一ッ買、是ニ而廿八鉢也、少々冷氣也、

此節いまだ花少く、七、八ッ、咲く、

元治元年七月五日条

朝兒廿三咲く、当年、昨日ニ同しく兎角輪リシちいさし、

元治元年七月廿日条

雨ふる、朝兒僅ニ十輪咲く、冷氣也、

慶応元年六月廿二日条

○朝兒の垣根こしらゆる、当年ハ延引いたし候、

慶応元年六月廿六日条

朝兒買、

慶応元年六月廿八日条

暑氣つよし、朝兒買、

慶応元年八月五日条

雨ふる、朝兒十六七咲く、

慶応元年九月二日条

○庭のすゝき多く花さく、朝兒いまたちいさく咲く、

慶応二年六月八日条

曇る、冷氣なり、朝兒鉢四ッ買、

慶応二年六月十七日条

天気よし、今村老母・おまち、谷中妙法善神へ参る、朝かほ五鉢

買ふ、(中略)夕方朝兒垣こしらゆる、

慶応二年六月廿三日条

朝かほ鉢九ッ買直ニ地ニ植る、

慶応二年六月廿五日条

冷氣也、朝兒甚ちいさし、冷氣故なり、又くもる、

慶応二年六月廿九日条

朝兒ちいさし、

慶応二年七月三日条

朝兒十八咲く、少々うるはし、

慶応二年七月十日条

朝兒廿二咲、

慶応二年七月十四日条

朝兒廿五さく、

慶応二年七月廿五日条

天気よし、朝兒十八さく、色よし、朝冷氣也、

慶応二年八月五日条

朝兒三十一咲、

慶応二年八月十二日条

天気よし、朝兒四十六咲、後くもり、少し風、

慶応二年八月十九日条

朝兒四十咲く、

慶応二年九月十二日条

朝兒いまだ咲く、

慶応二年十月三日条

朝兒の垣とりこわす、

慶応三年六月廿五日条

朝兒九鉢買ふ、かきね当年始めてこしらゆる、

慶応三年十月八日条

朝兒かきねこはす、

明治二年五月十九日条

○極ちいさき朝兒植木売持歩行を見たり、但、外の艸ニ取り交へ

うりあるき候を見たり、

明治二年五月廿七日条

朝兒うりを見る、ま事ニちいさく、八月末の花のことし、

明治二年六月廿九日条

冷氣也、朝兒ちいさく咲く、

明治三年六月三日条

アメリカ葵葉の朝兒三はち栽る、

明治三年六月廿日条

朝兒到て少しツ、咲、此節迄廿三鉢程栽る、

明治三年六月廿八日条

朝兒八鉢買、三百文、是迄ニ而三十鉢ニ成る、

明治三年七月七日条

朝兒十四咲く、小輪也、当年諸方朝兒小りん也、

明治三年七月十一日条

○朝兒三はち買、是ニ而三十三鉢也、

明治三年八月十六日条

朝兒三十六、うるはし、

明治三年九月六日条

天気よし、朝兒三十三咲、当年残暑故か花大キし、

71 秋の七草、園中に揃う向島百花園

『江戸名所花暦』卷三
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文政十年（一八二七）
関連図版11

○七草

百花園 向しま花やしき、秋草の中にも七草と唱へて愛翫するを、
此園中にはミナそろへて植こみたり、七草ハ、平春海大人、七夕
へ手向られし歌あれハ、是を挙てその草のかすくをいハす

たなばたに今宵やかさん秋萩の花すり衣色あせぬ間に
天河かはへのをはなかたよりになひくもほしの心をやとる

たなはたの袂おほえて秋風のふきうらかへす庭のくす原
 たなはたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやにほふなてしこ
 今宵しもたなはたの手にあえよとて誰たちぬへる藤はかまそも
 棚機のおもかけミせて沢水にすかたをうつすをミなへしかな
 ほし合のなこりをそれとしのへとや露にしほれし朝かほの花

72 向島百花園の秋の七草

『絵本江戸風俗往来』
 菊池貴一郎著・鈴木棠三編
 明治三十八年（一九〇五）
 関連図版11

百花園の七草 七草は第一萩、第二薄、第三葛、第四撫子、第五女郎花、第六藤袴、第七朝顔の由なり。その以前、鞠宇が秋の七草考の冊子ありて委し。文化九壬申三月上木し岸本由豆流の序あり。向島なる新梅屋敷というは、最初梅樹を植え付けしが、後に秋の七草を植え付け、培養よろしきより、この園中に遊べる人、秋時にも絶えず。文化中この屋敷草創の時亀田鵬斎先生、入口なる門聯に、「往古来今香不斷、東西南北見無窮」と題せしは梅花のみなるまま、文政中に至り新たに七草を植え込みしかば、大窪詩仏先生改め題して、「移栽春夏秋冬花、来見東西南北人」とせし聯は今にかかれり。後は七草の外に千種の草花を繁茂せしめ、年中花香の絶ゆることなきに至りしより百花園といいたり。この創園は北鞠塙が号せしよし承りぬ。

73 慈雲山龍眼寺萩の花盛りには錦を連ねたり

『江戸名所花暦』巻三
 岡山島編・長谷川雪旦画
 文政十年（一八二七）

○萩

慈雲山龍眼寺 本所亀戸川の通り、天満宮の裏門の先にあり、当寺に殖髪聖徳太子の像をあんちなす、推古天皇の勅願によつて大和国大安寺の本尊なりしを、故あつて当寺におさむ、明和三年よりして太子堂建立のためとて、庭に萩を多く植たり、もとより池水清らかにして、萩の花さかりには、錦をつらねたり、いまは殊さら数千叢になりて、貴賤群をなして歩行をはこふ、俗よんて萩寺といふ、名物萩のはし、萩の楊枝あり、○此余寺院社頭に萩をうへたる所多しといへとも、床机をもふけて詠むるたよりなきは是をのせず、浅草清水寺、牛島長命寺などのたくひなり

74 巢鴨菊

「増訂 一話一言」

大田南畝著
 天明年間（一七八一〜八九）頃
 関連図版21・22・64

○巢鴨菊

丁卯の九月節遅くして菊の花いまだひらかず、十月六日白山本念寺なる母の墓にまうでしかへるさ、巢鴨五軒町の菊見にゆく、去年み

し垣根の山茶花いかゞならんと問ふに、花すでに咲てかつちるもあり、先種樹家権左衛門が園にいりて大菊をみる花壇四間計也中菊もあり、花いまだ十分ならず、その隣に文次郎といへるあり、門に風流菊船作といへる標をたつ、入てみれば船の形につくりなせり花藤色それ小輪也より市左衛門が園に入てみれば花又咲り、こゝには孔雀の羽をひろげたらんやうにつくれる二本あり、花いまだ遅し、小路を出て巢鴨の大路に出左の方なる弥三郎が園に入りてみる、去年みし西施白の花盛にして蠟石もてきざみたる如し、花の中は黄色にうるみたるやうにみゆ、これは大村家より出し種にてもとは漢種也とぞ、紫の中輪に一トむら／＼づゝ白き生フの入たるを露のやどりと名づく、実生にして今年の新花なりと弥三郎かたる、小菊のあざみ菊といへる二もとをふさ／＼と大きくつくりなせり、一は白、一は紫也紫の方三未開間の花壇の中にたゞ一もとにて左右に二間半あまりひろごりて山のかたちにつくりなせる黄赤白カバイロの菊を天真冠と名づく、これは去年の十月に苗を分てつくりたれば十二月の培養の力によりてかくはなれりといふ、なべての菊は四月に苗をわかちて九月まで六ヶ月の培養也、ことは十一月より根をわかすべきなどかたれり、存養の力のあつき事これにてもみつべし、夫より東ざまに歩みて佐太郎が園にいる、これは今までみし花にくらぶべくもあらず、園の中よりはじめの市左衛門が庭に出てもとのみちをかへれば、六日の月の影雲間にもれてさやかなるを見つゝ金曾木カネソギの里のやどりにかへりぬ。(後略)

75 麻布の造り菊

第十五 阿左布造菊

一 九月、阿左布菊の枝折菊の番付一枚ずり竹屋町福の内

麻布雌狸穴 植木屋定五郎 帆かけ船

同所 早川源内庭

十五種 十三種 つぎわけ 薄紫御召道具藤亀白八重霞

折鶴 白 紅葉の橋 紫白

相模橋向 植木屋彦八 黄二十山ウスカハ暫時 月に兔 白黄座アリ 孔雀 帆

かけ船 黄金岳

白金村 植木屋惣左衛門 亀 獅子 章魚

同報恩寺門前 紅葉茶屋

麻布三軒屋 植木屋安五郎 富士白 茄子 形大キク鷹

同所 仕立屋久蔵 車ハ作りものなり

白波に日の出、紫御所車、屋根ト長柄ハ紫の花、折つる白

同所 植木屋 蘇鉄ニ小菊也、葉ハ釘なり

外 雪の松 松の木ニ而白菊を拵たる也、石灯籠 紫

同 斧橋 武島氏 花壇種類出来よろし

同所 松平左金吾殿隣 かいばや

花壇菊第一也ト云々

右己巳十月四日一見

杏花園

「街談文々集要」
石塚豊芥子編
文化六年（一八〇九）記事

四五年以前方麻布にて作り初めしより、年々種類多くなり、一兩年以来、所々にて作る如くなど巢鴨辺にて作りたるハ、庸軒流の生花のすがたに作りたり、根々など見事ニ而、珍敷事共なり、され共大菊其外共、麻布を始とす。

文宝云、一昨年麻布にて見し大菊、高サ壹丈六尺あり。

76 紅葉の名所

『江戸名所花暦』巻三
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文化十年（一八一三）
関連図版23

○紅葉

真間 真間山弘法寺、下総国葛飾郡、江戸より三里余、本堂の前に楓あり。高四、五丈余、たくひなき名木なりといへり、（中略）秋葉大権現 向しまにあり、境内広くして池あり、池の廻りに茶店、貨食屋等あり。楓は所々にあり、中にも裏門の方へよりて数十本あり、染出すころは、人々きそひて見物す

滝野川 流れ清らかにして、川は曲行なり。一步ことになかめの替る地なり、川はた岩窟のうちに弁財天を安置す、風景小く金龜山に似たるところあり、楓の色さかりの頃は、この川水にうつりて、龍田川もかくやとはかりあやしまる

またきよりちるかとそみる紅葉々の

うつりて落る山の滝つせ

前内大臣

おち滝つたきのしらいと染かへて

をるや錦の秋のもみちは 為敦朝臣

補陀洛山海晏寺 品川鮫洲にあり、当山ハ江戸第一の楓の名所なり、（中略）後の西の山に松を植、楓樹千本を種て蓬萊山と号、北方に蓬萊亭あり、南に坐禅堂、西に長さ三町余の泉水をかまへ、龍淵と号し、其上に梶原公墓あり、南にあたりて梶原やしきあり、又明神の森あり、西南に山王の社、弘法大師の作、石地藏、権現の御手洗池、延命水といふ、橋あり、両溪橋といふ、橋下は蛇の淵といふあり、建久のころ里の女、身を捨て蛇に成たるを、二世古山和尚引導して天上を得るといふ、そのうち淵なし、橋の前後、貴人の墓所、石塔数多あり、東方に蛇腹紅葉、千貫紅葉、西に花もミち、浅黄紅葉、菲梅もミち、猩々紅葉といふあり。

（中略）

万松山東海寺 当山境内広くして、大樹の楓樹数多あり、（中略）目黒 泰叡山瀧泉寺、当山境内楓樹多し、毎月廿八日ハ不動尊の縁日なれと、とりわけ正、五、九月ハ前夜より参詣多し

東陽山正燈寺 龍泉寺町、当寺もみちの名所にして、高雄の苗をうゆる、近き頃は、みたりに見物をゆるさす。しかりといへとも遊客庭中に入るといへとも、敢てまた咎むることもなし、たゞ掃除のとゝかざるをはつと見へたり。明和、安永の頃は、楓とたにいへハ、人々正燈寺と心得たるほどに盛なりしとそ

77 品川海晏寺の楓樹

「十方庵遊歴雜記」初編之下

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

関連図版23

第八 品川海晏寺の楓樹

一、武州荏原郡品川南の宿海晏寺^{カイアンジ}曹洞は、鮫洲^{サメズ}浜川等の東にとなりて、むかしよりもみぢの名所といひはやせり、されば当山の楓樹は伝えいふ、最明寺時頼の植られし古樹のよしにて、山も又最古し、既に本堂の左の方に時頼入道の五輪の石碑ありて甚古雅に見ゆ、高さ五尺七八寸ところ／＼闕損じ自然に青苔生じて懷古の情少なからず、往古の松檜等はみな枯失て、今唯楓樹のみ残れりとなん、境内元より広く、寺中は山も庭もみな一円楓樹のみ多し、座敷の檐側より見上る処、山高さ凡二三丈生茂るもの只楓樹にして、もみぢの頃は恰も朱山を見るが如し、殊更海浜といひ、旭を請て染る故にや、もみぢする事尤早し、立冬七八日頃よりを旬とせり、東武のもみぢは爰を第一とし、上野及び根津権現の社内等これに継ぐべし、此辺の潮干は三月三日より六日七日頃までをよしとす、深川の洲崎、佃^{サムサバシ}じま寒さ橋^{サムサバシ}の辺当処の潮干に継べし、且十月十三日達摩忌にて最賑やかなり、先年俳匠境内に碑を建たり。

玉眼の達摩忌寒しまつの風 柳居

(後略)

78 富岡八満宮二軒茶屋 雪中遊宴の景

『江戸名所図会』卷之七

斎藤月岑他編著・長谷川雪旦画

天保五丁七年（一八三四〜三六）

図版24

此地は江都東南の佳境にして、月に花に四時の勝趣多かる中に、取^{トリ}わけて初雪の頃などには、都下の騷人こゝにつとひ来ツ、亭中の静^{セイ}閑を賞し、一杯を酌かわしては酔興のあまり冬籠る梅の木の本、秋^{アキ}ならは尾花^{おはな}蒔^またき一夜の夢を結ふもまた多かりぬべし

第二節 武士の園芸

79 松平忠晴本「百椿図」林羅山序

『林羅山文集』卷第四十九

林羅山著

寛永十六年（一六三九）

*松平忠晴（丹波亀山藩主）

百椿図序 寛永十

六年作

夫椿之有名也、称于莊子載於本草倭名謂之都婆岐或号海石榴本朝先輩賦白椿云、靈根保寿託南華花、發金仙玉府家、素質宛糝冰雪、面不随紅艷、作山茶山茶花有数種或花簇如珠、或青帶或粉紅或淡白所謂宝珠茶花海石榴茶花躑躅茶花一捻紅千葉紅千葉白之類

不可勝数也。椿花亦然。倭歌家有玉椿有白玉椿有紅椿有静椿有浜
 椿有山椿兵部少輔大伴家持植八峯之椿發其花於詞林其後諷人
 韻士歷代吟賞焉。故賀紫宸則鏡山之玉椿明照四海之天祝緑洞則
 姑射之靈椿永待千世之春。巨勢春野之霞色見之不飽音羽山之
 雲根生而有常以之敬神則勢州有椿宮社以之勸學則宋帝比木有
 椿誠是木部之大年花中之巨麗者也。頃歲椿花衆品佳色不一乃知
 太平之時万物蕃多矣。況又大椿兩八千之春秋以祝遠大乎松平伊
 賀太守源忠晴尤愛此花。雖然夙夜公務不遑築塢灌花於是取諸方
 所有品色及其名者一百種。圖其形樣以為怡目之慰。丹青煥發四
 時不凋與一歲一枯榮者不可同日而語也。嘗聞山陰韋氏之百梅携
 李張氏之百菊播名于中華未聞百椿之美至于如此也可謂太平之
 勝事好文之嘉徵也。太守之用意誰不歆羨乎。或人曰。繪花者不能繪
 其香。曰。然有説于此。緑苔青草惟是德馨而今況於椿花乎。嗚呼色也
 香也念茲在茲可不勤哉。遂書以応其請焉。

【漢文訓読】

百椿図序 寛永十六年作

それ椿の名有ることや莊子に称し本草に載す。倭名これを都婆岐と
 謂ふ。或は海石榴と号づく。本朝の先輩白椿を賦して云く、靈根が
 寿を保つて南華に託す、花は発く金仙玉府の家、素質宛かも粧ふ氷
 雪の面の紅艷に随て山茶作らずと。山茶花に数種有り。或は花簇つ
 て珠の如し。或は青帶、或は粉紅、或は淡白。所謂宝珠茶花、海石
 榴茶花、躑躅茶花、一捻紅千葉、紅千葉白の類勝げて数ふべからざ
 るなり。椿花もまた然り。倭歌の家玉椿有り、白玉椿有り、紅椿有

り、静椿有り、浜椿有り、山椿有り。兵部の少輔大伴家持八つでの
 峯の椿を植えてその花を詞林に発く。その後諷人韻士歴代これを吟
 賞す。故に紫宸を賀するときは則ち鏡山の玉椿明かに四海の天を
 照らし、緑洞を祝するときは姑射の靈椿永く千世の春を待つ。巨勢
 春野の霞の色これを見るときも飽かず、音羽山の岩の雲根生て常有
 り。これを以て神を敬するときは則ち勢州に椿の宮の社有り。こ
 れを以て学を勸むるときは則ち宋帝木に椿有るに比す。誠にこれ
 木部の大、年中花中の巨麗なるものなり。頃歲椿花衆品佳色一なら
 ず。乃ち知る太平の時万物蕃多なること。況やまた大椿兩八千の
 春秋以て遠大を祝するをや。松平伊賀の太守源の忠晴尤もこの花を
 愛す。然りと雖も夙夜公務塢を築き花に灌ぐに遑あらず。ここに於
 いて諸方の有る所の品色及びその名有るものの一百種を取てその形
 樣を圖いて以て目を怡ばしむるの慰みと為す。丹青煥發として四時
 凋まず、一歲一枯榮するものと日を同うして語るべからざるなり。
 嘗て聞く山陰の韋氏が百梅、携の李張氏が百菊、名を中華に播こす
 ことを。未だ百椿の美かくの如くなるに至ることを聞かざるなり。
 太平の勝事、好文の嘉徵なりと謂ひつべし。太守の意を用ゆること
 誰か歆羨せざらんや。或る人の曰く、花を絵がく者はその香を絵が
 くこと能はずと。曰く、然り。ここに説有り。緑苔青草惟これ德
 馨し。今況や椿花に於いてをや。嗚呼色や香や、これを念ふにこれ
 に在り。勤めざるべけんや。遂に書して以てその請に応ず。

80 松平忠国に求められ林羅山、椿の画賛を寄す

「林羅山詩集」巻第七十

林羅山著

寛永年間（一六二四～四三二）

関連図版26

*松平忠国（丹波篠山藩主）

牡丹椿 松平山城守忠国求之

遐齡富貴艷陽辰花号牡丹知是椿開落何論二十白色香常遇八千
春

(中略)

忠国図百品椿花請當時廷臣禪僧等各作詩歌贊之先生
亦因其求贊牡丹椿經年再請曰酒顛椿他人不能贊之云云
故復任其請

【漢文訓読】

牡丹椿 松平山城守忠国これを求む

遐齡富貴艷陽の辰 花を牡丹と号す知すこれ椿

開落何ぞ論ぜん二十白 色香常に遇ふ八千の春

(中略)

忠国百品の椿花を図し当時の廷臣禪僧等に請て各詩歌を
作てこれを賛す。先生もまたその求めによつて牡丹椿を
賛す。年を経て再び請て曰く、酒顛椿、他人これを賛す
ること能はずと云々。故にまたその請に任す。

81 松平忠国本「百椿図」に賛寄せる文人ネットワーク

百椿図賛目録本之巻

一、いさはや	君もいさ	水戸黄門公
一、おし	花は又	曼珠院良尚法親王
一、不動	明王何誇	人見友元
一、百万	昔日嵯峨	大徳寺天室和尚
一、父母	玉顔父母	坂井伯元
一、木瓜	一朵八千	弘文院春齋
一、松谷	幾度春秋	万年山梵峯長老
一、花と葉よ		連哥師昌程
一、瓶裏一朵		大徳寺江「月」和尚 (貼紙)
一、小野	うつし見る	連哥師玄的
一、越後	偏愛斯花	南禅寺良長老
一、毬子	八千春色	林大学頭
一、妙蓮寺	豊葦椿花	心越禅師
一、酒顛童子	八千歳際	林道春
一、遠江	呼作遠江	函三林子
一、とりなか	玉椿	連哥師紹尚
一、由羅	君か見む	広橋大納言兼賢卿

「百椿図」二巻
伝狩野山楽画
十七世紀
関連図版26

一、つしま	名にうつし	高倉中納言永慶卿
一、超花王	根深蒂固	妙心寺内万元和尚
一、大鸚粟	玉椿花綻	立菴正英
一、山茶花	躑躅鶴頂	南紀一陽齋
一、かはり	年経ても	水無瀬氏成卿
一、桃椿	みちとせを	八幡山松花堂
一、腰蓑	一抹猶未	大徳寺翠巖和尚
一、柄杓	斜々清杓	松永昌三
一、本因坊	玉つはき	同貞徳老人

百椿図賛目録末之巻

一、ならして	八千とせの	八條宮智忠親王
一、霜ふり	はるの霜	曼珠院良恕法親王
一、桑名	たま椿	北村湖春
一、敦賀	手折つる	同 季吟法印
一、高麗椿	高麗名字	温水愚溪
一、町椿	白玉乃	智恩院宮良純法親王
一、紅散椿	一箇団椿	弘文院春齋
一、さよひめ	玉つはき	
一、やくら	うつろハぬ	甘露寺大納言光長卿
一、白雲	君か千代	烏丸大納言光広卿
一、清水椿	冷々浚々	梵山月磧
一、源氏椿	元是八千	北林承章
一、八幡	梓弓	水無瀬氏成卿

一、木むら	玉つはき	連哥師宗因
一、聾たいく	椿さく	半井ト養
一、赤山茶花	応是丹青	林晋軒
一、三井寺	因地仮名	千拙齋
一、かうし	花はみな	遊行上人
△晴天	寒梅譲節	大通寺南谷
一、小野	緑葉停霜	大遺子
一、	花園扱処	勿齋
一、星	雲乃うへの	玄頭
一、石山	石山靈境	宗樸
一、天沢寺	てふとりの	北村正立
一、牡丹	遐齡富貴	林道春
一、大白玉	名にしおふ	松平山城守忠国

82 椿奇花の流行と図譜の刊行

古今要覧稿巻第三百六

●草木部椿上

(中略)

寛永の比にいたりてはその花に重弁千弁赤白間雜の奇花八十種あまり百出するを以て京師にてはことこのむ人その花をことくくあつ

『古今要覧稿』第四卷草木部上
 天明元々天保十三年(一七八一〜一八四二)
 屋代弘賢著

めて百椿図をゑがきたるに烏丸光広卿はそれが序を作り給ひ
扶桑拾、江都にては松平伊賀守忠晴公務のひまに諸方にある所の品
葉集、色及び名だゝるものをもとめて同じく百椿図をゑがきたるにそれが
序つくりたるは林祭酒道春なり文羅山集、それよりまた九十年を経て享
保中には染井の種樹家伊兵衛といふものゝ著せし地錦抄に載せしは
その数すべて二百二十四種也、今に至りては猶また種類多くいでき
ておほよそ四五百種にも及べるは実に太平の勝事なり、かく本邦に
はその種類おほきものなるに西土にては其種わづかに廿種に過ぎる
を以て朱舜水も此邦の花は唐土よりも種類多くして花もまされりと
朱氏談いへり（後略）
綺東雅いへり（後略）

古今要覧稿卷第三百八

●草木部 椿図一

椿花品類数種ありといへども花卉と花色と花形との三つを以て名を
異にして世にもてあそぼる世にもてあそぼるゝが故に種養家利をあ
らそひ培種に心を用ひ実をふせて以て異樹異花の生ぜん事を専要と
して以て終に奇花をも得るに至れり、そもゝ椿花の世にもてあそ
ぼるゝこと二百年前よりの事は林道春の百椿図の序を見てしられた
り此序前、扱上にいふところの花色花卉花形の三を以て分別すると
きは、紅花あり、白花あり、たまゝ黄花あり、間色をもつていふ
ときはあげてかぞふべからずといへども、紫紅色或は淡紅或は深赤
或は淡赤あり、淡赤の中にも淡の淡なるものあり、或は紅花卉に白
点あるものあり、或は白花卉に紅点あるものあり、且点に大小あり
一々に弁ずべからず、花卉は単弁重弁八重百重千葉のものあり、百

重千葉の花に至りては花葉あらずして花卉簇出す単弁の花の中に一
花かさなり出て開く有、尤奇なり、花形をいへば只大小の差別と横
にひらたき物と豎に細長きものとあり、花の大なるは必ず重弁にあ
り、単弁のものにはなし、もゝへ千葉の花にも大なるはなし、中花
多くして小輪もなし、小輪のものは単弁の花に多し、さて其銘に至
りては国々の方言もあれど多くは種樹家より出たり、猶くはしき事
は初巻に載たり（後略）

83 本邦最初の武士が記した総合園芸書刊本の発行

花壇綱目序

『花壇綱目』巻上
水野元勝著
延宝九年（二六八二）

故人の云る事有、隠者の三友といふは一に日書、二に日茶、三に日
花となん、然るに書は上聖人を師として下群賢を明とす、誠にたの
しまさらんや、茶は胸臆を涼しめ鬱眠を醒し風味還香最精神を
養つへし、祖師是を愛し和俗ことに翫もの古今すくならず、花は
四時の景物として山野の風興とす、或は園中に移植籬廻に花咲を待
事、閑暇の友となれり、此三友は何れを捨へきにあらず、されは諸
の花の中に梅は香花の第一なれば、花の兄として和漢に愛する人多
し、謂る放翁・和請可吟興とし羅浮林の春に遊ぶ人も有、又西の台
にて昔の月をしたひしも花をめつるにあらずや、桜は我國の賞花と
して亦玉荊公か吟詠なきにしもあらず、牡丹は花の富貴とし、明

星も沉香高きに愛してしるも李白か清平調の詩をなす、菊は隱逸の景氣を興して陶潜か弄ひとし、蓮は花の君子と賞して周茂叔か詠とす、千紫万紅誠に愛せさらんや、此外世の中にあらゆる樂遊このむ所に随てなくさみとす、しかハあれと琴詩酒の三友も琴は野身に應せず、詩は不才を愧、酒ははかハなければ友このみてハ乱に及ぶ、好色厚味は殊に害多く、かつうハ其身をそこなふ、居家美服薰香も又貴なきニあらず、歌舞鼓竹は心をなくさむといへとも日夜にとせは隣家の耳かしかましからん、囲碁双六は人にあらそふ心いとむつかし、蹴鞠又疾走するに身苦し、されはたのしまんに只書か茶か花か、思ふに書は尤望といへと浅智疎学にして文字に向はんとすれば眼渋る、茶は器具の用ゝむつかしくして此道にうとし、只独心の友とせんは花而已か、中に樹花は所をける前裁にうゆることかたく、かつうは人力をなやまして、うつすハ心くるしく、なをいたミ枯なんことを思ふ、我にことたるもの草花に過たるハなし、おりにふれ、時に望て其興多し、春の二葉のめくみより、夏は夕立の過ぬる跡に涼しき色を残し、秋ハ夕の露に虫の音をそへ、冬は霜雪に潔き詠をなすとひくる人の媒ともなり、青葉は肝をすくひ眼を明かにし、白花は氣を育し赤色は心を養といへは老身をたすくるたよりにもならん、葉を摘、枝をすかして、いとまなきに、たれば世事をさつて晨夕に安座し他念なければ、塵を払ひ露を籬にそゝきて花の影にやすらへは、かの黒主か哥のさま思ひ出られ侍りて、もて遊ぶものとして花実をまき、うゆる事時節をたとるゆへ草花の品々を四季に分ちて筆にしるし花檀綱目と云、若又我にひとしき人のためにもならんかしと思ふ心しかなき

備陽福城下梅屋水野平内 蔵本

84 松平定信の花鑑

「桜花譜」

松平定信原図・谷文晁原画

文政五年（一八二二）跋

狩野良信写

明治十七年（一八八四）

図版27

浴恩園・春秋園、両園の梅桃桜の花を画かせていくとせも春をのこしてんと、すすんで花ハおなしけれど、かほりの深さ浅さもことなり、画にかきて一やうとミゆるも、いさゝかの色たかひしもあり、またハ枝のさまより花のつきさま、実のつふさま、あるいハ咲おりの遅速にて、その名もたかへれば、かいなすおりハけちめワかれねハ、こゝにのセス、名ところのもまたおなし、その名木のハ実をうへたるなに色なともと木にたかへるおなし、ことし初めたれハ春こにまたかきつくへき也、梅桜のうちに桃のはなのいさゝかましれるハうのとしおりにまきれしなり、外をもとむるもうるさけれハ両園のうちのミのをしるす、文政五のとし、やよひ廿九日 花月翁しるす

85 大木の牡丹、百有余輪の花咲るは更に珍奇

「十万庵遊歴雜記」三編之下

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

参拾六 上尾久村佐治玄琳御物の牡丹花

一、武州豊島郡上尾久村の東といふ処に、佐治玄琳といへる医師は世にめづらしき、大木の牡丹を植をくよし儲に聞しまゝ、頃は四月十八日節少し遅けれど見んものと尋ね行ぬ、此路すじは前にいふ、東湊森稻荷の後通りの中路を左へ入、西北をさして行事凡十五六町にして上尾久村八幡宮の前へ出たり、此宮居閑寂として神垣ものさび、松杉枝を垂雑樹繁茂し、社地広く社大さ五間奥行八九間と覚ゆ、只松風の音のみにして炎暑の頃は鬱熱^{ウツネツ}を避るに可ならん、社の左に御手洗あり、島の中央に弁才天の小祠を勧請せり、社前に供養塔庚申塔の碑ありて、明暦三年及び元禄二正徳三の年号あるもの見ゆれば、近年取立し宮居にはあらざるべし、されば此八幡宮の前を東へ式町余にして石橋を越え、左りへまがりて行事式町余向ふに寺あり華藏院^{ケツウイン}真言といえり、是より右へまがりて突あたり左の方行どまりの家也、是上尾久村の出はづれなれば、小名に呼で東といふにやあらん、斯て玄関へしはぶき案内し、しかゝの事言ひ入れば、六十に近き男立出つゝ会釈^{エシヤク}し安き事也、それより這入り見候へと奥底なく、煎茶よ御たばこ盆よと豆やかにとりはやしけり、此人は伝四郎とて玄琳が兄なれば、玄琳上京の間留守居して夫婦こゝに住なりけり、頓て枝折戸を入りて見るに、林泉の広き樹石の巧妙に取分掃除

の行とゞきたる実に賞すべし、扱先座敷の椽側より上り、端近く着座して彼牡丹を見れば、花大きにうつろひて五七日もわれら来様遅かりしと覚ゆ、軒下を離るゝ事九尺ばかりに植たり、樹の高さ凡七尺余左右へ枝の蔓る事九尺余り、根本にて軒の太さ式尺一寸廻り、花はみな薄紅の八重なり、四方に埋柱を建、家根には雨障子を上たり、樹の振おもしろく書きたる形に似たり、惜むらくはわれらが逍遙七八日遅くして、此花の真盛を見ざる事を、彼伝四郎指さしていえらく、此牡丹元は上総の国に有て幾星霜をか経たりけん、此庭前へ移し植ても最早式拾余年^{ナシク}に向とす、又幹は之より太きはあるべけれど、斯樹形格好のうつくしきはなかるべしと自讃しけるが、実も吾等今日までかゝる大木の振よきを見たることなく、是武州一国の名誉といはんか、伝四郎又いえらく、花多き年は百四十輪づゝ、当年は花少く八十二三輪咲候ひし年の寒暖によるべけれど、大旨立春入十二三日頃をよしとす、左はいへ今は此牡丹公の御預りとなりて、我庭上にながめながら、我ものならず度々御成もありて、猶又年々司役の人々来たり賜ひ、背の高さ左右の枝の広さ幹の太さ花の員数を吟味し、明細に書上賜へば、甚仰々し、但し此樹の養ひとては折節水を根へそゝぐのみなれば更に世話なく、又風にもろからねば風折の煩らひなしと嘸したりき、実も斯る大木にして一本百有余輪の花咲るを見しは初て更に珍奇といふべし、猶又此広庭を東へ過技折戸を出て広き後園にいたる、爰に幅壺間長さ五間の花壇式筋ありて、いろゝの種類の牡丹を植置たり、所謂白き赤き燃^シたる卷たる抱^{カ、ヘ}たる斑^フの入りたる、凡四十余本高さ各四五尺、枝四方へ蔓る事大方三四尺、北の方は葭垣にて風を覆ひ、天井は葭簀を引渡して強

き天日を厭ひ大雨を^{ヨケ}除たり、何れも花うつろひて真盛を見ざりしは
 最^{イト}残多し、されど此庭の広く樹石の巧みに、且は見晴しの能既に座
 敷に着座して、障子明はなせば、北東の方は遙に渺茫と取はなした
 る耕地を望み目前に長流いさぎよく折々帆上し船の往来する風情い
 はん方なし、是豊島のわたし等の川上蟹和のわたしの川下たり、取
 分此玄琳住居の川ばたは、綺麗に^{フリヤキ}振能成木の松幾本となく植ならべ
 しまゝ、小名には松の河岸ともいふとなん、斯林泉の^{ヨキウエ}能上に花に富
 鳥に富、眺望も一入なれば、折々公の成せ賜ふも理ぞかし、元来家
 作も広く間毎々を風流に造作し茶室あり、待合中立ひらきの間それ
 〴〵に、伝四郎案内して見せたりき、此所より千住へ壱里、竹の塚
 へ壱里、駒込の辻へ壱里、王子稻荷へ十八町と教へしまゝ、王子へ
 とこゝろざし踏いだすに、田舎路のくだ〴〵しく武拾四五町にし
 て、王子村の橋本へこそは出たりき、頓て飛鳥山より豊島の長流を
 ながむれば、玄琳居宅は北東にぞありたりける、

86 花菖蒲の培養、一小冊に綴る

自序

震旦にハ神農草を撰ひ、我朝にハ五十猛神菓樹を植はしめ給ふより
 このかた、草木弥増に繁き事、人の愛しやしのふによれり、予

「花菖培養録」
 松平定朝（眞翁）著
 嘉永六年（一八五三）
 図版44

八十一とせにかよふまで世の好悪する様を覽しに、各同しからず、
 詩作る人ハその情を綴り、歌詠ものハ其さまを詠し、名所四蹟風土
 の異なるあれとも皆その眺に耽り、村老野夫兒女にいたるまでめてつ
 るものハ花なり、たちち男のありしとき、百花を好ませられ、園に
 やしなひ眺もあかすほいせられしか、宦事の身にして培養のとく
 へくもあらされハ、余も同じ好める心より其労を助たりき、たちち
 男の世を去り給ふ後も、猶花にあかす、殊花あやめとなん名つけた
 る一品^{こそ}社実^こに老をやしのふ友と親愛侍れハ萌芽の形状によりて鑒定
 し、暮春の頃よりその花目前にみるか如く、夏来て咲る花と花とハ
 我をしてあかさるなかに、菫の根の長き日を忘しめ、萋々たる叢
 ハ風に靡て、おのつから納涼の興をそへ、葉すへにむすふしら露の
 散玉毎に月影をやとし、いつしか秋も暮ゆきて朝な〴〵の淡霜に枯
 葉のさまに名残を思ひ閑窓に炬をひらき、冬籠して、またくる春に
 もへいてん事を待たのしさいふはかりなし、此はなの培養九牛が一
 毛得る所あるに似たれハ、一小冊に杜撰を綴り、題して花菖培養録
 といふ、みるもの好事を笑ふへきなれども、真に花を好の君子なら
 ハ我耄言にあらさるをしらん

嘉永六癸丑のとし青陽

八十一翁

定朝

「源定朝（眞翁）」
 印 印

87 隠居大名柳沢信鴻^{*}の園芸日記

「宴遊日記」巻八上〜巻九下より抜粋

柳沢信鴻 著

安永九年〜天明元年（一七八〇〜一八一）

*柳沢信鴻……大和郡山藩主。致仕後「宴遊日記」を記す。ここでは園芸記録を採録したが、芝焼・芝刈・山菜取り・摘草等、日常的に行われていることは紙面の都合上、省略した。表紙図版解説（図版末尾）参照のこと。

関連図版07・28・29

安永九年正月

元日 お隆に梅・福寿草鉢植貰ふ○根岸に梅・福寿草鉢植貰ふ
 三日 松太郎に梅鉢植貰ふ○何佐に梅鉢植貰ふ（中略）お隆福寿草遣ハす（中略）○お隆紋附にて梅鉢植取る
 五日 仙宅に紅筆梅鉢植貰ふ
 七日 筆、青軸梅鉢植を紋附にて取る、貰ふ、烟袋遣ハす○紋附紅筆梅鉢植を取る
 八日 ○此程の雪にて倒れし木有、大枝析^{（ツマ）}たる松有故、清兵衛木を植、松の掛り枝を伐
 九日 ○今朝慶寿院より紅梅鉢植貰ひ、木振気に入さるゆへ樹屋へ取替に遣し紅白鉢植二株来る
 十三日 ○村井に難波紅梅鉢植貰ふ
 十六日 ○大雪中、谷・高・大吉・松悦・根岸召連園中廻り庵へ行、庵へ伊達吉・万吉・弓・俊・せの来、又園中不殘廻る、深処尺余
 十九日 ○三井にお隆枝垂梅鉢植貰ふ○清兵衛園中の折たる松を

伐、酒を与ふ

廿二日 ○村井に枝垂梅鉢植貰ふ

廿三日 ○滝出番、河越落老鉢植貰ふ、一根十三茎

廿六日 ○園中赤根を堀、木葉を焼、土筆を取

三十日 吳丹願にて山田見治・小柏・鷺栖に園中見せる

二月

朔日 ○木俣同道神谷に園中見せる○清兵衛三申庵門外へ飛石を置

五日 ○夕土筆を取、蓮池の枯草を焼く、御霊前参詣、暮比帰る

（後略）

六日 ○蓮池枯草を焼、漫延漸々撲滅○晩に庵へ行串柿遣ハす、

梅の枝折帰る（後略）

九日 ○北庭白梅満開、八重紅梅漸綻、泉水八分一の水

十四日 ○今日より清兵衛吟花亭の藤を掘

十五日 ○清兵衛塀外園池の渚へ小松植る

十七日 ○るやに豊後梅鉢植貰ふ○山本妻の母来、庭見する○南

天の枝を伐つ○五十嵐・寺沢水分石橋辺へ藤棚を作る

十八日 ○九ツより浅草参詣（中略）山下より竹町へ掛り三枚橋

へ出植樹を見る、渡部に命し梅紅白接分棒木を直を付させ、山本

梅を求し由にて来る、樹ハ植樹屋先へ屋敷へ持込に申付し由（中

略）七半過帰廬、帰り掛渡辺を清兵衛方へ呼に遣り梅樹を三申庵

南庭へ植させる（後略）

十九日 ○唐桑樹買ひ三申庵南庭へ植る

廿日 ○庭中梅満開^{（豊後梅一昨）}○梅の花見、菜飯・田楽を焼、白堂

廿日 ○庭中梅満開より發香

も招

廿一日 ○藤棚出来、清兵衛今日より菊花壇の地を耕、庭の樹を植替る○松亭庭の紅梅の穂を松悦持参

廿二日 ○いさ姑園中見する

廿四日 ○清兵衛山裏の桜を茶屋の前へ植

廿七日 ○三井に桃鉢植貰ふ

廿八日 ○松悦妻来る、桃鉢植二株貰ふ（後略）

廿九日 ○兼而園中菊を作り見せん事を約し、今日菊造同道花壇見する、当時西久保昌山主税邸に倚住清川馬龍と云隠居之由、右馬龍手製甘糕并蜜酒貰ふ、甘糕ハ諸菓に擬摸せる者なり○鳥母来る、饅頭遣す、雨中園中見する

三十日 ○九半前より他行（中略）広小路にて彼岸桜立花を穴沢に買ハせ、孔雀屋へ行んと竹町迄出しか風烈しき故黒門へ入湯島初めにて八の谷中通り首振下にて大黒手遊を求め、千駄木植樹屋へ立寄、動坂植木屋にて椽に休み、煙を弄し七ツ前帰廬、行灯・桜をお隆、手遊びを甚三郎へ遣ハす

三月

朔日 ○七過御霊前参詣、雨中傘にて行、庵へ立寄桃の枝貰ひ暮前帰直に遣す由もる供谷・角・鳥・伊藤

二日 ○もみ・楓等のみはえを茅屋へ植る

四日 ○九半前より湯島・浅草参詣（中略）車坂より入、初め鰻堤より所々彼岸桜・桃花満開（後略）

五日 ○つはき二株求め清兵衛植る○園中彼岸桃満開

七日 ○去々年実生の南天を北牆の下へ植替る○八半頃よりお隆

同道蔵を折八十土筆を取、海老根・春蘭を堀、珠成も庭へ来る（中略）○旧年生たる南天苗を木村に千秋宝庭へ植させる

八日 ○畑の桃苗を大山辺へ植る○庵の垂桃を三申庵垣外へ植る○庭の海棠を芦辺山へ植る○七比より米社・お隆同道藪を廻り木の苗・春蘭等を堀○園中桜満開、日の暮る頃

繁り合ふ松の木陰ハ暮果て峰に残れる花のしら雲 広壽
返し

咲初て風もさそはぬ山さとの入相急く花のゆふ暮

九日 ○本屋小川井同伴五人医者内ニ在園中見する、呉丹同伴○桜樹念株二聯出来、外ニ金兵衛へ遣ハすいらたか出来、袖岡銭塔納る便に遣ハす、歯痛の護符も取に遣ハす○園中桜真盛、春草を摘、海老根を堀○新井に楓樹貰ふ、山へ植る○天野龍八家内召連来る、園中見する○八前よりお隆同道西原へつみ草に行、（中略）龍志西隣勝蔵院と云明寺今日老尼一人在、境内へ行、庭に大樹の彼岸桜満開（後略）

十日 ○仙宅に桜草貰ふ○八少前よりお隆同道つみ草に出、供鞍岡・高田・谷・石・鳥・伊達吉・りをとし・清寿・高橋・伊藤・尾沢・岩崎、殿中辻より山王山を下り田畑堤にて姫菜を摘、中里村へ入牡丹屋前四辻にて小荷駄騒ぐ無量寺前より草を摘、三町ばかり西の畷前後にて芹を取、七頃笠志方へ行、笠志迎に出、彼処にて弁当つかふ、長尾、出宅の頃供に後れ王子滝川辺迄行し由にて七前尋来る、仮山を廻り茶廊の口へ出遠望、此頃桜花・桃季・辛夷満開（中略）○お永よりお隆へ文、更紗梅貰ふ

十一日 ○和介おゐ来、園中見する○礪川より明日木工允同道園

中へ来へき由申来、お隆文にて断申つかハす

十二日 ○松本願ひにて建部氏奥女中園中見する

十三日 清川馬龍来、菊四十一種植る○維摩院より桜花貰ふ○秋

葉統土堤を清兵衛堀返す故、蕨根を取南林へ植、蕨四十五茎取る○

巢鴨丸屋五兵衛家内園中見する○夕馬龍に園中見する、村井同道

十四日 ○疋田・中村妻へ園中見する○公菜返書、庭前の桜・桃

折枝、春興すり物貰ふ、珠成へ手昏にて筐入海鮮・青物数品・骨

杯等来る、発句も贈らる

僻居の住居ながら江戸近き所として

柳桜春の錦の切^レ外^レ

公菜

返し

御使の錦着て来る桜かな

即答園中の花折てつかハす○近習共園中花見する故、茶・煎餅

等遣ハす○村井・溝口奥庭の菊根分○鈴木屋せい同道にて近所町

家の妻女八人雨中園中見物に来る（後略）

十六日 牧野娘の姻家露竹家中より婦人数人園中見物に来る○雄

島・溝口妻園中見する○九過よりお隆同道摘草に出（中略）根岸

先へ来り在、離亭にハ侍客二人在、取つき座敷にて弁当、田楽焼

する（中略）亭主庭に植し由桜草数株貰ふ（中略）

十七日 ○浅田新治園中見する（中略）○花壇土入替○山本・萩原・

吉田等か妻女園中見する○房父・ほの姉来る、園中見する○鉢植

桃を園中へ植る○清兵衛躑躅差芽を太隠山北麓へ移植る

十八日 ○谷庭の庭桜庵へ持行遣ハす○暁雪父子に庭見する○七

過忠躬来る、園中召連、お隆同道草根を堀、野韭を取る○和介栗

林の裏へ杉を並樹に植る

十九日 ○八頃峰来り、口哲、家内親族召連鶯裡方迄来り、園中

見度由願ふにつき使来り、見すへき由申遣し、峰直に帰る○八

過鶯裡案内にて口哲家内女五人男六人園中見する、七過帰る○垣

下の観音草を抜、菖蒲植る○清兵衛妹背山の差芽躑躅を堀、太隠

山麓へ移し植る

二十日 九前より浅草参詣（中略）門前花見遊客多し（中略）土

堤より金杉へ出、町家へ寄山崎町へ行、道法と火除通との遠近を

間へハ五六町遠き由ゆへ直行、植樹屋を見、小野照崎参詣、裏門

より出（中略）千駄樹植樹屋を見（中略）帰家（後略）

廿二日 ○泉池此頃涸尽

廿三日 りを孫今日来るにつき小燕子花鉢うへ貰ふ○此程忠躬に

約せし棣棠花を掘らせ遣ハす（中略）○和介親類来、園中見する

○萩原官平・山村庄兵衛・松田喜太郎園中見する

廿四日 ○夕園中へ出る時伝蔵案内にて伊勢屋家内女四人、男三

人来る故、庵へ行椒芽を摘、暮時帰る

廿五日 ○昼雨中お隆同道園中廻るうち雨止草根を掘、桃苗を畑

へ植る○笠志来、園中見する（中略）○お隆と庭にて蒲公英を取、

笠志に逢ふ、杜鵑草も掘垣表に植る○笠志発句を書見する

花咲せちいか蒔たる御園哉 笠志

返し

祖父／＼のむかしながらや朽桜

明日遣ハす

廿六日 ○子建妻の妹女等五人、中島女等三人園中見する○佐々

木日向守妻九半過園中へ来る、春案内、女二人、男四人村井付廻る、甘糕等遣ハす、芦辺山より見る

廿七日 ○溝口、野新田へ行し由桜草貰ふ○銀鷺より雞声庵躑躅盛の由にて発句請来る(中略)○銀鷺へ躑躅の書明日遣ハす

染井とハ呉楚東南に躑躅かな

廿八日 ○一昨日刈萩を滝へ遣す、笠志へも遣ハす

廿九日 ○春蘭を北庭へ植

四月

朔日 ○村井・溝口菊苗植る(中略)○鞍岡妻女兒等園中見する

二日 ○今日長屋妻女等園中見する○七比妙三来る、孫鉄藏に園中みする、門口にて逢、饅頭遣ハす

三日 ○夕園中老人峰麓の草を払ふ、珠成・お浅・お隆も出

五日 ○和助世話にて庭見物来る、りを孫分の者并彦根侯医者も来、園中見する○七よりお浅・お隆同道近郊へ出(中略)牡丹見

に富行し由、直に牡丹花屋へ行、坐敷にハ諸侯方忍にて来りし様子、酒燕吸語聞ゆ、牡丹真盛也、障子に穴してのそく様子ゆへこなた

はかり牡丹を見、引返し帰る時玄関へ数人駆出見る者多し(後略)

六日 ○七半頃より大雨中庵へ行、(中略)泉池底に水溜る

七日 ○夕お隆同道蔵五十一茎折、黄山蘭・白山蘭を掘、老人峰麓の草根を掘る(後略)

八日 今日より夏花を供す○前町々家婦園中見する○仏誕日につき長屋婦人園中見する、秋葉神酒備へ参詣ゆるす○溝口親族、中

島親族男女園中見する

九日 ○夷屋手代二人来、園中見する

十一日 ○長沢伴蔵来る、園中見する○七頃伊達吉帰る、梅鉢植・団扇・錦絵・牡若書たる短冊三葉貰ふ(後略)

十二日 ○此頃清兵衛蓮池西北四間計筈出、山間に溪を作る

十三日 ○木の古根掘し百姓より芝納る故、清兵衛秋葉の山へ付る

十六日 ○五十嵐親族来、園中見する○九過より他行(中略)穴沢を千駄樹より鉄せん買に廻し松悦へ立寄(中略)○お隆へ鉄せん(中略)遣ハす

十八日 津田家内山本客願ひ園中見する

十九日 ○浜野に長春棘花貰ふ○園中指芽躑躅を太隠山北の代口へ移植、庵へ寄暮時帰る(後略)

廿二日 子建に長春棘花貰ふ○昼蒲公を取、栗芽生数十株取植る

廿三日 ○米徳七少前帰る、池田・石河・近藤に園中見する

廿六日 ○お隆と園中薯蓣を掘、庵へ行、躑躅の芽を取山裏へさし、お隆南天・山椒を貰ふ

廿七日 ○昼躑躅の芽を差す○七過園中躑躅の芽を取、米叔召連

庭へ珠成来る、庵へ寄、八十八・甚三郎来る、躑躅を差す

廿八日 ○七比よりお隆同道草根を掘、躑躅・杜鵑花・霧島を差す

三十日 ○杜鵑花の芽を取差す、お隆芦辺の草根を掘る○此頃秋葉の堤へ麦門冬を植る○泉池二分水溜る

五月

朔日 杜鵑花・躑躅の芽を差す○松田旧宅の梅大樹の根を廻す

三日 ○七過お隆同道草根を掘、躑躅の芽をさす

四日 ○夕お隆同道躑躅の芽を折山裏へさす(後略)

五日 多福寺来、扇箱持参、表にて逢、園中見する、甘糕与ふ○

昨夜尾沢に夏透百合花貰ふ○菊作清川馬龍来る○房父来園中見する、同道二三人遠州の客の由

六日 昼躑躅の芽を差し栗芽生を植る○お隆同道七頃より近郊閑歩（中略）平つか坂下の橋にて夏蘿蔔・新にんしんを四五人洗ふゆへにんしんを買ハせ、酒や庭の植木を見、左方民家に入淡盛草を穴沢に買ハせ、平塚明神観音堂拝し、笠志茶や江入り庭通り住居へ行、干鰹遣ハし爰にて弁当つかひ、杜鵑花の芽をとり暮過起行、（後略）

七日 夕躑躅の芽を取、庵へ行東の山へ差す

八日 ○雄島妻の姉に園中見する○園中廻り栗の芽生を取、桑・榎を取、庵へ行、暮時帰る

九日 ○鳥母来、園中見する

十一日 根岸浅草へ参詣せし由にて花数種貰ふ○夕方お隆同道妹背山雑草を払ふ、杜鵑華の芽を差す

十二日 ○杜鵑花の芽を指す○清兵衛今日より秋葉磴道左右に芝を付る

十四日 ○木俣よりお隆緋百合貰ふ○清兵衛等大手水鉢台木をお隆東の椽側へ居る○園中夏花摘、栗苗を取、庵へ行、白堂に自然薯蓣貰ふ、暮前帰る（後略）

十五日 ○躑躅の芽を差す

十六日 ○お永より文、此程ねたり遣せし蘭花・巻帗・甘糕貰ふ

○お隆同道七過妹背山掃除、松を作る

十七日 ○千葉仲衛門妻子園中見する

十八日 ○お隆と庭へ出、芦辺水側の草根を掘る、七過よりまた

妹背山の草を払ひ松を作る、七半過雨至帰る

十九日 ○夕お隆と妹背山辺の草を払ひ杜鵑花・松を造る

廿日 ○和助願ひにて婦人二人、少女一人園中見する○昼お隆と東埠の草根を掘、諸樹の芽生を東畑へ植る○杜鵑花を差し庵へ行、暮前帰る

廿一日 ○海石榴芽を差す（後略）

廿二日 ○園中茱萸子を拾ひ栗芽生を植る○お隆と名古山の草根を掘る○夕お隆と茱萸子拾ひ尻山の草を刈、栗芽生植る

廿三日 ○園中躑躅畑の草を取、松子を拾ひ尾沢へ遣ハす○松田伝十郎方の根廻しせし大梅樹倒るゝ故 清兵衛に園中芦辺に植さする○今日の風近年の大猛

廿四日 ○昨日の大風に落し松笠・松枝等拾ふ

廿九日 ○お隆と園中廻る、日出甚暑し、栗芽生植る

六月

朔日 ○山寺息・船田息・飯田息来、園中見する

三日 今日より清兵衛水分石辺を修築○昼お隆と園中廻り、くこの如き実の生たる枝を取帰る○今朝の実を松悦に見せしに植木やへ尋し所、花丁子と云由、田舎にてハ和胡椒と云由、手帗にて申来る

六日 園中松・楓等の芽生を畑へ植る

十二日 馬龍来る、木朝顔鉢植貰ふ、お隆も貰ふ、饅頭遣ハす

十五日 ○七半比よりお隆同道棣棠埠の草を刈、東方虹見、村雨至、茶屋へ雨を避、又草を刈

十八日 ○清兵衛水分石亭側の埠を築直す

廿一日 お隆に夏菊貰ふ

廿四日 ○菊屋長左衛門息来、園中見する

七月

六日 (中略) 下村の百姓長屋へ来り八十八逢に行園中見する、
塩鱸遣ハす

九日 蔵持遠類越後侯臣二人来、園中見する○橋掛後の矢竹を清
兵衛掘茅屋へ植る、酒遣ハす

十一日 ○お千重迎の者に園中見せる○啜龍供廻りへ園中見する
十二日 清兵衛居間向の樹刈つめ○夕お隆同道海石榴躑躅畑の草
を払ひ御霊前参詣、暮時帰る(後略)

十三日 清兵衛奥庭の樹を造る○吾山長屋迄来園中見する、連二人
廿二日 ○同道二人園中見する○伊勢手紙、雷神草鉢植貰ふ、即答
廿四日 ○安元・杜頭蔵、中村新八・柘植又五郎・和田金三郎来、
園中見する

廿五日 ○溝口奥庭菊手入

廿六日 ○みよ母来る、園中見する

廿七日 尾沢に折花貰ふ○園婦智大山軍次息大助同道来る、園中
見する○平七、沖衛門同道にて園中見する、(中略)

廿八日 ○根岸弟糟谷十郎兵衛来、園中見する 伊達吉
徑水廻

八月

二日 清兵衛等芦辺山の草を払ひ樹を造る

四日 ○伊藤弟佐野衛門来り園中見する、鰻頭遣ハす、足久保茶
貰ふ

五日 ○昼お隆同道園中草を払ふ、芦辺桜樹に蜂群、木俣・渡辺

鵜にて取る

八日 ○真母園中見する

十四日 ○昼過お隆同道園中草を払ひ松苗を植る

十五日 (前略) 水谷に園中見する

十九日 ○るかう鉢植を滝に貰ふ

二十日 ○山本縁類婦人二人来園中見する

廿五日 九時より湯島参詣、(中略) 植木を見、草花買わせ(中略)

八時帰廬(後略)

廿八日 三申庵北庭へ蛇出、飛石の下の穴へ入る故清兵衛等飛石
を揚穴を埋る

廿九日 ○北の塀を広る故清兵衛霧嶋二株植直す

九月

七日 ○庭の竹塀掛直す

十日 ○中村・松崎三申庵南庭の竹垣を造なをす

十二日 ○清兵衛等お隆庭をならす

十四日 ○三申庵庭を清兵衛植替○芦辺へ花壇を造り草花を移植る

十五日 ○鳥父五郎兵衛来り園中見せ、鰻頭遣ハす

十六日 (前略) 大屋の女召連来り園中見する

十七日 ○周甫・幸伯同道園中見する

十八日 ○九半前より珠成同道浅草参詣、(中略) 富士やに宏斎
流一挂挿花会幕打人多く来り見るゆへ内に入見る、見物多し、塗
中甚賑し、(中略) 蓬萊屋にも咀英挿花会甚賑し、内に入見るう
ち三卿のうち御通の様子にて幕卸す、(中略)

二十日 ○昨日留守に立花玄柳来、園中見する

廿二日 ○谷部屋の菊を見る○みよ兄又蔵来る、園中見する○七半頃庵へ行紫蘂子貰ふ、暮頃白堂召連菊壇見する（後略）

廿五日 ○九半頃より湯嶋参詣、（中略）伊勢屋に休む、町人一人休み、迹より町人二人植菊を提来る、植木を見る、参詣群集、万年青草・白夷唐橘・番椒を買ハセ（中略）女坂に青々館門人盆石会の札有、坂下ゆへ行、五人集盆石を造り有、十六七出来、皆粉石にて不二・三保或ハ菊花等を蒔く、（中略）

廿六日 ○菊壇覆障掛る

廿七日 ○留守に方穀に園中見する

廿八日 ○三申庵庭の菊の覆ひ掛る

廿九日 （中略）昼お隆同道吹上の草を払ひ小松を植へ初茸一茎取る○甲馬縁類婦人四人、男子一人園中見する○市衛門に花壇見せ園中にて逢ふ○坪井に園中見する

三十日 （中略）今日菊の藩籬造る、（後略）

十月

二日 九頃佐々木三郎兵衛園中見物に来る（中略）半三郎妹・隣の女来る、園中見する○藪の柚を園中へ移し植

三日 ○九半頃より浅草参詣、（中略）浮雲折々日色を翳ふ、袷・単羽織にて冷なるゆへ動坂花屋椽側仮り綿入を着る、庭樹植替る様子、（中略）○清兵衛妻等四五人園中見する

五日 ○八半過より珠成同道隣村の菊を見る、（中略）西門より出左太郎菊を見、（後略）

六日 ○せの父来り園中見する○薪屋銀八来り園中見する、同道一人

七日 ○馬龍来る、折菊貰ふ○穴沢・萩原家内菊見に来る○野田妻も菊見に来る○御鷹匠藤倉大八・篠原熊之助菊見に来る、中嶋同道○七頃馬龍に逢、お隆同道表庭の菊を見る○暮而公菜返書来、菊花貰ふ○昼成慶院内用有て来り菊を見帰りし由、予ハ不逢

八日 ○菊花を六本木へ上る

十日 ○笠志菊見に来る○長尾妻等十数人菊見に来る○八すき前町伊勢や金兵衛妻・升屋理衛門妻・美濃屋次兵衛妻・湯屋庄兵衛妻・烟草屋二郎妻・柳屋平兵衛妻・紺屋清兵衛妻菊見に来る

十一日 ○成慶院より同輩僧衆園中見物の事申来○昼庵へ行菊花を折、糕を白堂へ遣ハす（中略）○鉢置梅を園中へ植る○清兵衛

近所の者四五人園中見する○美濃や次兵衛家内九人菊見に来る○清水屋権兵衛、升屋利衛門・河内屋吉衛門・伊勢屋七兵衛・美濃屋吉兵衛・同三四郎・藤屋伊左衛門・三河屋玉兵衛・海老屋茂八・京屋清兵衛菊見に来る○上田に園中見する、茶・甘糕等遣ハす

十二日 ○升屋理衛門に菊見する○馬龍来、折菊并実生の菊二十三種の銘を請ふ故下ヶ札にして遣ハす

十三日 ○篠原熊之助家内等二十余人菊見に来○巢鴨美濃屋才兵衛男女九人・同本屋次郎兵衛男女五人菊見に来る○吾山夫婦・孫女二人・竹動上下七人菊見に来る○九半頃より珠成同道雑司谷へ行、（中略）九郎僧立花を見、（中略）

十四日 ○上野伴助来、園中見する、庭にて逢ふ○竹町井筒や長三郎・越中屋太兵衛家内六人園中見する○藤五郎・釜次郎・吉之助園中見する

十五日 材木屋吉衛門家内・巢鴨丸屋五兵衛家内・肴武兵衛家内

廿人余園中見物に来る○お葉園御家人夫婦園中見物に来る

十六日 伊達吉に海石榴鉢植貰ふ○今日雄嶋・溝口家内菊見に来る、吉祥寺前越中屋家内六人も来る

十七日 ○千葉方の客七八人并山寺妙之助連七人園中見する○秀父来る、^(註)甘糕貰ふ、叔父従弟同道園中見する

廿日 ○御家人近藤円次郎・同宇八・高野理衛門、松悦同道園中見する○留守に在転来、十評続五百韵下草持参、浄写願ふ、園中見する

廿二日 米伯方女客、庄司家内等五六人園中見する○峰母・石河妻・上田女・西倉女園中見する○松悦妻の姉并二女園中見する○其余見物数十人来る

廿三日 ○原田又兵衛女客四人、僕一人園中見する

廿四日 ○臯禽より百韻後藤持参、園中見する

廿六日 悉南天の実を取る

廿七日 ○円通寺・養源寺・勝林寺・天眼寺・三光院・岡本哺逸来、園中見する、呉丹案内

廿九日 妹背山下の芝を焼○留守のうち冬映来り、園中見する由
○宵に市出、馬龍より菊花貰ふ

十一月

朔日 ○二十種の菊に名を附遣ハす

三日 ○九過より大師・浅草参詣(中略) 広徳寺前にて子共草履求め、山下にて大小売を買ハせ、広小路植樹を見廻り南天二株買ひ、(中略) 南天をお隆、草履を甚三郎へ遣ハす○留守のうち土井能州医師伊藤宗陸園中見する、米魚案内

四日 今日高家有馬兵部・中条大和・大友因幡・戸田土佐・宮原和泉・横瀬駿河園中へ被来につき、啜龍・米社四前より来る○四半前横瀬直に園中へ被来詠歌につき硯・昏等遣ハす○貞臣の朝臣へよみてまいらす

紅葉ちり菊もうつらふ山里は年に稀なる人もまち得て

九過茅廬にて貞臣朝臣に逢、無程帰る○九つ過五人不残来らる(中略) 九半頃茅廬へ行、珠成同道、六人の衆に逢○高家衆五過帰られ、児輩四過帰りし由

五日 ○下山按内出家二人、士一人園中見する

六日 ○馬龍菊を刈に来る、雨天故帰る

(※編者注 十四日有卦入)

十五日 ○根岸・何佐に福寿草蒔鉢植・鯉魚貰ふ○下山・相原・長尾・坐光寺・五味より風鈴・笛・福寿草・吹寄菓子・筆・二股蘿蔔・鯉貰ふ○溝口・萩原・蔵持に福寿草貰ふ

十六日 四少過より珠成同道月桂寺・六本木へ行、(中略) 市兵衛町裏門より入、蓋物・福寿草・菓子・昆布上る、(中略) 神田台井筒やに休み、土物店八兵衛邸にて姫菜求め、松悦前にて五ツの拍子木打、奥口より帰廬、姫菜并猿や茄子漬お隆へ遣ハす

十八日 ○泉池涸尽西方斗水少溜

廿一日 ○妹背山麓芝を焼○茶間りんこを舞台庭へ植る○夕芝^(片)芝の芝を焼

廿四日 ○九半前より浅草御堂参詣、(中略) 堂左楊枝屋にて酒中花買ひ俵町にて福寿草・造花・海苔を買ひ前路を帰る、(中略) 帰廬暮前、海苔・酒中花をお隆、造花を捨、干糕を甚三郎へ遣ハす

廿五日 ○甚三郎に梅枝貰ふ○九半頃より湯島参詣、(中略)湯島植樹を見、(中略)女坂より下り中町焼物屋にて諸々花生を見れとも意に叶ふなし、(中略)

十二月

朔日 ○九半頃より他行、(中略)白銀観音参詣、万古廊にて花生買ひ(中略)花生お隆へ遣ハす

四日 ○泉池涸尽、魚を不残溜へ入る

九日 ○富田母に福寿^(重)草貰ふ

十二日 ○三井に納豆・福寿草貰ふ

廿一日 ○中村に鉢植枝垂梅・鳳凰竹貰ふ

廿五日 ○九半過より湯島浅草参詣、(中略)湯島参詣、お清に休む、お清に福寿草鉢植貰ふ、(後略)

廿六日 ○熊に梅松鉢うへ貰ふ

廿七日 ○何佐に紅梅鉢植貰ふ

廿八日 ○伊三郎に松竹梅石台植貰ふ

安永十年正月

元日 (中略)根岸に梅鉢植貰ふ

二日 ○岩島に梅・つはき折花貰ふ○阿佐に梅鉢植貰ふ

四日 ○谷に唐橘・福寿草貰ふ、お隆福寿草貰ふ

十日 ○坐光寺妻縁の者二人来り、園中見する

十二日 ○紅梅鉢植を紋附にて取る○角に紅梅鉢植貰ふ

十八日 ○九半過より大師参詣、(中略)清水参詣、山内群集、坂を下り黒門より出植樹を見、(後略)

二十日 ○萩原縁家小川三太夫園中見する

廿六日 ○鉢植梅をお隆南の庭芦辺へ植る

二月

二日 ○松悦に梅花貰ふ

三日 ○米社みやけ蕎麦・調度利休燭台・浜荻筆貰ふ、お隆烟盆其外駿河細工数品、珠成硯蓋・筆・蘭貰ふ、海鮮も貰ふ

四日 ○洞津侯家中東江所持中川久^{鷹丞}草画の蘭二葉、笠志取次にて賛乞ふ故題し遣ハす

芝蘭無人馨幽林

蘭よ／＼人やりならハ香ハあらし

一葉は古き句書て遣ハす

五日 ○みよ鉢植の石を洗ふ故烟袋つかわす○木村庭前の花壇を崩す

六日 ○昼東山裏芝を焼、小松を植る

七日 ○南天苗を北墻下の花壇へ植る

八日 ○九半前より滝野村寿徳寺観音へ参詣、(中略)一本桜より西原権左衛門方へ行、此程日光より持来りし五葉の松を見る、枝三十余四方へ分れ五六尺計の松也、(後略)

十日 清兵衛、蓮地北山手入一昨日込にすみ、今日より泉池を堀、南岸を築く

○鉢植のした^{旧年水不涸今年早春より水涸尽仍而又泉池を浚}

れ梅をお隆南の庭へ植る

十三日 (前略)筑士屋与市、妻・女石二人同道来、園中見する

十六日 ○稽古挿花十七八種建

十七日 ○下山二男貞衛門妻・子園中見する、昨日角、伊勢や江伊勢よりの旅客来、松崎願にて園中見する○福原願ひ出家一人園

中見する

十九日 ○みよ兄惣兵衛小女召連来る、園中見する、(後略)

廿二日 ○米伯に杏花貰ふ

廿三日 ○お隆南庭へ桜を植る○高田女石并孫園中見する○りを、よめ・孫来る、親族も来り園中見する○市より柿鉢植貰ふ○お隆庭江桜三株植る

廿六日 白堂より連翹・梅花折花貰ふ(中略)

(所々梅花満開)

廿九日 ○三申庵軒前の梅松を清兵衛植替る、酒与ふ○南天の葉を切る○南天の実を蒔○白堂梅枝持参、貰ふ(中略) 泉池魚溜の底に雨にて今日尺余増今度堀たる所も八分の水

三十日 ○お隆みよへ銀簪遣ハす、七過万吉帰る、緋桃鉢植貰ふ

三月

六日 三申庵庭へ鴛鴦庭籠寺沢作る

七日 ○三申庵庭の梅植替

九日 九前より珠成同道浅草参詣、(中略)数珠屋へ立寄、(中略)鉢植海棠に直を付れ共うらす、(中略)千駄樹花屋へより鉢植を見、動坂花屋にて牡丹・桃求させ、樹大なる故後剋堀に遣へき由穴沢約し、八半前帰廬、(中略)○権兵衛来り園中見する

十日 ○昨日買し牡丹・桃お隆北庭へ植る○九半頃よりお隆同道摘草に出、(中略)滝不動前東南行、飛鳥山見ゆる故引返し西行、

西原源五衛門庭を見、裏門より出、(後略)

十一日 ○清兵衛庭籠より泉池へ通樋を作る

十四日 ○馬龍来る、清兵衛菊壇場を耕す

十五日 ○園婦みよ母・忠貞園中見する、亘理案内

十六日 太隠山の桜今日真盛なれハ折て冬映へ賜

庵中事繁くて郊外の春光も見すなと老蟹より昨日消そこ有まいてかゝる村落へ杖を曳かん事も覚束なければ翌日の雪と降らさるんほとにとて一枝を贈る

風の間を花ぬす人や庭の花

○松崎お隆庭の竹垣を造直す○八重桜をお隆へ遣ハし北庭へ植る
十七日 九少前よりお隆同道珠明院善光寺如来開帳参詣、供穴沢・鞍岡・高田・木俣・相原・長尾・々沢・谷・袖岡・八代・ほの・万吉・清寿・元・何佐・富貴・りを・伊藤・木村、大雲満天南風にて出没服一ツ先へ出待合せ笠志前へかゝる、郷に旅客駕より下り休居たり、笠志郷外へ出交語、平塚八幡觀世音拝す、利島尾久の舟甚込合ふ由ゆへ今朝吟八方へ舟貸度由申遣ハし、又爰より尾沢を案内に遣ハす、平塚坂を下り梶原、堀内村前へ尾沢、吟八家来引連来、梶原村へ入川端薪屋次郎兵衛門へ入、八重桜数株満開、つき色々咲乱たり、坐敷に女客・武士など見ゆ、供部やに下部数人見ゆ、梶原淵崖上より歩みを渡し舟に乗る、歩み陰にて危し、舟狭き故二度に渡る、此舟にはお隆・谷・袖岡・八代・ほの・万吉・もと・穴沢・鞍岡・相原・伊藤はかり乗る、筋違にわたす、尾久のわたし三町はかり先に見ゆ、向の岸は土堤にて坂險阻也、土堤の下ハ野新田に続きたる曠野、桜草所々に開き、あちさいに似て黄なる花の草、解夏草一面、三町はかりにて畑の間へ入、三達の徑に昏に枝折つきたれハ左折直行、程なく沼田村珠明院也、高札たてみせ物鬼娘看板有、参詣多からず、内陣にて拝

す、旧年拝せし尊像とハ殊なり、初穂万金奉り迹より来る者に内陳拝の事を頼み、富貴を残し涅槃像拝す、旧年より甚小し、帰路姫菜・野韭・忍冬を取々行、曠野少手前にて先剋次兵衛方に有し客、後家主人と見へ少女婢等五六人・武士五六人跟隨、曠野にて桜草を堀、向ふより婦四五人來、従者のいへる次兵衛舟崖下にて由伝語、南風颯々、高田等ハ珠明寺門前にて來り、直に如來を拝し追つく、爰より又舟に乗、同船前に同、木俣も乗、伊藤へさきの竿をさす、次兵衛坐敷に休む、庭狭く仮山水在、前剋休し人の狭箱井上家の紋なり、床脇に在、爰より又々摘草、芹もつみ、平塚坂下石橋前植樹屋を貸り奥座敷にて弁当遣ふ、庭一面ハ汐楓等を植、此家往來の茶屋もする故表腰かけに客在、田樂等を焼する、平塚坂を升る頃より南風村雨降來、傘をさし笠志茶店へ行、此雨にて武士客三人酈上へ來れハ庭通り住居へ行、雨止み無量寺前田畝にて摘草、牡丹花や前より畑中を螢沢江出、暮前帰廬（後略）

十八日 ○庭籠昨日出來、内へ拓植を植る○穴沢家内・溝口・萩原妻園中見する○桜散初る

十九日 ○戒善院より桜華貰ふ○園中枯根を堀者に桜樹貰ひ大山前に植○芦辺の松二株清兵衛植替る○和助伯父來、園中見する、巢鴨美濃屋願男四五人・女二三人同斷○表近習園中へ花見に出

二十日 ○清兵衛庭籠へ芝を附、石を置○夕藪を廻り万年青樹・楓苗・もみ苗・春蘭を堀る○お隆部屋花見、菜飯、田樂を焼

廿一日 清兵衛今日より畑境の杉を植替庭を広げる

廿三日 ○八代并父弟來る、園中見する

廿四日 園中へ婦人女子等來り、願なき故尾沢に命し園中を出だす

廿六日 ○其・とはに桜鉢植、鳥に楓接分鉢植、峰・俊に榆子鉢植貰ふ

廿八日 ○熊に桜草貰ふ

四月

朔日 ○清兵衛昨今杉垣を結ふ

三日 ○九少過より浅草参詣、（中略）山下より竹町広小路へ出植樹を見る、（後略）

六日 庭にて伐し松枝を長局へ遣ハす○作衛門手代忠兵衛・市供にて來り園中見する○夕蒲公・三葉・芹を取り、蕨十七茎折、庵へ立寄、南庭にて黄山蘭・鳥頭を堀、林中にて小蛇を見る、珠成部屋へ行、奥へ來り峰はかり在、蕨を遣し、鳥頭を庭へ植、暮前歸る○角・みよ・穴沢長屋へちよと行^供よ^谷・高田・伊藤^角・^み黄山蘭を芦辺花壇へ植る

七日 ○刀番二人に園中見せ、茅屋にて逢ふ

九日 ○土物店伏見屋^{小間物}園中見する、連四五人^{内嬰}○八比建部後室尼公^{七十}・息女^{六十五}・侍婢十六七人・武士五六人園中見する

十日 四半頃米徳來る、八半前歸る、刀番に園中見する○清兵衛初入湊耽望の障に成松の枝を伐○八半前作衛門來る、大松孫兵衛・明珍宇衛門外ニ一人同道園中見する、（中略）○七過よりお隆同道蒲公を取、庵へ行、黄山蘭を堀、七半過歸る、榆子・海棠を芦辺へ植る、桜草を花壇へ移す

十三日 九過より他行、（中略）男坂より広小路植樹を見、（中略）○みよ父母來り園中見する○ほの客医者二人、五十嵐願ひにて呉服や三河屋定衛門・藤助・又兵衛・供三四人園中見する

十四日 ○和助客婦人・仲衛門嫂園中見する
十五日 ○夕蔵^{九幸}を折、古枝を取、楓樹を作る
十七日 ○たをに紅垂楓・紅卯木貰ふ○溝口客水戸侯家中武士二人園中見する、二児案内

二十日 ○園中桜の古枝を折、雨至

廿一日 ○夕園中古枝を折、太隠山頂の枯桜大株を伐

廿四日 ○鳥羽万之助客婦人四人・小児二人園中見する○萩原方へ女客二人来、園中見する(中略)米社より横瀬和哥連中来
二十六日園中貸度由、当坐題夏山家書付持参

廿七日 ○清兵衛太隠山の松樹をつくる○清兵衛妹背山の松をつくる

廿八日 清兵衛吹上辺の松をつくる

五月

朔日 ○白抄来、玉川の鮎貰ふ、園中見する

二日 俊父来る、園中見する○清兵衛吟花亭土堤へ差芽躑躅を移し植○八代母来る、園中見する

三日 ○豊田・落合・後藤休息の暇給はり来、六日啓行につき暇乞に來、逢ふ、園中見する○九半過より雑司谷参詣、(中略)原町より新屋敷裏角伊勢屋より裏門、奥口より六少前帰廬、飴・芍薬・夏菊をお隆へ遣ハす

四日 ○昼観音参詣、土筆山南へ清兵衛去年の差芽躑躅を植

七日 ○泉池水三分一

八日 ○昼観音参詣、躑躅を水分石へさす、(後略)

九日 和田世話町人三人園中見する○鴛鴦の峙を庭籠へ納る○今

日より清兵衛千里場の山裏手入れ○八時観音参詣、躑躅の芽を水分石へさす

十日 千葉世話町人二人園中見する○昼過観音参詣、躑躅の芽を水分石へさす○春迎ひの者来り園中見する○夕木枯山の松幹を伐
十一日 ○昼観音参詣、詠の珠数を白堂へ遣す、躑躅の芽を千里場山へさす○木枯山の松幹・桜樹を伐、清兵衛に造らせ、珠成へやへ行、珠成・峰同道にて帰る(後略)

十二日 ○今日より清兵衛蓮池側の草根を堀、芝を付る○昼観音参詣、躑躅を水分石へさす○和助世話にて婦人二人園中見する○七過園中松・桜の枯幹を伐

十三日 ○八比観音参詣、躑躅の芽を取、雨緋々、○雨中七過千里場へ躑躅・杜鵑花をさし、珠成へ屋へ行、(後略)

十五日 ○昼観音参詣、躑躅・杜鵑花の芽を千里場へさす○七過玄杏、二男良斎・筒井杏策同道園中見する○夕躑躅をさす○雛鶴三羽巢中に在、今日頭を出す

十六日 ○七過大雨中観音参詣、るん・万吉百度参、園中を廻り帰る(後略)

十七日 ○九半比観音参詣、躑躅・杜鵑花の芽を取、千里場へさす、金銀花もとる(中略)○清兵衛今日より水分石南芝を取手入
十八日 鴛鴦卵を産○昼御霊前参詣、園中つゝし・さつきの芽を千里場へさす、楓樹の大耳を取○和助世話渡辺理七父子園中見する(中略)妹背山杜鵑花の芽を取さす

十九日 根岸に菊花貰ふ○昼観音参詣、園中古枝を取、小松を作る○夕芦辺の松を造る

二十日 ○園中躑躅の芽を取、松を造る○躑躅の芽を千里場へさし、芦辺の松を造る○三申庵の樹を木俣刈詰

廿二日 ○昼観音参詣、躑躅・杜鵑花の芽を取、千里場へさす

廿三日 ○八前観音参詣、杜鵑花・躑躅の芽を千里場へさす

廿四日 滝妻の妹同道にて来、園中見する○昼過観音参詣、つゝし・杜鵑花の芽をさす○八半頃松悦妻、母を召連来る、園中見する○夕小松をつくり、珠成部屋へ行、暮時帰る（後略）

廿五日 新井に花菖蒲貰ふ○昼観音参詣、雨至、躑躅・杜鵑花の芽をさす○泉池八分の水○お隆金魚舟の水道の樋を清兵衛等伏せる

廿六日 ○八半過観音参詣、所々小松を作る○夜五過米伯初め帰る（中略）さし芽持帰る

廿七日 ○村井に嫩葎石台植貰ふ○夕吹上の小松を造る

廿八日 ○清兵衛井戸よりお隆庭へ水篋を造る（中略）夕老人峰の松を作る

廿九日 ○清兵衛、お隆路次前通芝をつくる

夕雨中珠成部屋へ行（中略）路次前の小松を造る

三十日 ○三申庵の樹を木俣作る○夕太隠山松山の小松を造る

閏五月

朔日 ○清兵衛路次外の梅・吹上の松を造る、観音参詣

三日 ○清兵衛芦辺の松を造る○上邸より楓樹こすへき由申来、時節あしき故九日より未遣へき由申つかわす○夕秋葉辺小松を造る

四日 九過観音参詣、妹背山の杜鵑花の芽を取○清兵衛水分石手入○夕秋葉辺の小松を作り、新墾田の花菖蒲を掘、芦辺へ植る

五日 ○妹背山杜鵑花の芽をとる○杜鵑花芽を夕千里場へさし、

蓮池・吟花亭辺の小松を造る

六日 ○八半頃たを来る、緋桐貰ふ○七前より水分石初入湊、芦辺の小松を造る

七日 尾沢に藤色仙翁花貰ふ○清兵衛蔓延の伝芝を取、水分石辺へ伝る○穴沢・木俣に庭の樹を造る○夕風山辺の小松を造り珠成部屋へ行、暮時帰る

八日 六本木より御書、拝領の桜樹御用の由、返書かき直に上る、（後略）○笠志庭の杜鵑花并庭石を求るにつき米伯・米魚・清兵衛召連夕かた見に行○三間東の小庭へ松崎・五十嵐竹垣を結ふ○
比叺泉池
八分の水

九日 ○芦辺の小松を造り、珠成部屋へ行、（後略）

十日 ○俊より洞津侯にて作らるゝ朝鮮葎の種貰ふ○夕妹背山の松を造る

十一日 ○根岸世話にて荒木与十郎家中東安蔵に園中見する○夕園中松を作り、珠成部屋へ行、同道にて滝へ路次より行、暮頃帰る（中略）

十五日 松悦に夏菊折花貰ふ○昼園中拓植^{（樋）}を作る○みよ叔父来り、園中見する

十六日 ○清兵衛庭籠の通樋を作りなをす、酒を与ふ

十八日 ○清兵衛吟花亭山へ伝芝付る

二十日 ○白山相撲取山分万五郎・和田原甚四郎・嶋川要助、井筒屋案内にて庭見物に来る○八過岩島世話にて越中屋太兵衛手代二人・乳母人・相撲取山鬘与三郎来、園中見する

廿一日 清兵衛今日より加賀境の伝芝を取る

廿四日 ○りせ養子佐助来り、園中見する

廿五日 明七半頃、起日光へ発駕見に行、(中略) 五半頃中町通湯嶋参詣、草花求め加賀脇森田屋へ行、(中略) ○湯島にて求し草花お隆へ遣ハす

廿六日 ○清兵衛名古屋の松を造る

廿七日 ○秋海棠をお隆に貰ふ○清兵衛大山辺松を造る○村井に木葬鉢うへ貰ふ

六月

三日 ○水を庭へ廻す故水汲二人へ甘糕・酒遣ハす

五日 ○清兵衛小君山手入○安元に園中見する○裁たる松の幹を先比より附の者へ不残遣し、今日松本等に遣ハす

九日 高田親族の由膳所家中より来○園中見する○八頃忠躬来る、やしやひしや石台植貰ふ、(中略)

十日 ○四五日前より大山の夏草を刈しむ、草間に雉子の巢有、雛四ツ有、一ツ生て在、草に囲め共心許なき故育方鳥屋へ間に遣ハす○伊藤鳥屋より来り雉子預るへき由申越す、しかし親鳥巢を替る物なれハ暫試へき由

十一日 ○秀より柚鉢植・団扇貰ふ

十四日 雛鶴成巢をたち水際に遊ぶ

十五日 ○帑藏の間に竹垣を此頃作る

十六日 雛鶴巢をたちし祝ひ赤飯を六本木・上邸初児輩へ配る

十八日 明七過起、七半より浅草参詣、(中略) 山下へ掛り広小路にて女郎花きり花買ハせ、(中略) 五半比帰廬、(後略)

十九日 ○五十嵐に橙石台うへ貰ふ○清兵衛表庭手入

二十日 ○清兵衛奥庭手入

廿五日 ○丹後屋新吉来る、絵奉書貰ふ、逢、園中見する

七月

五日 ○鞍岡妹園中見する

十一日 ○泉池一尺水増長

十六日 ○産田茂太夫息金吾園中見する

十七日 ○泉池溢漲涯をこす

十八日 ○妹背山の伝芝の上水九尺程乗り、所々涯を越す、退隠後の溢溢

十九日 ○八比お隆と園中へ出、泉池中島の半迄のる

二十日 ○泉池水増長、陸へあがる○馬龍僕菊手入に来る

廿一日 ○門前植木屋庄八妻穴沢方へ来り庄八中風せし由島鳶願来りし故、米堂へ手紙書遣ハす

廿三日 ○笠庭杜鵑花八本清兵衛に云付掘らせ、妹背山へ植る○和助願ひ、小笠原津八郎家中本郷元十郎に園中見する○やす来り、下女召連園中廻る○市右衛門来る、恵比須や九平次又こも眼九也屋屋せんへ

い屋宇野庄六屋同道園中見する○近藤云、米徳二人桜樹念珠ねた

りの由、即樹を新助へ渡し申付る○眼九等ハ辻案内にて園中廻り、市衛門ひとり菊壇の前に待居る故行て逢ふ、七半比連帰る故、市衛門も帰る

廿四日 ○茂兵衛に庭の夕顔貰ふ

廿五日 今朝如深秋之候、綿入を着る、泉池の水日々満溢、妹背山の下悉く水に成、塀外無陸塗、九比徒跣にて園中廻る、蓮池辺深処三里際迄つく、水分石水湛然

廿六日 ○茂兵衛に庭の夕顔貰ふ○清兵衛等妹背山涯水中の石を裸に成上くる

廿七日 ○泉池増長

廿八日 ○泉池水大に溢溢○昼妹背山水中を徒跣にて行、伝芝中の偃石背一寸計出、九半過也、八比水石を越○七過園中廻る、蓮池水ひさを越す、(中略)水分石水一面湛、塀外ひさのあたりを浸す、鳥滑り転ふ、妹背辺を歩み、るい門外にて転ふ、(中略)

八月

朔日 ○七過園中伝芝を刈、蓮池辺水中を徒跣にて渡り栗を拾ひ、御霊前并に観音参詣(中略)

三日 ○八前お隆と園中へ出、清兵衛古風松島の松樹を伐○尾沢に南天貰ふ

四日 ○井手の棟棠を桶へ植る

五日 岩島に番椒鉢置貰ふ○清兵衛梅林手入

六日 ○今日より清兵衛山裏躑躅代口を分植

七日 ○在転に園中見する○七過角帰る、立テ花目録貰ふ

八日 ○三井願にて撰津国屋宇兵衛園中見する、とせ母兄輩にも見する

九日 ○八橋燕子花を桶へ植る○九年母・橙・きん柑鉢植を清兵衛菊壇の側へ植る○清兵衛つゝし差樹を吟花亭山麓へ植る

十日 ○清兵衛今日より千里場上山裏手入

十一日 ○先頃米社へ遣ハせし湖月抄、一卷残り在し故遣ハす、八橋かきつはたも根を分遣ハす○唐橘の石台腐る故、清兵衛余の石台へ植かゆる

十四日 ○五十嵐、三申庵庭へ菊壇作る○清兵衛菊植るゆへ酒与ふ、お隆新邸庭へも菊壇作る

十七日 ○村井菊手入

廿二日 馬龍昨夜止宿、今日も菊手入

廿四日 ○泉池水一尺減す

九月

二日 ○観音尊前へ何佐菊花を供す

六日 ○奥菊壇の覆造る

七日 尾沢菊花を持仏へ供す

十二日 ○此頃菊花半ハ咲揃

十七日 ○和田某今度山寺方へ引こすにつき、庭の梨子・桃樹を取寄る、柿はお隆庭へ植る

十八日 ○白山下万屋伊衛門家内婦人五六人園中見する○船津栗苗を植替る○清兵衛今日より路次外の霧嶋を古風松辺へ移し植る

十九日 ○九半過よりお隆同道願解に行、(中略)動坂植樹や治左衛門方へ行、待合する、下女椽へ花こさ敷請す、無程お隆、穴

沢・長尾・谷・村尾・真・辻・いさ・万吉・りき・りを・甚三郎・岩島・捨衛門・舟津・清寿・根岸召連来り同道、植樹屋宇平次菊を見る、侍婦二三人菊を見る様子(中略)

廿二日 ○昼お隆と園中廻る、舟津栗苗を千里場へ植る○清兵衛庭の自然薯預を掘る○根岸に庭の菊花貰ふ

廿三日 四半時よりお隆同道浅草へ願解に行、(中略)雨降出る

故悠介傘を持来る、動坂植樹屋椽にて待、(中略)

廿四日 ○和介に藤棚辺へ桃植さする○七つよりお隆同道西郊閑

歩、(中略) 暫屋の菊を見、銀八路次より入菊を見、(中略) 坂下
中里村植樹屋へ入休み、

廿五日 ○馬龍に逢ふ、旧年実生にて天津星と号し、菊真俳の花
先に黄色の星有、千本一本の珍花の由云ふ○九過より湯島参詣(中
略) 追分より本郷五丁メ込通樋掘る所五六箇所、植樹を見、(中略)
又植樹を見廻り小菊少求め、(中略) ○市衛門来る、杜若出す由
にて菊造花摺物自筆服紗をつけたるを貰ふ○市衛門并二僕に園中
見する

廿六日 ○清兵衛零嶋を植畢り、北塀外の樹を植直す○山下装師
の由、風間藤藏・久津間源衛門・家城屋久衛門・根岸忠左衛門・
都丸幸八園中見する、尾沢取次

廿八日 笠志来り園中見する○狩野家内・高滝祖母・喜多八・坐
光寺縁来、園中見する、りせ息佐助も来る○薪屋銀八家内縁来
数人園中見物に来る 婦人九人銀八兄真言法師舅下男等、惣而廿人計

御庭の菊を拝し待りけるに思ハす仙境へ至りし心地して

沙門恵岳

世の外の天地ありと菊の花匂ふ境に秋は来にけり

返し 恵岳院帰りし故追つきてつかハす

のかれ来てすさめぬ宿も時とてや菊に訪ハるゝかくれ家の秋
○七頃松悦同道にて、鶏声窪与力近藤円次郎・同伝之丞・同七藏・
大出仁左衛門・鷹理野衛門・僕三四人園中見する○七半頃観音参
詣、(中略) 帰掛滝長屋へ立寄菊を見る

廿九日 清兵衛つはきを北路次外へ移し植る○鞍岡妻の兄来、園
中見する○八過亘之助・又八・三平・熊五郎園中見する○巢鴨美

濃屋より三人園中見物に来る、(中略)

三十日 鷹野理衛門より菊花貰ふ、松悦持参

十月

朔日 ○清兵衛三申庵北庭植替

二日 ○久城右内来、園中見する

三日 九半より浅草参詣、(中略) 三枚橋にて樹木をみ、穴沢を
残し小菊かハせ、蓬萊屋に挿花会在、(中略) ○留守に馬龍案内
にて、中谷後家其外数人園中見物に来る^{予植樹屋に休みし内後家駕に}
^{悠介見}由^{馬龍つきて動坂を下りしを}○野崎半藏園中見する○留守に清兵衛世話にて、前町の町
人一人・婦人五人園中見する○留守に伴蔵来り、園中見する

四日 ○植樹屋庄助に山茶花鉢植貰ふ、お隆蘿葡貰ふ

五日 ○高滝喜多八来、園中見する○九半よりお隆同道雑司谷参
詣、(中略) 天気晴尽雲水の如し、紅葉愛すへし、(中略) ○留守
に米徳より庭前の菊花に短冊付貰ふ

咲出し庭の籬のきくの華たより折得し色香とハ見よ 保明

返し

都辺ハいつとて秋の暮さらん霜枯しらぬ菊の色々

留守に点者阿沢・阿部家中蘭叶・司百園中見する

やことなき御庭を拝して 阿沢

残菊の御庭恐れぬ胡蝶かな

六日 馬龍より菊花数種貰ふ○菊や手代二人園中見する

七日 ○留守に不言来、園中見する、猿屋伊八・又市・白山竹町
井筒屋長三郎同道六人園中見する○馬龍に菊花貰ふ、お隆も貰
ひ、六本木へ上る

八日 ○悦同道、牧方家中佐野七左衛門・館野新蔵妻の弟河毛・松宅従弟松伯、園中見する

九日 ○和助客婦人二人園中見する○岩嶋に早咲梅貰ふ○大番衆飯田十右衛門・同大三郎・西尾半左衛門・同亀五郎・伏屋和吉・水戸侯家中斎田三左衛門・右奥方三人・下女二人・供三人、たを同道園中見する、(後略)

十日 ○仲衛門願ひ、岩槻の百姓藤助園中見する

十二日 ○今日より清兵衛水分石南山手入

十四日 ○九時より雑司谷参詣、(中略)御嶽角の寺の立花を見、(中略)○暮過弓帰る、山茶花鉢植貰ふ、

十五日 ○高野清左衛門、医師幸伯同道にて来り、八半比園中見する

十八日 ○七半過市来る、作衛門同道にて来る由、蕎麦并目録貰ふ、千哥・三之丞も来る、作衛門并婢女・客一人町人一人、園中見する○下山姫の兄林忠助松平左京臣・南藤之進内藤備後・橋本文

左衛門伊達和泉○同上園中見する、酒肴遣ハす

二十日 ○今日馬龍より菊の根掘り来る

廿五日 ○七過六義園絵図に合せ、所々の名を札にかき印を建、(中略)

廿八日 ○昨日より中村・松崎、お隆庭竹垣を造る

十一月

二日 ○舟津に水仙鉢植貰ふ

四日 ○清兵衛水分石手入出来、桑樹を掘る

五日 早朝ほの等参詣、五半比帰る、鉢植白梅貰ふ、観音へ切花

上る今日
開帳

六日 ○清兵衛今日より妹背山麓手入

九日 四日市役人吉田左衛門来り、園中見する

十二日 ○泉池水涸尽三分一満

十八日 九過よりお隆同道浅草参詣、(中略)谷中上にて紅梅鉢植を求め、首振坂上、坂のうへにて谷五葉松を拾ふ、根有、奥口より六半頃帰る

十九日 昨日拾ひし五葉の松を庭へ植る○昨今清兵衛妹背山橋の栗を伐、此比妹背山麓地形を筑、土橋を切割

廿二日 ○月桂寺使僧来り、鎌倉より帰府につき梅干・水仙花貰ふ、お隆も貰ふ

廿四日 ○清兵衛今日より橋普請にかゝる○今日より園中名所碑石所々建る

廿五日 ○九つ過より珠成同道湯島参詣、(中略)植木を見、西門より出、(後略)

三十日 ○清兵衛今日より橋を掛る

十二月

三日 ○多福寺此程来りし時、園中を見待りて、今日新井迄和哥を贈る(後略)

四日 ○村井・雄島・溝口・萩原・野田・狩野・山本に紅梅二鉢貰ふ

九日 ○鳥初中村へ行し者共に梅鉢うへ貰ふ

十二日 ○穴沢に唐橘鉢植貰ふ○梅鉢植求む、谷にも貰ふ○鉢植梅二株園中に植る

十五日 ○六本木より唐豆腐・絞沙梅・浅漬給ふ、(中略) ○成慶院来る、榧子・さらさ梅貰ふ、お隆も榧子貰ふ、(中略) ○藤に福寿草貰ふ

十七日 ○根岸に松福寿草鉢植貰ふ、お隆紅梅・松鉢植貰ふ

二十日 ○清兵衛庭普請今日迄にて、春迄あかる

廿五日 ○六本木より紅梅鉢植・蝦・陶酒給ふ、(後略)

廿六日 尾沢に梅鉢植貰ふ○米叔へ両節摺物遣ハす、明日此方へ藤植来につき、米叔も来る由○お隆より藤植事にてお永へ文遣し、返事に愈明日来るよし申来る

廿七日 ○石台の唐橘折れたる故、二十株取寄、鉢へ植る○七半

過藤植・和尾都同道来る、(後略)

廿八日 ○清兵衛に玉垣梅鉢植貰ふ

廿九日 熊に紅梅鉢植貰ふ○珠成に福寿草鉢植貰ふ

第三節 奇品園芸の世界

88 ただ愛樹家の徒然を慰むのみ 水野忠敬の教え

『草木錦葉集』巻之一

水野忠敬 著

文政十二年(一八二九)

図版 30

此草紙ハ水の翁の覚書にして、写生ハ雲峰・雲停二先生の筆也、載

る処ハ、鉢植の濫觴、草木の字、出所の通言、春夏の芽出し、四季の斑色、葉形を見定たる形状、見合にすべき品、花形、鉢植造り方、土の善悪、植替時節、養ひ手入、四季の持方心得、諸木接木、木竹草の挿芽、厭条、根分、草木実蒔、草木の虫を遮る伝、人夫を懸ず原地開発して用木植付、都て実を結品作り方、諸木描木槓、竹作り方、家作并土蔵水地形、非常用心貯水等の伝をしるす

(中略)

或ひと、種樹の業は、病を愈す妙薬なりと語をきし、予、武芸のいとまハ、種樹にこゝろを慰めければ、行程なく健ニ成、余年を樂む身となりける悦ハしさに、年頃書集めし奇木珍草、春の芽出し夏秋の斑色等を、画工の手をかりて技葉の形状、紋脈の旣密委く写生し、また培養に用ゆる土の善悪、及び接木、さしきの法、移植の時候まで、心を用ひて試し事とも著て、種樹のうゐまなひに示んと、予か不学をも顧す書記したれば、言葉の鄙俗、語路の前後ハいふもさら也、世に有用の書にもあらず、また医家物産の助ともならず、たゞ愛樹家の徒然を慰むのミなれば、さのミ名物の考証にも及はす、たゞ棟にみち牛に汗する反古を、いたつらに蠹魚の栖となさむもほいなくおもふものから、斑色の種類多きを旨とし、錦葉集と名つけ爰に上木してわらひくさのたねを蒔ことゝはなりぬ

文政十丁亥年三月十八日

水のげんちゆうきやう撰

89 枝葉の異、斑文の奇、変態百出、争ひて其奇種を獲んとす

『草木奇品家雅見』巻之上
繁亭金太撰輯
文政十年（一八一七）
図版48

世に養樹の術を得たる者、数ふるに勝ふ可からず。而して方今水野翁、亦其妙を全うせり。余、書画を好み、且つ山水の癖有り。旁々翁に問ふに樹芸を以てす。時に金太なる者有り。種樹を業とし、巧に仮山水を作る。且つ草木の奇品を愛し、性頗る雅志有り。乃ち産業の余力、書三編を勸して、名づけて草木奇品鏡と曰ふ。屢々来りて、図を余に請ふなり。乃ち二三の門生と写して以て之に与ふ。他の名画家、亦之に与かる。蓋し草木の名状、載せて本草及び諸書に在り。然り而して近世枝葉の異、斑文の奇、変態百出、枚挙に遑あらず、是れ皆古人の未だ嘗て知らざる所にして、今の種樹家の競ひて之を弁じ、争ひて将に其奇種を獲んとす。既にして奇種を獲れば、則ち諸翁に訪ふ也。是種樹に於けるや、世邈に、国異ると雖も、其妙に至りては、則ち真に橐駝の右に出づ、然りと雖も、遠境の人、其奇品異種を獲る毎に、翁に就きて問ふ能はず。今、是書を繙閱すれば、則ち其草、某圃に出で、其木某園に生じ、其声価區別、坐して知る可し。是れ金太の三編を葺る所以の一大關鍵なり。

文政丁亥秋初

原典は漢文、訓読は『草木奇品家雅見解説』（青々堂出版）による

90 『草木奇品家雅見』凡例

『草木奇品家雅見』巻之上
繁亭金太撰輯
文政十年（一八一七）
図版48

凡例

一、此書ハ草木の珍品奇種を嗜好のミにあらず、養生憂散の術なることをさとし、遠国他郷までかゝる珍品あるをしらせ、弄玩の樂事なることをしるす、今著す処の好人愛樹、譬バ一草木と称するハその人々の持伝へ給ふ樹に、枝よりへんじ、或ハ実生よりかはりて世に類ひまれなるをさしていちぼくと唱ふる也、又他より求め伝へたり共、他に類なきをその家にのミ接木さしめてふやし育つるものにも、某出など樹主持人の風名苗字など呼ハ奇品家の常なり。

一、世に珍らしき草木といへともその枝その葉ぎりにして歳々その性を失へるもの、又ハ老年草ハ之を除之。宿根する草ハこれをのす。

一、水の翁曰巻中略伝文法、諸侯ハ某侯、某府君またハ某子某氏などそれ〴〵に甲乙の書法ありなん。猶農工商の輩ハ俗称を以てすべきを、我もと人に見する心なき帳中漫録を其まゝあづさのせたれば、貴人も別に敬を加へず、賤人もみだりにいやしめず、これに近く譬をとらハ園中大裏梅、御所かうじ、大名おもと、正慶つばき、米華ひよんの木などもみな一様の詠めとして一同

ニ唱ふるの同例と見ゆる給へかしと云とのたまふの意に任せたり、たま／＼さもあらざるハ校合の行届ざる処なり。

(中略)

一、諸家略伝小伝ハ種樹奇品に志深き人々、この道に立さはることのミいさゝかのするものにして、古人ハ水野翁の反古を乞得たるを其まゝ上木したれば、今人といへとも、これにならふものから文に和漢のさべつなく雅俗を不可改、識者の為にせず。たゞ童蒙にもし易きを專一とす。ゆへに左右にかなを用ひて、児女にもさとしやすからんことを要とす。

一、諸家とも珍品奇種多く持伝へ給ふも少からずといへも、一家にて三品五品を限、その余ハ傍へそのよしを断るのミにしてこゝにのせず。

一、草木をひさくものをさして巻中略伝などには漢名のみしにて種樹家、芸家、花戸などしるしたり。世に所謂花屋、植木屋也。則その家々より珍品奇種数多たるも少からねど、種樹家ニハ一家一品充と定め住所俗称共正写の例に出したり、譬バ種樹に長じ此道を広く業とする家にも奇品の伝らざるものハこゝにもらず。但東都にて植木屋を花屋と唱ふるは染井にかぎり。

一、此巻へハ御府内近郷の好人のみのせたりといへとも、其家々の珍品をあらハすことをいミ給ふも、或ハ伝へ給ふも不知してこゝにもらず類あげてかぞふべからず。殊ニ遠国他郷は名品奇種ありといへとも爰にのせず。かゝる類後篇発兌の時をまち給ふことを希ふのミ。

一、凡て巻中にあらハす所の草木は奇品家の通称をあらハしたれ

ハ、よりどころもなき作り名あり、或ハうらうへのたがひ少なかるまし。されバ覚束なくも巻のはじめに漢名をあらはしたれど、そのあやまち多かるべし。こひねがはくハ笑覧の諸君子たゞし給らんことを。

附録 水の翁愛る所の草木奇品百余種、部類をわかち、写生して形状を記す。又盆栽つちかひやしないの大意を、初心の好人へさす。

91 写真と見える迹は幾度も写しあらため作る図鑑

○附言

多年予が筆記せし植木品類の形状并養ひかたの草稿を撰み、さいつ頃上木の企に付、図画の力を助んとて忍原の弥七、同所音吉ともに画工に命し二百八十余品の写生を稿せしめしが、其後ハ殊更渡世にいとまなく兎角するうち、予が書かせし写生も凡二千余品におよびければ、合せて三千に近きを模図せしめ、それ／＼の形状をそへて全部十三冊の草紙となしたるを元召遣ひし留蔵しいて望故与へたり。

草木の和名、方言、漢名とも予が覚しまゝに書記し、なをもさいつ頃桂川氏に正しを乞しが、予も又、老の年波やゝ流れ其事に懶

『草木錦葉集』巻之一
水野忠暁著
文政十二年(一八二九)
図版30

く、且此書の上木に心せかれ、和漢名分の糺しも麓漏なれば見る人
心して其誤をゆるすべし。

(中略)

大岡雲峰ハ名画にして植木の事にも委しきまゝ写生を乞しが、数
多の品類一筆に成りかた、椰、檳、藪柑子の三品のみを模図し、
其余ハ皆門人雲停の写生にて全備せり。此雲停ハ密画の名人、もつ
とも草木写生に妙手の誉れあり。されども写生の事ハさのみ筆意画
法にかゝはらず、唯真に似を以て妙とすれども、もしや枝葉紋脈の
形容精密ならざる所もあらんかとおもふ儘、生物を取寄是を几案に
置いて似ざる所あればこれぞ写真と見ゆる迄ハ幾度も写しあらため、
その中に筆力妙所に至りたるを撰みし図画なれば、他の図画と一
般に見る事なかれ。

92 当世の奇枝霊葉を集めてひと巻となす

『草木奇品家雅見』巻之上

繁亭金太撰輯

文政十年(一八二七)

図版48

自序

鳥か鳴、吾孀の大江戸ハ、天の下の人つどひて、咲花の匂ふがこと
くさかえ行き、年の名を寛永といひし始つかたに、奇草珍樹を
もてあそぶ人、いさゝむら竹いさゝかはありつれど、五藻の花の五
人むたりに過ぎりけらし。今は此こと月々に盛に、日々に新にして、

ふじの嶺の高き賤きをいはず、風の音の遠き近きをわかつたずもては
やし、めてむつむこととなりて、賤環いやしきおのれ等がなりはひ
とさへなりて、若葉さす妻子を養ふたづきとなれるなん、いとあり
がたき御代にはありける。先つ年染井の何某衛伊兵地錦鈔を著して、
世にもてはやされしことハ、人のしる所なり。こは培養にくハしく、
植木のことにいさをあれども、草木の花をものはらとしたれば、種々
の異なる品をもらしたり。奇き枝、霊しき葉、いま広くもてはやせ
ども、其図かけるものも、其こといへる書も世にきこえぬハ、いと
口をしきことに愁ひつれど、おのれごときつたなき身の及ぶべき事
にハあらじと思ひとゞまりつるを、幸ひに水野翁の反故を乞得て、
家業の友なる染井の何某源治がちからをかりて、春雨のいとまゝ、
秋の夜の長き年月を経て、かしこにとひとにはかりて庭の籬のか
きあつめ、言の葉のたらざるを画のくハしきたすけ、絵の色どらぬ
を筆のちからに綾なして、このひと巻となし奇品家雅見と題号て、
此道好ミ給へる君達のつれづれの慰めに、備ふることとはなりぬ

金太識

93 松葉蘭好尚の士頗る多く、伝真の術を借り縮写して出版する

『松葉蘭譜』

長生舎主人(栗原信充)著

天保七年(一八三六)

関連図版31

松葉蘭、一名は長者蘭、又の名は帚蘭、其初め断崖絶壁の下に生じ、

若し將に世塵を嘉遯せんとすれば、橐駝一過し其異常を相し、盆栽培養、花卉諸草と伍を為すに及んで、之を固有するが若く然り、能く天に従ひ、繁植滋茂し、然も且つ能く其野の旧を變じ、新を現し奇を呈し、麟の如く鳳の如く、龜の如く龍の如く、獅の如く鶴の如し、光彩は錦に似、溫潤玉の如く、奇姿瑰偉、千種万態、誰か瑣々たる小艸にして天秘を卷舒すること、夫是の如く能く自由なることを識らん哉、楮鞭の家、或は以為く徐葆光が録する所竹蘭なり、或は以為く蘇頌所謂地柏なり、或云く、竹蘭は万寿竹にして、松葉蘭と殊異也、衆喧囂々とし、未だ其云等物たることを認め得ざる也、然も中山に之を松蘭と称する者は、近明証を得て定て中山の松蘭は、即ち我が松葉蘭なりと為し、姑為に五徳を立つ、曰く太極の一幹、兩儀の枝を分ち、兩儀の枝、四序の枝を析き、動靜の数を弁じ、相成の理を顯はすこと著策より著明なり、松葉蘭は、夫れ陰陽造化の源に通ずる者か一徳也、蒼の映ずべく香の触るべく無く、盛無く衰無く、道を知る者に幾し二徳也、青緑壁の如く、四時変らず三徳也、萌芽抽軋、枝柯蓐布、蒔播を須ひず四徳也、灌漱鋤芸、多く人を勞せず五徳也、未だ佗草の斯の如く五徳を具する者を覩ざる也、然ば則ち松葉蘭は、何の玩物を以て之を廢擲せん乎、当に博物を以て之を尚論すべし、好尚之士、頗る多くして其種未だ其求に供するに足らず、是に於いて伝真之術を借り、以て縮写し、且剖剝に附し、同志に普及し、亦造化の靈妙を扇揚し、以て昇平の瑞禎を賛善し、敢て時行を追逐することを為さざる也、天保万年第七龍舍丙申夏六月初吉松蔭外史荅野谷の静処に書す印

94 松葉蘭年々に清品奇草を生じ、殆百有余種に及ぶ

『松葉蘭譜』

長生舎主人(栗原信充)著

天保七年(一八三六)

関連図版31

昔人牡丹を愛するや、紫陽三月記あり、百両金を弄すれば、品類考いつ、紅葉の百錦集、牽牛の朝顔叢皆是物を貴重すること、太甚しく、これを閑窓淨机の下に、独楽んよりは、千里同好の士と広く楽にしかず、今人松葉蘭を愛すること、日々月々に盛に培養、橐駝か術を尽せしかハ、年々に清品奇草を生じ、殆百有余種に及ぶ、其好士東西懸隔、また百余里にいたる、一瓶の往来も、容易ならず、いかに知許多の奇品をして、一瞬の内に聚べけんや、是松葉蘭譜の作らざることを得ざる所以なり、敢て蠶を、牡丹百両金に習ふにあらめ、嗚呼松葉蘭は、翠幹淨く拙て、黄金の玉繁く綴り、枝に常盤の色深く、根に繁昌の芽多し、実に雨風時順ひ、四海浪静かなる、太平の瑞草と、称すべく、更に従上流行に媚し、草木と日を同しくして、云へき物にあらぬよしハ、予か言葉をまたて、皆人のしる処なりと、云尔

天保七年丙申水無月 長生舎主人謹書

95 江戸にて松葉蘭を玩ぶこと流行りたり

「柳庵随筆余編」
柳庵（栗原信允）著
万延元年（一八六〇）
関連図版31

○今より三十余年前、江戸にて松葉蘭を翫ぶこと流行たり。此草、人の翫弄に連て、種々の変出来しが、多くは大坂及び紀州の種芸家の丹誠に出づるに、雲龍獅子と富士雪東麒麟等兩三種は、江戸にて変りしもの也。因て江戸の種芸家は、此二三品を上方の上坂〔割註〕又玉光とも云。』の上に立んことを思ふ。上方の種芸家江戸に來り、雲龍獅子を残りなく購求んと云。其価十株にて三千兩なり。雲龍の主且喜び且驚き、金と引替に雲龍獅子を渡さんとす。上方の種芸家根を改めんとて土を除き精視ば、根生二本四分余白々と出たり。売主是は約束の外なり、一本残し玉へ。其代として五百兩進ずべしと云。買主云く、いや是は某が幸福なり。然りと云ども、此代七百兩を進らせん。江戸に根を残すことは思も寄ずと云。此争、双方言募、遂に破談となりたり。然れども當時世上の富貴の態を知に足ば此に記す。〔割註〕此一章、予正しく取扱ひしことなれば、更に謬りなし。」

○松葉蘭に次て、鷗蘭、ビロド蘭の二種を江戸にて賞翫す。初は纔に五六種なりしが、後には七十余種に及べり。中に就てビロド蘭は、安房国清澄の妙見山に自然生ある由なれば、遙々と思立、上総国小田喜より松野、植野、台宿、市坂を経て内浦、小湊に至り

清澄に登りしに、折しも妙見堂普請成就して、山上へ登ることを許す。因て予も登山して、心のゆく限り取返し培養しかば、霜降斑、覆輪斑の二種を出したり。此序に房州富山に上り、カモメ蘭を千余株取來りつる中に、中斑爪斑などもあり。又鹿野山にて黄カモメ蘭を得たり。其後上京の路次、美濃国大湫にてビロド蘭一種を覓得たり。今所謂鷗蘭斑なり。然るに何頃となく、是等の玩物世に棄られ、今程は其始末を知人さへ少くなりたり。

96 盆種の松葉蘭・万年青・南天燭の流行

『増訂武江年表』
斎藤月岑他著
文政年間（一八一八〜三〇）記事
関連図版31・32・41

○盆種の松葉蘭・万年青行はれ、数金を以て売買す、又南天燭の異品を弄ぶ工なり、又南天燭の異品をも造り始む

97 小万年青の聚会、凡九十余种陳列し、その観尤も麗美とす

『甲子夜話』続篇八
松浦静山著
文政四〜天保十二年（一八二二〜四二）
関連図版33〜38

「一」時々流行するは、先年千両金〔灌木の一名〕、世高価を争ひ誇り、その弊甚く、遂に官より停禁の令下れり。其後牽牛花なり

しが、今は是も跡形なく、又近頃は小^コ万^オ年^モ青^ト頻りに行はる。予は世外の身ゆゑ、知ずして有りしが、この「壬辰」九月十五日か、御倉前八幡の辺を過ぎ行しに、鳥居に貼紙して、今日小^コ万^オ年^モの聚會と題す。因て人にそのことを聞くに、いよ／＼十五日六日此事ありと。其体、彼の別当の坐鋪に、折廻はして五間と四間余の三層棚を構へ、凡九十余種の小万^オ年^モを陳ね置き、人をして見せしむ。其観、尤麗美とす。又悉くその形状を図写せし小本を版行す。人購じ来て予に示す。

（摸図略。この摸図は水野忠暁が江戸蔵前八幡宮で主催した小万^オ年^モ青^トの持寄展示会で出品した小万^オ年^モ青^トの図（図版33、38）と共通する。図版33、38は、忠暁が関根雲亭に描かせ板行したもので、「甲子夜話」中の摸図はそれを原図として、鉢を省いて描いたもの。）

鳴戸 千だがや 宗碩

七ふく神 すがも御駕町 赤井

原図、植る所の鉢及台、其飾装を絵かく。茲に万年に与からず。因て是を省く。下同じ。

龍の玉 するが 岩ふちの産

福祿寿 一名手直り 赤坂 花園吉

蒼鷹の爪 権田原 金太郎

くれ竹 一名笹かに 遠山

羽子のこ 酒寄

たてゑぼし 大くぼ新田 金二

獅子かしら 大くぼ 虎右衛門

舞つる 実花葉

長生殿 菊谷

喜代竹 小田

ぬれがらす 大ばん町 水金兵衛

舞じゝ 皆加和

鼠ざん 水の

真の鷹の爪 酒依

大鷹の爪 一名天太鷹 大坂天満 太兵衛

天国 一名絹前 阿波の産

常盤鶴 鶴田

筑羽根 一名肥後 おし原 弥七

御国自慢 大橋

みの亀 摂州池田在多田彦四郎より出 水の

波花しゆす 一名江戸禿 東かゞみとも 元京三条

こづち 井平所持 幸橋 官次

ゑんひ 佐橋

喜見城 番衆町 水伊助

大象感 元水の所持 成世

波花土産 大番町 水留蔵

元大坂なんばが池植庄より出る 四ッや

滝川

老松 金森

鷹のはし 元水の所持 皆川

鳳尾 浅草 釜屋彦七

はやぶさ 千だがや 仙之助

楸形 柳 藤田

勇獅子	赤坂 金助	八ッ橋	麻布桜田 ひしや
孔じやく丸	三河嶋角 吉兵衛	宝づくし	鈴勇
宝ぶね	永代 勘兵衛	登り龍	杉本
東じゆす	篠山	黒龍	伊久
虎ひげ	新やしき 伝蔵	品定	上田
東ふく輪	西川	金冠	しん吉はら 丸長
柳川	池じり 平五郎	不老門	四ッ谷大はん町 与十郎
新家獅子	すがも 弥三郎	雲龍	かうじ町 平川
長者丸ば	青山 平蔵	蓬萊亀	深川新地 寿朴
虎の尾	大番町 吉蔵	笑布袋	一名くゝり頭巾 桜雪
熊たか	権太原 佐兵衛	しばらく	元大くぼ孫太品ゆづり請 高田 音吉
しやちほこ	大くぼ 豊次郎	末広	本多
きりん丸	浅草花川戸 米金	鳳凰丸	千駄ヶ谷 安五郎
翁わたし	一名三番叟 千駄木 善蔵音	仁王立	白山 小野七
千人力	すがも 松崎	富士越龍	香取
笑獅子	四ッ谷新宿入口 八右衛門	ふりわけ髪	永井
唐獅子	浅ゐ	松竹梅	寛
金のざい	福沢	新鷹の爪	一名せい虎 以賀波駄
富士川	田中	折鶴	一名鶴の一せい 鶴田
七賢人	一名九十九髪 白山御殿 松次郎	若竹	下谷 鈴金
力くらべ	四ッや新町 正春	たつ頭	山仲
揚団扇	一名初舞台 戸塚	猩々舞	栢樹園
蓬萊山	すがも 矢場次	琴の糸	一名留蔵真の琴爪 芝山 松窓
姫獅子	小原	金剛山	赤坂 鈴勝

真の肥後 竹内

玉獅子 千だ木 べつ甲半

笹鶴 永代 福山

養老 鈴仲

駿河土産 一名竹にすゑめ 下谷 吉田

肥後丸葉 すがも 長太郎

十文字 新やしき 吉兵衛

夏の富士 山本

玉すだれ 近藤

斯の如きもの折々流行すること、其本を云はゞ、人事のみにも非ずして、天なるべし。予嘗て聞く。戦国には人の生るゝ、女少ふして男多しと。是れ自然の理也。(中略)其理万古不易にして、今昇平の世、この如き不用物の流行するも、亦天事と云て可也。

98 斑入り風蘭・小万年青、尾上菊五郎自慢の奇品たち

『梅幸改名発句集』

尾上菊五郎 他作

弘化三年(一八四二)

元祖菊五郎梅幸は亡父か師なりけれハ、やつかれ栄三郎より旧名を嗣て男ハ菊、女は梅とわかち勤しか、功も成さす名も遂すして既に還暦の齢ひも越たれハ、今とし猶子に女名遣りて段々と名をゆつり葉の春なく御引立をねかひ奉り、只〳〵老楽の心を安うせん事を思ふのみ

(十句略)

五柳先生ハ菊柳を愛し此君なくてはと竹をめてしも、人々の好む所品あり、やつかれ草に木に弄ふ事年あり、そか中殊に秀たるには玉獅子、麒麟角、又かうはしきハ斑入り風蘭の日本一草に付狂ひ獅子も双頭立の斑入り小万年青は梅寿艸と号けて、此五ツのものはいつれも奇草にして流行不流行にかゝハらす尊きをいやしうせん事、この末もあらしと去好事家もしめされしとなむ

艸に木に撫て

育つや春の風

梅寿

橘中に其倉を囲ミ米粒に

飲中八仙はあれとも

印籠の中に松竹梅の花咲せ初しハ

三十とせあまり也、こはミヤコ難波もて

知る事そかし、只〳〵

朝に夕に丹誠の

おろそかならぬも諺にいふ

下手の横好とわらひたまふな

松竹の齢に

ならえ梅の花

梅寿印

朝桜楼写

99 尾上菊五郎の改名披露発句集の刊行の許可申請

「市中取締類集」書物錦絵之部

弘化三年（一八四二）

弘化三年四月

歌舞妓役者菊五郎并弟子共改名之摺物彫刻之儀伺

「猿若町老町目名主共差出候書付

館市右衛門

今般歌舞妓役者菊五郎并弟子共改名致候ニ付、別紙摺物彫刻致度旨申立候間、得と取調候処、右は売々は勿論、外々江相配り候儀ニは無御座、御当地井上方表同家業之者ニ限相配り度段申立候、併右絵柄似顔とは相見江不申候得共、歌舞妓狂言様之絵柄ニ付、其段利解申聞候得共、何卒一応相伺呉様強而申立候間、不得止事右之趣申上候、右絵柄は為相除、句集而已ニ相直候様為仕候ハ、如何可有御座哉、奉恐入候得共、別紙草稿相添、此段奉伺候、以上、

午四月

猿若町老町目

名主 弥兵衛

同 源太郎

口上伺

館市右衛門

別紙歌舞妓役者共改名ニ付摺物帳彫刻仕、尤売々は勿論、外々江相配候儀ニハ無之、御当地井上方表同家業之者ニ限り差遣度段、猿若町老町目名主共方江申立候旨、右草稿を以名主共伺出候間、勘弁仕候間、口絵は狂言絵ニ紛敷、鉢植類は好事に付、都而絵類差除発句取集彫刻仕、同家業之者ニ限り取遣仕候儀は、敢而不苦間敷候哉、乍去、廉立伺之上御下知可有之品ニは御座有間敷、絵草紙懸名主共手限改ニ致し、絵入無之句集計同家業之者江相配り候程は、掛り名主共評議次第可仕旨、申含候様可仕候哉、則草稿并猿若町名主共差出し候書付相添、此段無急度奉伺候、以上

午四月

館市右衛門

午五月朔日、忠太夫を以上ル

書面摺物彫刻之儀、館市右衛門伺之通被仰渡、可然哉奉存候、
午四月 市中取締懸り

100 今年より朝顔の異品を翫ぶこと行われる

『増訂武江年表』

斎藤月岑他著

文化十二年（一八一五）記事
関連図版20・45〜47

○文化十二年 乙亥

（中略）○今年より肇り、朝顔の異品を玩ぶ事行、文政の始迄都下の貴賤、園に栽へ盆に移して筵会を設く、やしなへば午の貝ふく頃ひさしき遠桜山人までも牛ひく花のさかり

筠庭云、下谷和泉橋通御徒町に、大番与力にて谷七左衛門と云人あり、其老母草花を好みよく種作れり、是に依て七左衛門も其法を伝ふ、茶事を好みければ、前栽など掃除して、人もとひ来て見るものも有けり、桜草は享和の頃まで作り、あまたの種類を分ち、浅き箱を多く重ねたる重毎に、かんてんをとき流し格子を入れ、其中に一花づゝつみてかんてんに挿して、望みに随ひて借しつかはして見せしむ、夫より朝貌の奇品を作り、此度は六枚折の葭屏風に、細き竹に節毎によきほど間を置き、口を切水をつぎ、これに花一つに葉一ひらづゝ添へて挿したるを、葭屏風に掛けならべたるは、いと涼しくきよらなり、屏風はたゝみていづくへも持行るゝなり、文化五六年の頃の事なりき、其後大坂に在番したる時、多く牽牛子を彼地へ送たり、抑これ流行の始めなり、(後略)

101

朝顔、人力を尽すときは新出の奇品際限なし

「朝顔名花集」
群芳園主人撰
文化十四年(一八一七)
関連図版20・45〜47

夫牽牛花黑白二丑より今数千品となれり、変化妙用ハ天造自然たりといへとも、人力を尽すときは新出の奇品際限なし、既に当年変生のもの三百余品、其内凡百品を撰ミ、当時流行の趣に応し略次を設く、然とも人々の好によつて愛する花異なれハ進退ハ各々の意に任

すへしと云々

102 朝顔の種々の花を屏風に仕立てる

「ぎゝのまにく」
喜多村信節著
文化十二年(一八一五)

○今年牽牛花流行出、是は下谷御徒町通二大番与力ニ而谷七左衛門といふ人の母、草花植作る事上手ニ而、桜草など異品多く作り出、又朝貌を多く植て、種々の花出来たるを、細き竹に多く切かけをなし、水を入れ、朝貌の異花を一輪つゝ挿し、其花活筒を懸る料に、葭の小屏風を作りて、彼竹筒を掛并べ、屏風畳ても花に障らぬ様に作り、人の望むに任せて貸遣したり、かくて程なく流行たる也、又上之方は江戸より異品之種贈れるも、此人大坂に在番したる其序也とぞ、

103 朝顔異鉢のもの七百余種に及べば悉くは記しがたし

『あさかほ叢』巻之上
四時庵形影著
文化十四年(一八一七)
図版20・45

凡例

一、此小冊を撰むのはじめ、異鉢百品と数を定たれば、稿なりて後見たるものを、今年来年の変生を集めて次で后篇を出す

一、此百品の内、極黄と黄絞とは形象ごといと同じものから今年変生の極奇品なれば、別に図を出して二種とす、其余かたち同じきものはすべて一品を出して、傍に何々の絞り、何々の色、或ハ黄葉、葉絞り、いさはなどゝしるして再出せず

一、常躰丸花の朝かほといへども、或ハいさはあり、或ハ黄葉あり、其花色の如きも一やうならず、五色、各濃薄あり、絞りにさまゝありて、こまかに弁ずる時ハ丸花の一種の變化凡貳百余品、異躰のもの都て七百余種に及べは、ことゝくはしるしがたしとす

一、こゝに花葉の形帖はことゝく写生にしていさゝか違はずといへども、其着色に至りてハ丹青の及ぶべきにあらねば、たゞよく其物と相似たるのみ

一、奇品においてハ必実止らず、或ハ実止りても其種にして其物に生ぜずして、違生するあり、此故に秘伝を巻末に附して、同好士に告といふ

104 朝顔の品々は星の数えるとも尽くすべからず

『あさかほ叢』巻之下

四時庵形影著

文化十四年（一八一七）

図版20・45

自序

そも草木を翫ふの例を思ふに、もろこしには唐の穆宗のころ長安の

士女春を探りて花を闘ハしめ、我朝にハ寛平の御時、菊をもてあそひて歌相撲を催し給ふとそ、彼の菊花は万葉のいにしえにしらすして、人皇五十九代宇多帝の歡慮より其名世にきこゆ、朝かほは万えふのいにしへより名にハ呼れなから秋の七種に数まへられたれハ、ひとり栄花の時をもまたすはかなかりし、今や四方の海浪静にふく風も枝をならさる事ふた百とせに余り、人民いぬるに安く、夏は枕を高うして郭公をきゝ、冬は衾の穴より雪を覗き、春の花にあふき、秋の月にうなつき、四序たのしますといふ事なし、寔に昇平ハ不易にして變化は物の流行に移る、さきに橘といふものはやりて貴賤これを市に争そひもとめて方金の隅を倒し、小判の腰を折く、けだし流行ハ造化の變化にして變化はものゝ盛衰なるより、かれもいっしか捨てておのかむかしも忍ハしかたしに、頓て石菖蒲に氣根を尽し、万年青の葉の世に至る、こりなからさくら草の艶なるさかりをたに待たてやみぬ。今たひ朝兒は一朝の盛りをえて津の国難波の富家・饒民、貴となく賤となく僧となく俗となく、これをもてあそひてすまひになすらへ浪華のよしとひあしゝと定めて勝負をあらそふ事こゝに三とせハかり也けり、さるを東都にハこれを市に鬻く者あるは、独り種をうゑてひとり楽しむ家ハおほけれど、さなから流行としも聞へ、されハ是か好士も時にあはさる事久し、爰にハ去年の秋中行ハれつ、通して尊卑のもてあそひとなれることハ、此秋を初めにして文中の九日ハ浅草牛頭天王の別当大円精舎にこれか花すまひをそ催しける、かかりけれハ、あさかほの品々ハ月々に数そひてあまつ星のかそふるともつくすへからず、其価は日にそひて、雲梯をも登りつべし、さりや江都に翫ふもの今凡七百余品、予

か見るところのものワつかに一々にうつして五百余种、各々形葉を異にし、艷色をことにす、其容ちをことにするものハ象をもて知らしめ、色をことにするものは筆をもていはしむ、号て朝顔叢といふ、書画拙うして容色つぶさにわきかたからんものは監察し給へとしかいふ

千時文化丙子とし中秋日

四時庵
形影述

105 朝顔の花形の異様を競って集会を催し、顔価の高下を論ず

「我衣」
加藤曳尾庵 著
天保九年（一八三八）
関連図版 20・45〜47

四五年以来薺大に流行して、作り方によりて色々の花形あり。大輪あり、小輪あり。大輪は方五寸に及ぶ。こんちりめん、千羽鶴杯と其花形を名目にして、其色も異様也。不思議成は、今年も予が庭に常の朝兒を植しに、其花変じて様々に咲たり。其中に斯の如くに咲たる物一種出来たり。はだは紺にして、ぬけ出し



物は白く、又其中より細きしべの白く出たり。余り珍ら敷、人々にも見せければ、しりたる人の、是は此節専ら流行する茶台と号する花形也と語れり。とまれかくまれ去年咲し常の種を植しに、かく異形に咲たるは世の氣候杯に連、薺の変化する時節成かと思わる。予若年の比、さくら草のいろ／＼に変じたる物流行せしが、是も種は

一つにて年々に変化せし物にて、自然の事なりと語りしを覺たり。去ば此比、薺のかわり物もやはり此桜草の類ならんか。又一説には、種を夏の中赤土にくるみ炎天にほし付、其後色々の事をして蒔付、菌を加減してよく培養しおけば、花形様々に咲出ると、薺作る人の語りし昔聞り。去ば世上の狂人等、花形の異様を競んと向嶋両国辺におひて集会を催し、顔価の高下を論ず。嗚呼うつけたる人心也。

106 朝顔の奇品、異様にして愛玩するに足らず

『東都歳事記』卷三・六月
斎藤月岑 他編著・長谷川雪旦・雪堤画
天保九年（一八三八）
関連図版 20・45〜47

牽牛花○所々植木屋 寺島村百花園 其外多し

文化の末より此花の奇品を玩ぶ事世に行れ名花も随て少からず、又培植事漸に巧にして千態万色あらざる物なし、都鄙の好人これが為に筵会をまうけ、早旦に数多の盆花を携へ来り優劣をさだめてあらたに名を儲けぬ、いづれも形珍らしといへとも多くハ異様のものにして愛玩するに足らず、されハ四五年の間にして文政の始より絶しも宜なり○往還朝兒鉢売ありく

107 百種の朝顔、門を入りて長さ六町余連なる

「十万庵遊歴雜記」四編之下

釈敬順著

文化十一年（一八一四）

貳拾 深川藪の内あさがほの逍遙

一、夫繁華の土地は、何国も人氣推移やすき中にも、取分江戸の倣とて、四時流行の品々若干あるが中にも、此五七年以来藪の花を弄ぶ事、都鄙ともに甚しく、爰にも彼処にも、中夏の未より朝顔の種類ことごとく数を尽して植ならべ、もろ人の見物を許し慰み翫ぶ事とはなりぬ、則ち此編の上巻第拾壺の条下に述置たる、去し文化二己の卯年七月、館万鯉、鈴木忠治、加藤弁助等を同道し、松平播州の造れし藪見物に罷りしに、方凡壺町余の平原の中に、藪の一種を幅おのく三尺づゝの垣に這せ、間々を壺尺づゝも明け、源氏六十帖の名にかたどり、その員彼は八十余种、左右に植ならべぐるく、と中路に細道をひらき、中央に藪を以つて茶店の四阿屋を送りし様面白く、いまだその頃は斯夥しき数を尽して咲揃ひしは、外々に多くはなかりし程に、最珍敷愛しかば、聞人みな通伝を需て見物に罷り、流石に大名也など評判せしが、次第に人氣推移りて我もく弄ぶ、今は中夏の未より、夷則の中頃まで爰にも彼処にも藪を珍重し、評判区々なる中にも、江戸第一と聞えたるは、藪の内の朝顔なるべし、去ば藪の内といふ処は、深川靈巖寺後通川向ふにして、何人の下やしき幾つや打抜けん、広き事方六七町、中夏の未より見物に罷る人少からず、殊更土地川筋にして舟都合よく、閑寂として眺望の

風色珍しく、市中をはなれて家居も扶疎なれば、野外に遊ぶ心地して逍遙する人多し、去ば件の屋敷の木戸にひとしき門を入れてより長さ六町余、両側藪ならずといふ事なし、凡あさがほの員百余種花各変り葉も同じからで、縁白きあり、斑入あり、堅横に白き筋あるあり、縮みたるあり、巻たるあり、厚き、薄き、濃うすき、裂たる、小き、大きな葉形みな異にして更に同じからで、花にいたりては極瑠璃絞り浅黄白、本紅大輪又は花の裂たる藪の延たる、或は藪の式つ出たる、白き瑠璃の斑入たる、本紅絞り、扱は花の縷たる、抱たる、又は花幾つにも細く裂たる、皆一々見たる名有て愛するに堪たり、就中本紅といふもの、昔は彼染色にいふ、赤鳶の色の濃き薄き二種ありて、適々ほんのりと赤きは最珍敷珍重せしが、好事に弄ぶ今は更に光明朱の如き色の赤き藪ありて、葉あればこそ朝顔なる事をしる、又大輪に及んでは九寸に及ぶもありて、百有余種の花の色々言語にたえて、朝なく、に咲替て盛り久しき花ぞと読転ぜしも理かや、景風の末より夷則の末南呂の初まで、朝なく、人の集ふ様は一都会といふべし、斯世上に流行して人氣に連れ色々の珍花を造り出すといへども、古今藪の極品は瑠璃にとゞまりて、目覚る心地ぞせらる、彼五色墨の宗瑞が菊花を誉て、茶色く、白菊に目の戻りけり、といひしぞ宣也、斯は世上一図に流行して弄ぶより、自然と藪に色々の変り花も咲にやあらん、左はいへ繁華の土地は、兎角古今ともに人ごゝろ移りやすければ、頓ては又廃れなん、既にむかし斑入のいさ葉の鉢植を珍重して弄びしが、五六年にして廃れ、その後さくら花流行し、或は花菖蒲を弄び、又橘の鉢植に拔群の尊卑ありて、都鄙ともに大に奔走せしが、五七年にして廃れ、又菊の大輪

高造り形造り、或は印籠に植る程の小菊作るを愛し、又はもろくの石菖類など、時々流行せしが、みな寂れて弄ぶ人少なし、むかし古銭古瓦異物などを愛して、処々に珍物茶屋などいふ店をひらきて諸人珍重せしが、各廃れて此頃予が幼年のむかし行れし、投扇興といふもの、近頃世上にもてあそぶ人あり、繁花の土地は存亡みな斯のごとく、彼書経にいえらく、人は古きを求べし、器は古きを求むべからず、是新しきをすと聖経にしめしたれど、末世の今は器物は時代を尊んで珍重し、人は老たりとて用ひねば、古法を替先格をうしなひ、古例を欠く事多し、みな是時世の倣ひとて色々に物事押移る事になん、されば今藪の内の屋敷の奥には百堀と号して、大なる池二ツ三ツ堀開き潮水を引、川水を堰入つゝ鰻、海老、鮠の類若干を成立て釣らしめ、又鯉、鮒、鰻の類を釣する池も広ければ功者なる人は此頃大鰻三本まで釣上げしと巷談まち／＼にいひあえり、但し小日向よりは二里の道に遠ければ、寅の半刻ばかり出宅して誘引合つゝ、水道橋にて卯の刻の鐘を聞、鎌倉河岸にて夜明となり、大橋の茶店に憩ひ、頓て藪の内へ逍遙し、富が岡八幡をぶらめき、舟に棹さして終日江戸天神菰寺等を見めぐりつゝ両国川にして納涼せしは面白くぞ思ひ侍る、

108 奇花異葉の朝顔を楽しむ

『江戸名所花暦』巻三
岡山鳥編・長谷川雪旦画
文政十年（一八一七）
関連図版20・45〜47

○牽牛花

下谷御徒町辺 朝兒は往古より珍賞するといへとも、異花奇葉の出きたりしハ、文化丙寅の災後に下谷辺空地の多くありけるに、植木屋朝兒を作りて種々異様の花を咲せたり、おひ／＼ひろまり、文政はしめの頃ハ、下谷、浅草、深川辺所々にても専らつくり、朝兒屋敷など号て見物群集せし也

109 めづらしき桜草やあらんと採しもとむるの徒あり

「十万庵遊歴雜記」初編之下
釈敬順著
文化十一年（一八一四）
関連図版40

四拾九 豊島郡徳丸が原の煎茶

一、武州豊島郡徳丸が原は、中仙道板橋の駅より西の方壺里半にあり、即ち志村の西にして、戸田川のわたし場へ往来する街道の西側の平原これ也、此原渺茫として川ばたより南の方へさして南北の広さ凡六十余町、練馬の往還までつゞくとかや、又東西の広さ五十余町、人家遠く、毎度大筒の稽古の見分、又は鹿狩のならし駄弓練馬

の手合せ等ありて、その砌は公より尊卑輕重の諸役人幕打まはし、未明より此平原に集ひ修練ある、その行粧実にも勇しく、又往還より東裏手の曠野は、戸田の川縁より志村の後蓮沼村かけて、春は一円に桜草生じ、渡世に営むものは、日終爰に採草し、土鉢に植て世上を売あるくはこれ也、此桜草をとるに、誰咎むる人なければ、此花を愛する人は三月の初めより、おの／＼集ひ来りて遠近の平原にこゝろ置なく採草し、籠を荷はせめづらしき桜草やあらんと採し需るの徒あり、又は酒の限り酔を尽してたのしむもありけり、愚老むかし荒川五郎兵衛といひし人御鳥見を勤役し、志村の御役宅にありし節は度／＼爰に來り、旭亭子、似鹿^{ジロク}、紫山、野弦等と終日逍遙し、詩歌になぐさみ、発句いひ捨し事もありしが、路傍のれんげ草すら一面に咲そろひし風情は一品なるに、ましてや桜草の広き平原に紅白の色をまじへ、こゝろまゝに咲し風情は得もいはれず、その佳興絶品といふべし、(後略)

110 千住・染井・巢鴨植木屋、桜草を盆に移して都下に商つ

『東都歳事記』卷一之下・二月
斎藤月岑 他 編著・長谷川雪旦・雪堤画
天保九年(一八三八)
関連図版40

桜草〇立春^{ふし}方七十
五日頃 戸田の原^{戸田の川上}に添^つたる原千住、染井植木屋、巢鴨植木屋、
其余所々、近來紅白数品あり、盆に移して都下に商ふ、価尤貴し

111 福寿草に八王子より出づる一種よろしきあり

「奴師劣之」
大田南畝 著
文政四年(一八二二)

(十八) 福寿草^{ふくじゆうそう}に八王子より出づる一種よろしきあり。巢鴨^{すがも}の植木屋弥三郎にて見^みし事ありき。弥三郎は斎田氏なり。近頃此種^{たふ}多くなりて所々にあり。

112 なでしこ咲きの福寿草、愛すべき品なり

『草木奇品家雅見』卷之中
繁亭金太 撰輯
文政十年(一八一七)
図版48-2

山田屋ハ本所

ほうおんじばし ほうりあきうど
法恩寺橋の辺商家也

図する福寿草ハその花形なでしこの如し

(花名札)「なでしこ咲 福寿草」

岩れんげはふく輪^{りん}を深くかけて艶^{つや}やかなり

(花名札)「ふくりん 岩れんげ」

二品とも愛すべき品なり

113 花菖蒲、未曾有の奇品花開きたり

「花菖培養録」
松平定朝（眞翁）著
嘉永六年（一八五三）
図版44

世に花菖蒲と呼へるものあり、その形状燕子花に類して葉尺長く花亦相似の三英六英色種々に変し、夏時にひらけり、宿根して来歳亦花を競ふ、中に実生の生々するありて未曾有の珍花を吐り、（中略）
諸実生初咲の時邂逅八重千英の花形現する事あれとも翌夏三歳草木になりて咲時ハ花形乱の初咲の姿を失へり、藻蓀に千英の花形ありて年々歳々異なる事なけれども類草といへとも花菖蒲ハ稀に其形をあらわすといへとも全形にあらず、去し夏実生初咲の中八重の形状含たるはなを撰ひ多く培養せしに、翌夏咲たるをみるに一草のミ花形十倍して未曾有の奇ひん花開きたり、六十余とせ此花形に心酔せしか漸成就せり、嘻人力の造化に冥合せるか遂に奇品なるにいたれり（後略）

114 石斛の流行は世の人の良く知るところなり

「長生草楊貴妃」
嘉永五年（一八五二）
図版39

石斛や めくり逢たる 一ツ家 満磨
夫石斛の流行は世の人の能しる所なり、こたひ竹ヶ鼻某所持せる山

出し石斛の稀なるを予にあたへけるゆへ、今般楊貴妃と銘して図をなさしめ、披露するはまことに和国無双の珍品ともいふは是なりけり

嘉永五年子卯月

115 文化七、八年の頃より、石菖蒲の異品を遊ぶ事盛に行れる

『増訂 武江年表』
斎藤月岑他著
文化年間（一八〇四〜一八）記事

○文化七八年の頃より、石菖蒲の異品を遊ぶ事盛に行れ、嚮に行れし橘に倍し、貴賤之を賞玩す、
所謂兩根三種、黒龍、黄金、虎鬚、劍脊、
絨、虎の巻、残雪、昼衣、天が下、天鷲
山、通糸青葉、斑入など品々の名あり

116 奇品多しといへども、この五木は昔より稀なる品なるべし

「南天奇品写生五木」
大岡雲峰画・台谷翠雲書
文政四年（一八二二）
図版41

南天 奇品 写生五木

世に寄品多しといへども此五木はむかしより稀なる品なるへし、されバ其姿を世々に残さむことを諸君子のすゝめに応し雲峯先生の筆のすさみを希ふる品

文政辛巳仲秋

古人永嶋連

四谷

大橋集木園樹之

台谷翠雲書

印

印